

一般国道49号
揚川改良関係発掘調査報告書IV

向大浦遺跡
上空野中丸遺跡

2011

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道 49 号
揚川改良関係発掘調査報告書IV

むかい おお うら
向 大 浦 遺 跡
かみくう の なかまる
上空野中丸遺跡

2011

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道49号揚川改良」は、東蒲原郡阿賀町津川から同町黒岩に至る全長7.5kmの道路です。一般国道49号は太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしています。

このうち阿賀町清川から同町谷花地区に至る区間は急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫り、通行規制区间に指定されています。これまで様々な対策工事を実施してきましたが、抜本的な対策は困難であり道路管理にも限界があることから、阿賀野川の左岸を通る別ルートを建設して危険を回避することになりました。

本書は「一般国道49号揚川改良」の建設に伴って実施した阿賀町津川字向大浦2853ほかに所在する「向大浦遺跡」と同町津川上空野中丸4425ほかに所在する「上空野中丸遺跡」の発掘調査報告書です。

特に向大浦遺跡では、「鹿瀬軽石質砂層」の上・下層から縄文時代と平安時代の遺構・遺物を検出しました。下層からは縄文時代前期以前の陥穴群を検出し、当該地区が狩り場であったことが分かりました。上層からは縄文時代中期前葉や平安時代の遺構・遺物を検出しました。平安時代の竪穴住居2基の検出は、当該地区において住居の全体を調査できた数少ない例で、近隣の上野東遺跡や大坂上道遺跡同様、比較的高位の河岸段丘上に活動した当時の人々の暮らしぶりを知る上で希少な資料となります。

この発掘調査報告が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に地元の方々や区長並びに阿賀町教育委員会・同町商工観光課には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所・同津川出張所には、調査に際し格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成23年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字津川字向大浦 2853 ほかに所在する向大浦遺跡、同じく大字津川字上空野中丸 4425 ほかに所在する上空野中丸遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道 49 号揚川改良の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。
- 3 調査は県教委が主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）に委託し、埋文事業団の指導・監督のもと株式会社ノガミが平成 21 年度に行った。発掘調査面積は向大浦遺跡が延べ 8,000m²、上空野中丸遺跡が 500m² である。
- 4 整理及び報告書作成に係る作業は、埋文事業団の指導・監督のもと株式会社ノガミが平成 21・22 年度に行った。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 6 遺物の注記は、向大浦遺跡の省略記号を「ムカイ」、上空野中丸遺跡の省略記号を「カミク」として、その後に遺構名、出土地点や層位を続けて記した。
- 7 本書で示す方位は、すべて真北である。
- 8 遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 9 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また引用文献は筆者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 遺構図のトレース及び各種図版に関しては、株式会社セピアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトにより作成し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 11 調査成果の一部は『埋文にいがた』70 号、『平成 21 年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』で公表しているが、本報告書をもって正式とする。
- 12 本書の執筆は鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）の指導のもと、金内 元（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部 調査員）、小村正之（同 調査員）、谷岡康孝（同 調査員）、新井 潔（同 調査員）、村端和樹（同 調査員）がこれに当たり、編集は金内が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 1…鈴木、2・3…金内
第Ⅱ章 1・2…谷岡、3…新井
第Ⅲ章 1～3…小村、4A・B…金内、4C1)・2)…小村、4C3)～5)・4E2)…新井、4D・4E3)…谷岡、4E1)…小村・新井、5A・B・D…金内、5C…村端、6…金内
第Ⅳ章 1～4・5A・B・6…小村、5C…村端・小村
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

相沢 央 阿部 泰之 石川 博行 遠藤 佐 加藤由美子 立木 宏明 中島 栄一
野水 晃子 細野 高伯 水澤 幸一

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理の経過	2
A 試掘・確認調査	2
B 本発掘調査	3
C 整 理	5
3 調査・整理体制	5
A 試掘調査・確認	5
B 本発掘調査・整理	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 鹿瀬軽石質砂層の堆積について	8
3 歴史的環境	9
第Ⅲ章 向大浦遺跡	13
1 遺跡の現況と微地形	13
2 グリッドの設定	13
3 基本層序	13
4 遺 構	16
A 概 要	16
B 記述方法	16
C 上層 遺構（平安時代）	18
D 上層 遺構（縄文時代）	22
E 下層 遺構	23
5 遺 物	27
A 概 要	27
B 土器・土製品	29
C 石器・石製品	33
D 鉄 淬	37
6 ま と め	37
A 陷阱について	37
B 縄文時代中期前葉の土器について	39
C 東蒲原郡内における平安時代の集落について	40
第Ⅳ章 上空野中丸遺跡	42
1 遺跡の現況と微地形	42
2 グリッドの設定	42
3 基本層序	43
4 遺 構	44
A 概 要	44
B 遺 構	44

5 遺 物	45
A 概 要	45
B 土器・陶磁器	45
C 石器・石製品	45
6 ま と め	46
《要 約》	47
《引用・参考文献》	48
《遺構観察表・遺物観察表》	50
別表 1 SI11 ピット観察表	50
別表 2 SI12 ピット観察表	50
別表 3 SB64 柱穴観察表	50
別表 4 ピット観察表	50
別表 5 縄文土器観察表 (1)	51
別表 6 縄文土器観察表 (2)	52
別表 7 土製品観察表	52
別表 8 古代・中世土器観察表	52
別表 9 縄文時代石器観察表	53
別表 10 古代砥石観察表	53

挿 図 目 次

第 1 図 一般国道 49 号揚川改良 (揚川道路) 路線と 調査遺跡位置	1	第 10 図 遺構の平面・断面・覆土の分類	17
第 2 図 向大浦遺跡試掘・確認調査トレンチ位置図	2	第 11 図 埋穴グループ別模式図	23
第 3 図 上空野中丸遺跡試掘調査トレンチ位置図	3	第 12 図 下層 縄文土器分布図	28
第 4 図 向大浦遺跡調査区模式図	5	第 13 図 上層 縄文土器分布図	28
第 5 図 遺跡の位置と津川盆地段丘平面図	7	第 14 図 上層 土師器分布図	28
第 6 図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置	8	第 15 図 上層 須恵器分布図	28
第 7 図 周辺の遺跡	11	第 16 図 下層 石器分布図	29
第 8 図 グリッド設定図	13	第 17 図 上層 石器分布図	29
第 9 図 基本層序	15	第 18 図 グリッド設定図	42
		第 19 図 基本層序	43

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡	10	第 3 表 石材別石器器種数	34
第 2 表 周辺遺跡の基本層序	14		

図 版 目 次

〔図面図版〕	
図版 1 向大浦遺跡・上空野中丸遺跡の調査位置	
図版 2 向大浦遺跡の調査範囲と周辺の地形	
図版 3 向大浦遺跡 遺構全体図 1 (上層)	
図版 4 向大浦遺跡 遺構分割図 1 (上層)	
図版 5 向大浦遺跡 遺構個別図 1 (上層) SI11	
図版 6 向大浦遺跡 遺構個別図 2 (上層) SI12	
図版 7 向大浦遺跡 遺構個別図 3 (上層) SB64、 SK25・29・30・36・P33・47	
図版 8 向大浦遺跡 遺構個別図 4 (上層) SK56・ 57・73・SX62・P15・21・23・24・26・ 28・38・43・44・45・49・52・54・59・ 61	
図版 9 向大浦遺跡 遺構個別図 5 (上層) P3・50、 SRI・4	
図版 10 向大浦遺跡 遺構全体図 2 (下層)	
図版 11 向大浦遺跡 遺構分割図 2 (下層)	
図版 12 向大浦遺跡 遺構個別図 6 (下層) SK016・ 017・018	
図版 13 向大浦遺跡 遺構個別図 7 (下層) SK002・ 011・012・013・014・021	
図版 14 向大浦遺跡 遺構個別図 8 (下層) SK001・ 003・015・019・020	
図版 15 向大浦遺跡 沢セクション	
図版 16 向大浦遺跡 縄文土器 1	
図版 17 向大浦遺跡 縄文土器 2	

- 図版 18 向大浦遺跡 繩文土器 3・土器片円板
図版 19 向大浦遺跡 古代・中世の土器
図版 20 向大浦遺跡 石器 1
図版 21 向大浦遺跡 石器 2
図版 22 向大浦遺跡 石器 3

- 図版 23 向大浦遺跡 石器 4・砥石・鉄滓
図版 24 上空野中丸遺跡の調査範囲と周辺の地形
図版 25 上空野中丸遺跡 遺構全体図
図版 26 上空野中丸遺跡 遺構個別図
図版 27 上空野中丸遺跡 土器・石器・石製品

【写真図版】

- 図版 28 向大浦遺跡 調査区全景・基本層序
図版 29 向大浦遺跡 SI11
図版 30 向大浦遺跡 SI12
図版 31 向大浦遺跡 SB64
図版 32 向大浦遺跡 SK25・36・29・30
図版 33 向大浦遺跡 SK56・57・73、SX62
図版 34 向大浦遺跡 P23・26・43・44・45・49・
52・54
図版 35 向大浦遺跡 P3・50・59・61、SR1・4
図版 36 向大浦遺跡 陥穴群全景、SK016～019

- 図版 37 向大浦遺跡 SK002・011・012・021
図版 38 向大浦遺跡 SK013・014・015・019
図版 39 向大浦遺跡 SK001・003・020、沢
図版 40 向大浦遺跡 繩文土器 1
図版 41 向大浦遺跡 繩文土器 2・土器片円板・古代・
中世の土器・石器 1
図版 42 向大浦遺跡 石器 2
図版 43 向大浦遺跡 石器 3・砥石・鉄滓
図版 44 上空野中丸遺跡 調査区近景・基本層序、
SK1・2
図版 45 上空野中丸遺跡 SK3・5、遺物

第Ⅰ章 序 説

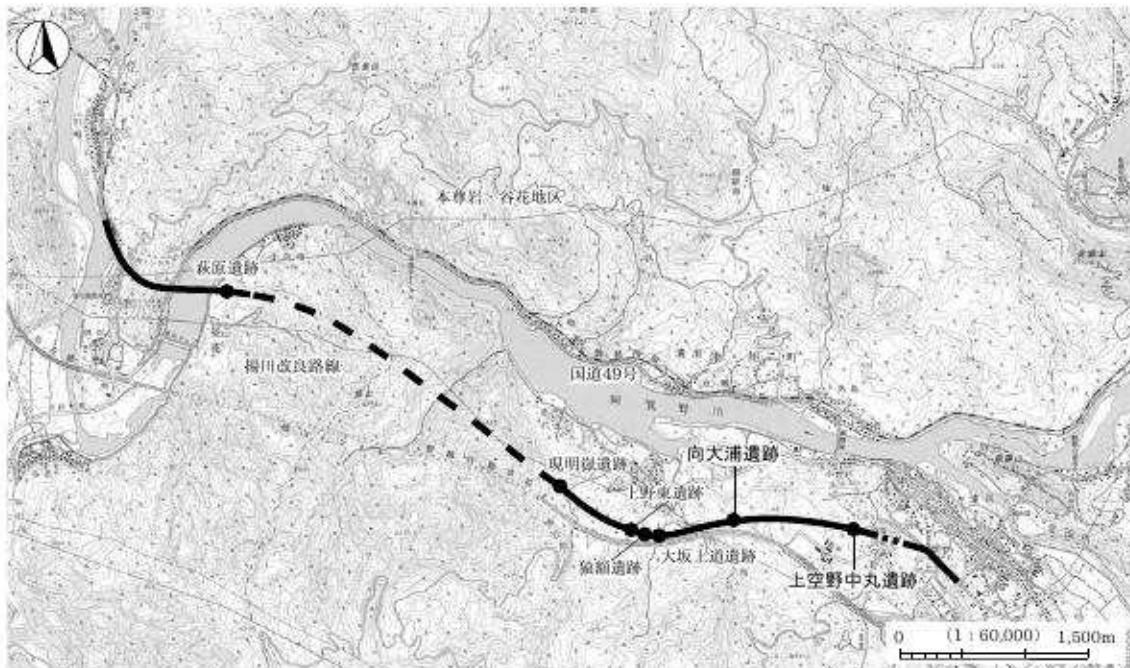
1 調査に至る経緯

「一般国道 49 号揚川改良（揚川道路）事業」は、阿賀町津川から同町黒岩に至る全長 7.5km の道路である。一般国道 49 号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路であり、磐越自動車道を補完するとともに、国道 49 号沿線市町と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。このうち阿賀町清川から同町本尊岩・谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫つており、この渓谷裾部に沿って JR 磐越西線と国道 49 号線が併走している。そのため、国道の線形が悪く、幅員も狭いことに加え、度重なる土砂災害・岩石崩落及び雪崩の危険に晒され、通行規制区間（連続雨量 150mm）に指定されている。

国土交通省（以下、「国交省」とする）はこの区間に落石防止擁壁の設置、岩接着、岩塊除去などの対策工事を実施し、落石探知センサー・テレビカメラの設置、斜面バトロール点検などの監視体制の強化に努めてきた。しかし、抜本的な対策とはならず、道路管理にも限界があることから、対岸の阿賀野川左岸に別ルートを建設し、危険を回避することとした。

昭和 53（1978）年に揚川改良（揚川道路）が事業化され、平成 12 年度に工事用道路の建設、平成 13 年度に道路用地の確保等に着手した。

揚川改良（揚川道路）内の埋蔵文化財の分布調査は平成 13 年春に実施し、同年 6 月から試掘調査を開始した。向大浦遺跡に関わる試掘・確認調査は平成 18・19 年に、上空野中丸遺跡に関わる試掘調査は平成 20 年に行い、両地点とも縄文時代や古代の遺構・遺物を検出したことから小字名を付して遺跡登録した。両地点は平成 22 年度に工事着工となったことから、平成 21 年度に発掘調査を実施することになった。



第 1 図 一般国道 49 号揚川改良（揚川道路）路線と調査遺跡位置
(国土地理院「津川」1:50,000原図 平成11年発行)

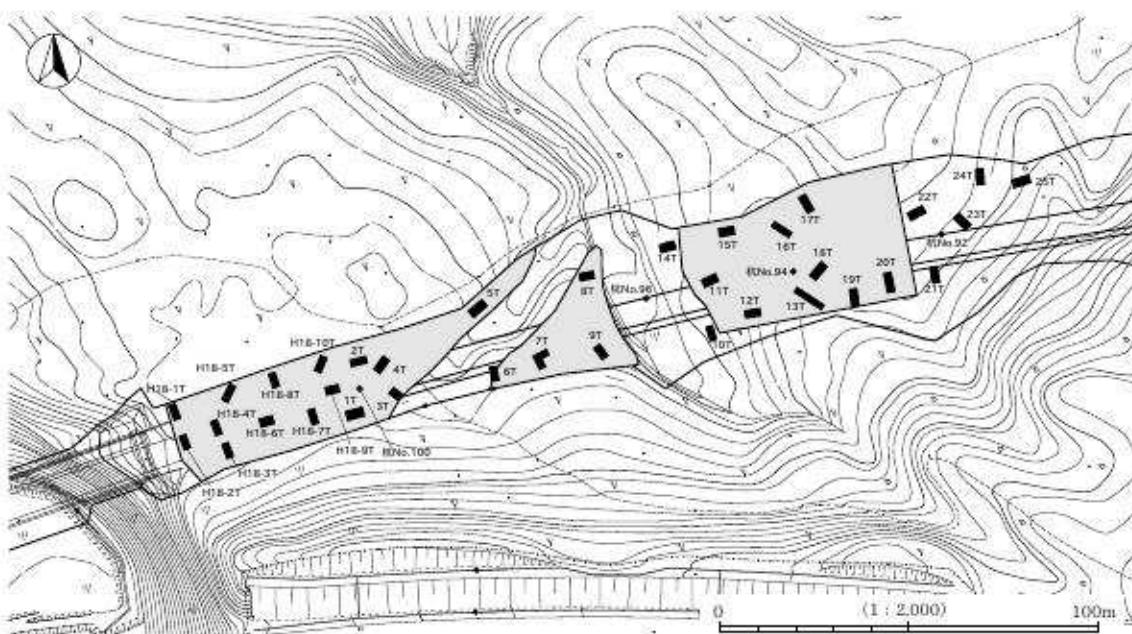
2 調査と整理の経過

A 試掘・確認調査

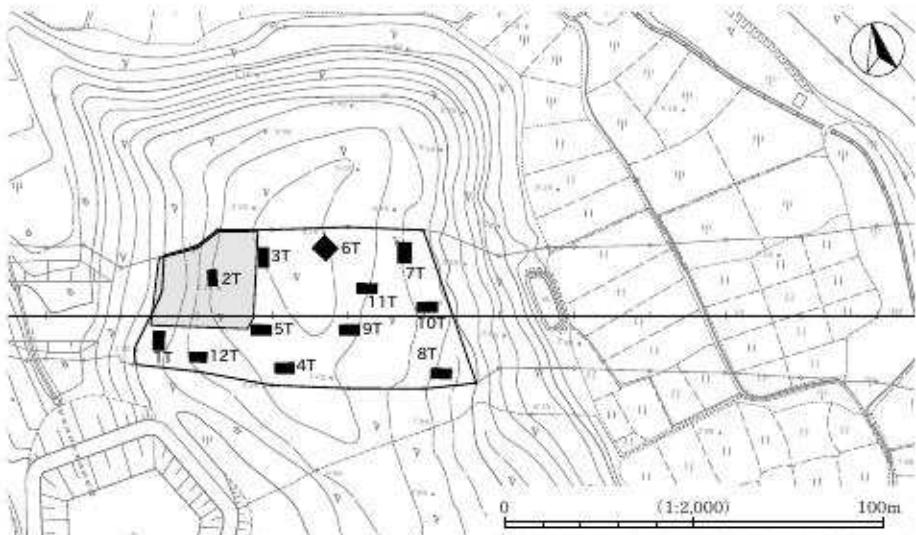
向大浦遺跡　試掘調査は平成18年10月2日～10月13日に実施した。調査対象範囲に試掘坑（トレンチ）を任意に設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した（第2図）。この結果、トレンチH18-6～8・10の鹿瀬軽石質砂層上層で縄文時代中期初頭から前葉の土器及び不定形石器が出土し、遺跡であることが判明した。しかし遺物の出土量は少なく、遺構も検出できなかつたため、東側の確認調査を行った後、この地区の本発掘調査必要面積を決めることとし、この時点では判断を保留とした〔田海・田中2007〕。

東側の確認調査は平成19年4月23日～5月16日に行った（第2図）。トレンチ2・7・13・16・20の鹿瀬軽石質砂層の下層で土坑等を検出し、トレンチ1～3・8・9の鹿瀬軽石質砂層の上層で縄文時代中期前葉及び後期前葉の土器・石器と平安時代の土師器等が出土した。平成18・19年の試掘・確認調査の結果を踏まえ、新遺跡の存在が明らかとなり、中心杭No.100付近の字名「向大浦」から「向大浦遺跡」と命名した。本発掘調査必要面積は、杭No.92付近から杭No.95付近の舌状に張り出す尾根上の1,260m²と杭No.96付近から始まる舌状の尾根から杭No.101+15m付近間の2,740m²を合わせた4,000m²とした〔田海・田中2008〕。

上空野中丸遺跡　向大浦遺跡から東側約1km先に位置する工業団地付近の試掘調査は平成20年11月4日～11月14日に行った（第3図）。トレンチ2で土坑1基を検出し、トレンチ2・6・7・9～11・13で縄文土器・石器及び土師器等が出土したが、遺物包含層は確認できなかった。この結果を踏まえ、新遺跡の存在が明らかとなり、字名「上空野中丸」から「上空野中丸遺跡」と命名した。本発掘調査必要面積は500m²とした〔田海2009〕。



第2図 向大浦遺跡試掘・確認調査トレンチ位置図 (S=1/2,000, □は本発掘必要範囲)



第3図 上空野中丸遺跡試掘調査トレンチ位置図 (S=1/2,000, □は本発掘必要範囲)

B 本発掘調査

1) 上空野中丸遺跡

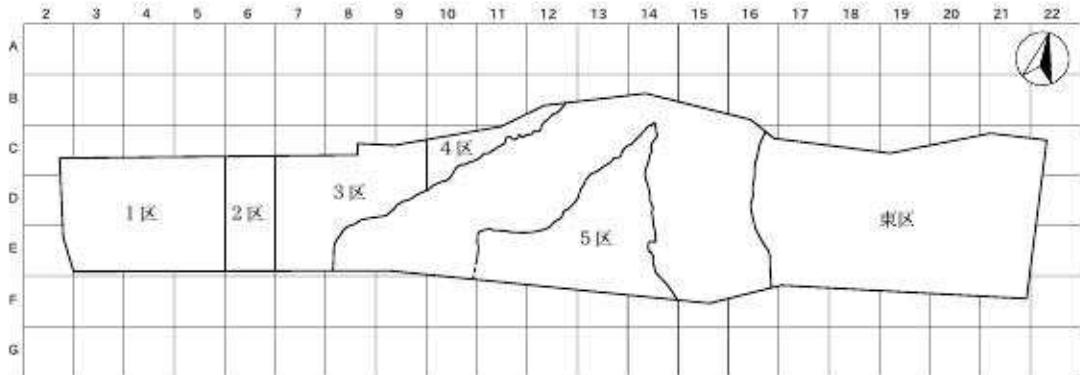
- 7月9日 バックホーによる表土（I～III層）掘削を開始する。遺物包含層が確認できないため、遺構検出面（VI層上面）まで掘削した。
- 7月15日 作業員を投入して遺構検出を行い、その後遺構掘削調査も併行して行った。
- 7月22日 表土掘削を終了する。
- 7月30日 遺構検出を終了する。近世以降の土坑4基、溝3条、ピット5基を検出した。
- 7月31日 遺構掘削調査を終了する。
- 8月3日 全体写真撮影を行う。県教委の終了確認を受ける。
- 8月5日 平面測量を終了し、現地発掘調査はすべて終了した。調査面積は500m²である。

2) 向大浦遺跡

- 7月23日 調査区西側から東方向に向かってバックホーによる表土（I層）掘削を開始する。遺物包含層（II層）が残存していない部分は鹿瀬軽石質砂層（IV層）上面若しくは漸移層（III層）上面まで掘削した。
- 8月3日 2～14B～Fグリッド（1～5区）ではI層掘削を終了する。引き続き作業員を投入して、2～6C～Eグリッド（1・2区）の遺物包含層（II層）掘削を人力で行う。一部はII層が残存していないため、遺構検出も同時に行う。
- 8月18日 1・2区ではII層掘削及び遺構検出を終了する。2～5C～Eグリッド（1区）から縄文時代中期前葉の土器を伴う沢状の落ち込み2条を検出する。7～12B～Eグリッド（3・4区）ではII層掘削及び遺構検出を行う。
- 8月19日 1・2区では遺構及び沢状の落ち込みの掘削調査を開始する。
- 8月27日 12Bグリッド斜面部から縄文時代前期後葉の土器を伴う土坑1基を検出する。検出層位が鹿瀬軽石質砂層下の地山（VII層）であることから、本遺跡はIII及びIV層上面を遺構検出面とする上層とVII層上面を遺構検出面とする下層の、二層調査が必要であることを確認する。

2 調査と整理の経過

- 9月1日 3・4区ではⅡ層掘削及び遺構検出を終了する。7～9C・Dグリッド(3区)から平安時代の竪穴住居や土坑等の遺構がまとまって見られる一方、それ以外では遺構が希薄であることを確認する。
- 9月2日 3区では遺構掘削調査を開始する。16～22C～Fグリッド(東区)ではバックホーによるⅠ層掘削を開始する。
- 9月11日 1区では縄文土器を伴うピット1基を確認する。東区ではⅠ層掘削を終了する。
- 10月1日 調査担当1名、調査員1名追加。
- 10月9日 1・2区では遺構及び沢状の落ち込みの掘削調査を終了する。
- 10月13日 11～14C～Fグリッド(5区)及び東区ではⅡ層掘削及び遺構検出を行う。この結果、遺構は検出できなかった。
- 10月21日 3区では縄文土器を伴うピット1基検出。上層における縄文時代の遺構はピット2基のみで、残りの遺構は平安時代に属する可能性が高いことを確認する。
- 10月23日 3区では竪穴住居のカマドを除く遺構掘削調査を終了する。8～11C～Eグリッド(3・4区)斜面部ではⅡ層掘削及び遺構検出を行う。遺構は検出できなかった。東区ではバックホーによるⅢ～VI層掘削を開始する。
- 10月28日 東区ではⅢ～VI層掘削を終了し、その後下層の遺構検出を行う。土坑2基、風倒木1基を検出する。土坑の内1基は覆土の性質から上層の遺構と判断した。
- 10月29日 3区では竪穴住居のカマド掘削調査を終了した。竪穴住居の完掘状況の写真撮影を行う。
- 11月5日 12Bグリッド斜面部及び東区では下層の遺構掘削調査を開始する。
- 11月7日 現地説明会を開催する。参加者140名。
- 11月9日 3区では竪穴住居の床面除去を行い、床面下に遺構がないことを確認する。
- 11月13日 12Bグリッド斜面部及び東区では下層の遺構掘削調査を終了する。1～5区では上層遺構の航空写真撮影を行う。平面測量を終了し、上層の発掘調査はすべて終了した。
- 11月19日 1～4区ではバックホーによるⅢ～VI層掘削を開始した。
- 11月23日 1～4区ではⅢ～VI層掘削を終了し、下層の遺構検出を行う。5～7C～Eグリッド(1～3区)から縄文時代前期後葉以前の陥穴12基と風倒木1基を検出した一方、それ以外では遺構は検出できなかった。5区ではバックホーによるⅢ～VI層掘削を開始する。
- 11月24日 1～3区では下層の遺構掘削調査を開始する。5区ではⅢ～VI層掘削を終了し、下層の遺構検出を行う。縄文時代前期以前に形成されたと考えられる地割れ痕を数条検出したものの、遺構は検出できなかった。
- 12月2日 1～3区では下層の遺構掘削調査を終了し、全体写真撮影を行う。
- 12月4日 1～3区では陥穴をバックホーによって截ち割り、掘り残しがないことを確認する。また3・5区ではVII層を部分的に掘り下げたが遺構・遺物とも検出できなかった。
- 12月7日 県教委の終了確認を受ける。平面測量を終了し、下層の発掘調査はすべて終了した。調査面積は上層4,000m²・下層4,000m²で、延べ8,000m²である。



第4図 向大浦遺跡調査区模式図 (S = 1/1,500)

C 整 理

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記は平成 21 年 9 月から、遺物の接合・復元は 11 月から、それぞれ本発掘調査と並行して現地事務所で行った。向大浦遺跡の本格的な整理作業は、平成 21 年 12 月から平成 22 年 3 月にかけて、株式会社ノガミ亀田整理所で実施した。上空野中丸遺跡の本格的な整理作業は、平成 22 年 9 月に、株式会社ノガミ亀田整理所で実施した。主な流れは下記のとおりである。

内 容	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	9月
図面修正				→				
水洗・注記			→					
接合・復元			→					
実測・拓本				→				
遺物写真撮影					→			
図版作成（向大浦）					→			
原稿（向大浦）						→		
図版作成（上空野中丸）							→	
原稿（上空野中丸）							→	
編集・校正								→

3 調査・整理体制

A 試掘・確認調査

[向大浦遺跡]

調査期間 平成 18 年 10 月 2 日～平成 18 年 10 月 13 日

平成 19 年 4 月 23 日～平成 19 年 5 月 16 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 波多 俊二（事務局長・平成 18 年度）

木村 正昭（事務局長・平成 19 年度）

管 理 斎藤 栄（総務課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

3 調査・整理体制

調査担当 田海 義正（調査課課長代理）

調査職員 田中 一穂（調査課嘱託員）

〔上空野中丸遺跡〕

調査期間 平成 20 年 11 月 4 日～平成 20 年 11 月 14 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 木村 正昭（事務局長）

管 理 斎藤 栄（総務課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査統括 藤巻 正信（調査課長）

調査担当 田海 義正（調査課課長代理）

B 本発掘調査・整理

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 木村 正昭（事務局長）

管 理 斎藤 栄（総務課長）

庶 務 松原 健二（総務課班長）

調査統括 藤巻 正信（調査課長）

調査指導 鈴木 俊成（調査課課長代理・平成 21 年 9 月 30 日まで調査担当兼任）

調査組織 株式会社ノガミ

調査指導 戸根与八郎（埋蔵文化財調査部調査室長）

現場代理人 中里 幸道（埋蔵文化財調査部）

〔向大浦遺跡〕

調査期間 平成 21 年 7 月 23 日～平成 21 年 12 月 7 日

整理期間 平成 21 年 12 月 8 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査担当 金内 元（埋蔵文化財調査部調査員・平成 21 年 10 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日）

調査員 小村 正之（埋蔵文化財調査部調査員）

谷岡 康孝（埋蔵文化財調査部調査員・平成 21 年 8 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日）

新井 潔（埋蔵文化財調査部調査員・平成 21 年 10 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日）

〔上空野中丸遺跡〕

調査期間 平成 21 年 7 月 9 日～平成 21 年 8 月 5 日

整理期間 平成 22 年 9 月 1 日～平成 22 年 9 月 30 日

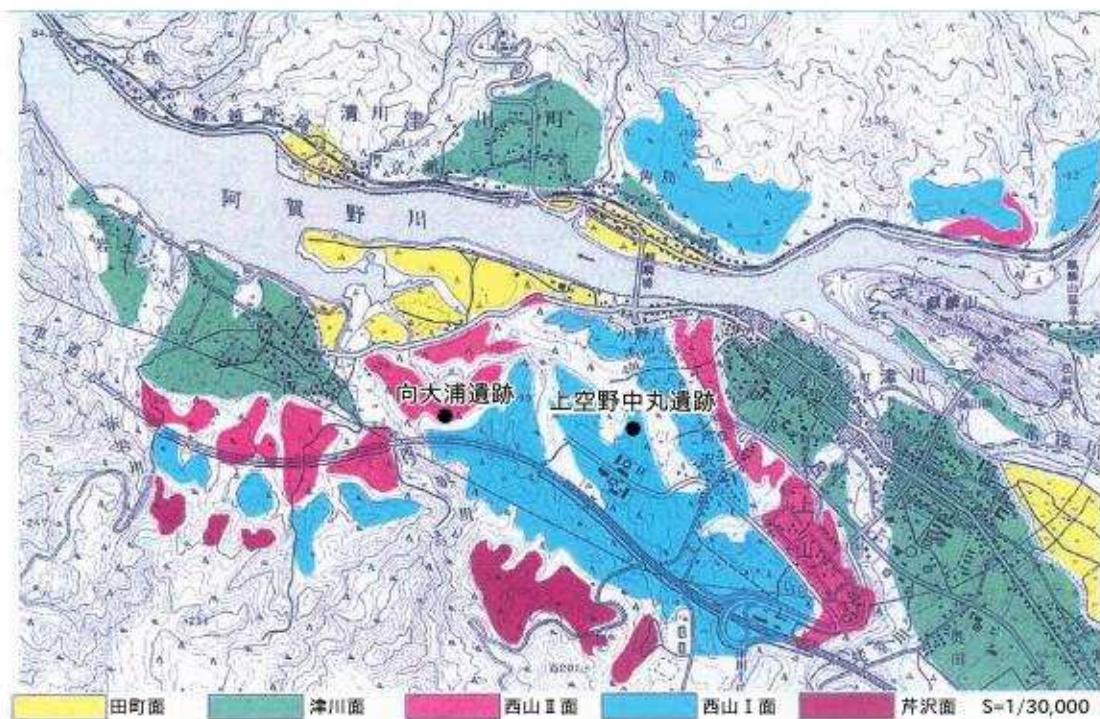
調査員 小村 正之（埋蔵文化財調査部調査員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

「遺跡の位置と環境」については、一般国道49号揚川改良事業に伴う上野東遺跡・現明嶽遺跡〔高橋ほか2006〕、大坂上道遺跡・猿額遺跡〔桐原ほか2008〕で既に記述されている。ここでは上記報告書を参考に記述し、挿図・表は一部改変して掲載する。

1 地理的環境

東蒲原郡を含む本県の東部山間部は、朝日山地、飯豊山地、越後山脈、三国山脈などが聳え、標高1,500m～2,000m級の主峰をなす高山が北から南に連なっている。阿賀野川は、この急峻な山間部を蛇行しながら西流し、流域に多くの支流をかかえながら大小の沖積平野を形成している。全長約210km、流域面積約7,710km²を測る。阿賀野川の源流は、福島県と栃木県の県境付近の荒海山(1,581m)から流れ出る荒海川で、途中阿賀川(大川)と名を変えて北上する。喜多方市会知地区付近では、福島県のほぼ中央部に位置する猪苗代湖を源流とする日橋川と合流する。さらに、尾瀬沼を源流とし沼沢湖の西側から東へと迂回しながら北上する只見川とも、喜多方市三津合地区付近で合流する。その後、峡谷を縫って西流し、福島県から新潟県に入ると阿賀野川と名を変え、東蒲原郡阿賀町津川の麒麟山付近で常浪川と合流する。やがて、下流域の越後平野を流下して日本海に注ぐ。



第5図 遺跡の位置と津川盆地段丘平面図
〔『東蒲原郡史 資料編1 原始』から一部加筆して転載〕
（国土地理院「津川」1:25,000原図 平成14年発行）

向大浦遺跡は阿賀野川が形成した左岸の河岸段丘上にある。遺跡付近の段丘は阿賀野川河床からの比高や段丘堆積物から5面に区分される〔二宮 1973〕。遺跡は上から3段目の西山Ⅱ面に位置しており、標高は79m～81mを測る。現況は昭和30年代以降に植林された杉林、広葉樹を中心とした雑木林で、小谷により形成された舌状台地が見られる。北東側には小野戸集落、北西側には西集落が所在する(第5図)。

上空野中丸遺跡は阿賀野川が形成した左岸の河岸段丘上に存在する。遺跡は上から2段目の西山Ⅰ面に位置しており、標高は93～99mを測る。現況は畑及び杉林である(第5図)。

2 鹿瀬軽石質砂層の堆積について

向大浦遺跡では縄文時代中期前葉以降の遺物包含層(上層)と縄文時代の前期以前の遺物包含層(下層)の間層に、にぶい黄褐色の砂質土が堆積している。この堆積土は福島県大沼郡金山町に所在し、只見川右岸に位置する沼沢火山が噴出した軽石や火山灰が、只見川・阿賀川・阿賀野川の流水の作用によって二次堆積した層と推定される。ちなみに沼沢火山は、現在火口に水を湛えた沼沢湖(カルデラ湖)となっている(第6図)。

この沼沢火山起源と考えられている火山灰層は、「沼沢火山灰層」〔滝沢ほか1995〕、「鹿瀬軽石質砂層」〔稻葉ほか1976〕、「沼沢浮石質砂層」〔只見川第四紀研究グループ1966a〕と様々に呼称されているが同一のものである。一般的に火口から吹き上げられた火山灰は、偏西風の影響を受けて噴火口から東側に飛ばされると考えられており、沼沢火山の北北西側に位置する本遺跡及びその周辺に直接降灰した可能性は低い。この堆積層が、沼沢火山噴火の直接的な降灰堆積ではなく、二次堆積が成因である可能性が高いと考えられることから、ここでは「鹿瀬軽石質砂層」と記載する。ちなみに西山Ⅱ面に所在する上野東遺跡では標高94.0mでの堆積が確認されており、現時点での最高位である〔高橋ほか2006〕。

- 鹿瀬軽石質砂層が二次堆積する経緯については以下の様に考えられている〔稻葉ほか1976〕。
- ① 沼沢火山の噴火で放出された大量の軽石・火山灰が、阿賀川を流下する。それらの物質は、阿賀川と阿賀野川の谷に埋積し、峡谷を堰き止めた。
 - ② 堰き止めて高まった水面は段丘面を浸したが、水流は穏やかであったため地表面の土壤を流失させなかった。そして、噴出物の細粒物質がゆっくりと沈殿し、谷底に堆積した。
 - ③ 噴出物による峡谷の埋没が進み、川の流れが運んできた粗粒物質が細粒物質の上に堆積していった。
 - ④ 堰止めは軽石質砂層そのものが堆積したことで行われたものと考えられる。軽石質砂層は極めて浸食されやすい堆積物であるため、堰止めが長期にわたることは不可能である。従って①～③の過程はかなり急速に進行したものと考えられる。

鹿瀬軽石質砂層が堆積した年代については、同砂層中及び直下の泥土最上部で検出した木材片を放射性



第6図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置
(稻葉ほか1976を一部改変)

炭素年代測定法で測定したところ、前者が $4,950 \pm 130$ yr.B.P. で、後者が $5,030 \pm 100$ yr.B.P. という測定値を得たという〔只見川第四紀研究グループ 1966b〕。また猿額遺跡では、同砂層直下で検出した遺構から出土した炭化物(4試料)を放射性炭素年代測定法で測定したところ、 $4,800 \sim 4,950 \pm 40$ yr.B.P. という測定値を得た〔桐原ほか 2008〕。

周辺遺跡から出土した土器の型式を見ると、北野遺跡・上野東遺跡・現明嶽遺跡では鹿瀬軽石質砂層の下層から大木 6 式古段階に比定される土器が〔高橋ほか 2003・2006〕、猿額遺跡では同砂層の直下から大木 6 式に比定される土器が出土している〔桐原ほか 2008〕。北野遺跡では同砂層の上層から大木 6 式新段階に比定される土器が出土している〔高橋ほか 2005〕。

沼沢火山が噴出した火山灰が直接降下した、いわゆる一次堆積層が確認できる遺跡は福島県会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間 1991〕、同町下谷ヶ池平 B・C 遺跡〔芳賀・藤田 1986〕、同町宵宮西遺跡〔芳賀ほか 1984・1990〕がある。これらの遺跡では堆積層の直下及び下層から大木 6 式に比定される土器が出土している。

以上の点から、鹿瀬軽石質砂層は大木 6 式期に堆積したものと考えられる。

3 歴史的環境

東蒲原郡での発掘調査は 1950 年代から行われており、特に旧上川村小瀬ヶ沢洞窟(69)、室谷洞窟(74)では、当時最古の土器とされていた撚糸文系土器を含む層の下層から、爪形文・隆起線文・押圧縄文等を施した土器群を検出し〔中村 1960、中村・小片 1962〕、縄文時代の編年に早期以前の「草創期」を設定する一要因となった。

郡内の遺跡分布状況を見ると、阿賀野川とその支流によって形成された河岸段丘上の平坦面(津川面)に多く存在する。しかし、近年は常浪川ダム、磐越自動車道、一般国道 49 号揚川改良事業等に伴う発掘調査が行われ、津川面の高位にある西川Ⅱ面・西川Ⅰ面でも旧石器時代～平安時代にかけての遺跡が相次いで見つかっている。

以下、向大浦遺跡に関連する縄文時代前期・中期、平安時代を中心に概観する。

縄文時代前期

発掘調査を実施した遺跡は、旧津川町上野東遺跡(31)、現明嶽遺跡(29)、中棚遺跡(32)、猿額遺跡(33)、旧上川村北野遺跡(50)、池ノ尻遺跡(53)、室谷居平遺跡(73)、旧三川村上ノ平遺跡(4) 等が挙げられる。上野東遺跡、現明嶽遺跡、猿額遺跡、北野遺跡、池ノ尻遺跡では鹿瀬軽石質砂層を確認し、その下層で前期の遺跡を検出している。

上野東遺跡では、後葉～末葉の竪穴住居 1 棟、土坑 5 基等を、現明嶽遺跡では、後葉～末葉の焼土 1 基、集石 1 基を検出し、いずれも季節的な短期利用と考えられている。土器は東北系の大木 5b～6 式が主体を占める〔高橋ほか 2006〕。

中棚遺跡では、遺物によって末葉から中期前葉を中心とした遺跡と考えられ、同一母岩と思われる頁岩の剥片が出土している土坑等を検出した〔滝沢ほか 1995〕。

猿額遺跡では、平成 4・5 年度の調査で末葉の土坑 1 基、フラスコ状土坑 1 基等を〔滝沢ほか 1995〕、平成 18 年度の調査では末葉の焼土 4 基等を〔桐原ほか 2008〕それぞれ検出した。いずれの調査でも住居

を検出していないことから、調査区南側の段丘端部に遺跡の中心が存在する〔北村 2006〕ものと考えられる。土器は大木 5・6 式と関東系の興津式が出土している。

北野遺跡では、前葉から中葉で竪穴住居 4 棟、土坑十数基、後葉から末葉で竪穴住居 9 棟、掘立柱建物 2 棟、土坑 10 数基をそれぞれ検出しており、集落を形成していたものと考えられる。後葉から末葉の竪穴住居は広場を開むように環状に配置されている。土器は大木 5・6 式が主体を占める〔高橋・荒谷 2003〕。

池ノ尻遺跡では、遺物の年代から前葉から中期前葉にかけて利用された遺跡と考えられ、土坑、集石等を検出した。土器は東北系の大木 4・5 式と関東系の浮島・興津式が出土している〔遠藤 2006a〕。

室谷居平遺跡では、中葉の竪穴住居 1 棟を検出した。住居が検出されたことや、遺物の分布状況、地形等から集落と考えられる。土器は東北系の大木 2a 式が出土している〔遠藤 2006b〕。

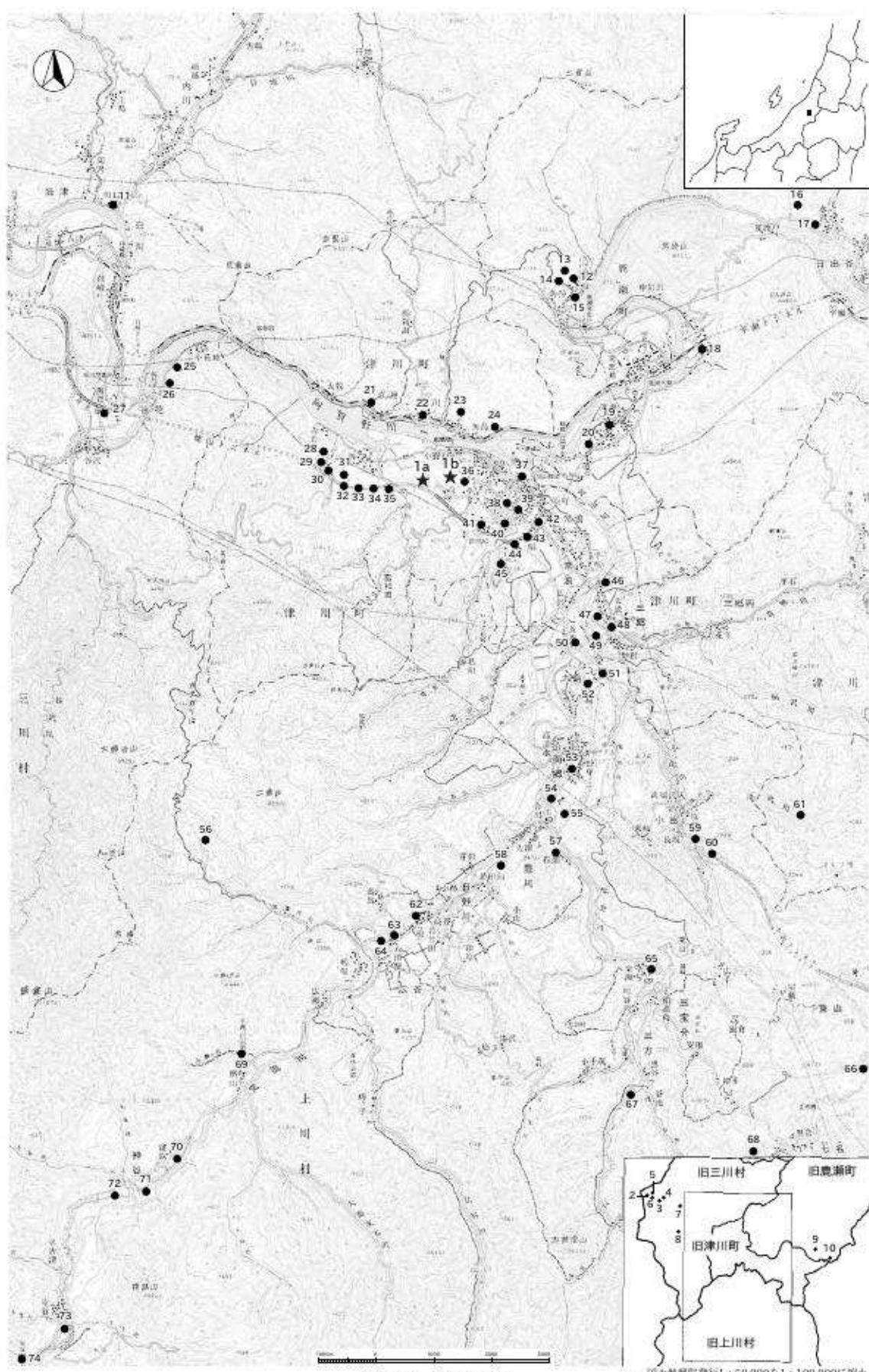
上ノ平遺跡では、C 地点で末葉の竪穴住居 1 棟を検出した。同時期のほかの遺構がほとんど存在しないことから、一時的に利用されたものと考えられる。土器は大木 6 式が出土している〔沢田 1996〕。

縄文時代中期

中期に入ると遺跡数は急激に増加する。発掘調査を実施した遺跡は、旧津川町大坂上道遺跡（34）、原

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1a	向 大 浦	縄文（前・中・後期）、平安	38	古 志 王	縄文（中・後期）、平安、中世
1b	上 空野 中丸	縄文、近世	39	金 鉢 清 水	縄文
2	堂 田	縄文（前・中・後期）	40	羽 黒 林	縄文（前期）
3	吉 ケ 沢	旧石器、縄文（前期）	41	上 ノ 山	縄文、平安
4	上 ノ 平	旧石器、縄文（前・後期）	42	中 島	縄文
5	蟹 泽	縄文（後期）	43	奥 田	縄文
6	下 西 ノ 泽	縄文（晚期）、弥生（前期）	44	大 舟	縄文
7	西 岩 谷	縄文（後期）、平安	45	エンマ坂	旧石器
8	五 十 島	縄文（中期）	46	古 天 神	縄文（後・晚期）
9	菱 烏	縄文（中期）	47	高 漬	縄文、奈良、平安
10	屋 敷 島	縄文（中期）	48	天 満	縄文（後期）
11	若 宮 洞 窯	縄文（晚期）	49	楠 川	縄文（中・後・晚期）
12	角 神 A	旧石器	50	北 野	縄文（早・前・中・後期）、中世・近世
13	角 神 B	縄文（早・前・中期）	51	七 塚 道 下	縄文（中・後・晚期）
14	角 神 C	縄文（早・前・中期）	52	キンカ杉	縄文（中期）
15	角 神 D	縄文（中期）	53	池 ノ 尻	縄文（前・中期）
16	長 者 屋 敷	縄文（中・後・晚期）、平安	54	大 屋 敷	縄文（中・後・晚期）
17	中 貝	縄文（中期）	55	開 後	縄文
18	深 戸	縄文（中・後期）	56	人ヶ谷 岩陰	縄文（晚期）
19	大 鹿 瀬	縄文（中・後期）	57	石 烟	縄文（晚期）
20	鶴鱗山 東方	縄文	58	山 口	縄文（前期）
21	大 師 堂	縄文（中期）	59	下 小 島	縄文（後期）
22	原	縄文（中・後・晚期）、平安	60	上 小 島	縄文（早期）
23	角 岩 陰	縄文（後期）	61	入道岩 洞窟	縄文（晚期）
24	角 岩 山	縄文（後期）	62	狐 座	縄文（中・後・晚期）
25	萩 原	縄文（中・後期）	63	楊 城	縄文（中・後・晚期）
26	小 花 地	縄文（中・後期）	64	八 田 蟹	縄文（前期）
27	牧 ノ 泽	縄文（後・晚期）	65	粟 漬	縄文（中期）
28	赤 岩	縄文（中・後・晚期）	66	中 山	縄文
29	現 明 嶺	縄文（前・後期）	67	谷 地	縄文（中・後期）
30	上 野	縄文（前・後期）	68	大 尾	縄文（中・後期）
31	上 野 東	縄文（前・後期）、平安	69	小瀬ヶ沢 洞窟	縄文（草創・早期）
32	中 棚	縄文（前・中期）	70	鍵 取	縄文（早期）
33	猿 頭	縄文（前・中期）	71	大 谷 原	縄文（早・前・中期）
34	大 版 上 道	縄文（前・中・後・晚期）、平安	72	戸 中	縄文（早・中期）
35	今 井 野	縄文	73	室 谷 居 平	縄文（前期）
36	小 野 戸	平安	74	室 谷 洞 窯	縄文（草創・早・中・後・晚期）、平安
37	上 鉄 駆 町	縄文（中・晚期）			

第 1 表 周辺の遺跡



第7図 周辺の遺跡

国土地理院発行1:50,000を1:100,000に縮小
「津川」「御神楽浜」「大白浜」「野沢」に一部加筆

遺跡（22）、旧上川村北野遺跡、キンカ杉遺跡（52）、旧鹿瀬町屋敷島遺跡（10）、長者屋敷遺跡（16）等が挙げられる。大坂上道遺跡、原遺跡、北野遺跡、キンカ杉遺跡、屋敷島遺跡では鹿瀬軽石質砂層を確認し、その上層で中期の遺跡を検出している。

大坂上道遺跡の平成4・5年度の調査では、前葉以降の土坑5基、プラスコ状土坑2基、焼土坑2基等を検出した〔滝沢ほか1995〕。平成18年度の調査では初頭から前葉と推定される土坑16基等を検出し、その中のSK15は遺物の出土状況から、甕被葬の墓坑と推定されている。土器は北陸系の新崎式が主体を占め、関東系の五領ヶ台II式も見られる〔桐原ほか2008〕。

原遺跡では、昭和58年度の調査で中・後期の土坑16基を検出した〔山武考古学研究所1984〕。平成14・15年度の調査では中葉から後葉を中心とした時期の石組炉3基、複式炉1基、焼土2基、土坑80基以上を検出し、その状況から大規模な環状集落が形成されていたものと考えられる。土器は東北系の大木8aから10式が出土している〔國島2006a〕。

北野遺跡では、末葉から後期初頭の竪穴住居54棟をはじめ、多数の土坑・埋設土器等を検出した。遺構・遺物とも膨大で、この地域の拠点的集落である。土器は東北系の大木7bから10式が主体を占め、新崎式、関東系の阿玉台式や加曾利E4式も見られる〔高橋ほか2005〕。

キンカ杉遺跡では、前葉から中葉の住居10棟、プラスコ状土坑60基、埋設土器4基等を検出した。遺構・遺物の性格から大規模な集落を形成していたものと考えられる。土器は大木7aから8b式が主体を占め、新崎式、阿玉台式、在地系の馬高式等も見られる〔遠藤2006c〕。

屋敷島遺跡では、前葉～中葉の竪穴住居7棟、プラスコ状土坑15基、埋設土器3基等を検出した。遺構の配置状況から、環状ないし馬蹄形集落が形成されていた可能性がある。土器は大木7b・8a式が主体を占め、新崎式、阿玉台式、馬高式も見られる〔中島2006a〕。

長者屋敷遺跡では、遺物の年代から中葉と晩期前葉を中心とした遺跡と考えられ、土坑、石組炉等を検出した。遺構・遺物の状況から集落を形成していたものと考えられる。土器は大木8a・8b式を主体とし、馬高式も見られる〔横山2000〕。

平安時代

東蒲原郡内における古代遺跡は約30か所を数えるに過ぎない。そのなかで発掘調査を実施した遺跡は旧津川町上野東遺跡、大坂上道遺跡、古志王遺跡（38）、旧鹿瀬町長者屋敷遺跡（16）等が挙げられる。

上野東遺跡では、9世紀後半から10世紀初頭の住居1棟を検出した。掘り込みが明確ではないものの、床面・カマド・柱穴を検出しており、竪穴住居と考えられている〔高橋ほか2006〕。

大坂上道遺跡の平成4・5年度の調査では、9世紀後半から10世紀初頭の土坑1基を検出した。須恵器は佐渡小泊窯若しくは新津丘陵産と会津大戸窯産を確認した〔滝沢ほか1995〕。平成18年度の調査では、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑1基を検出した。また東蒲原郡内では初めての出土例となる腰帶石鏹（遼方）が出土した〔桐原ほか2008〕。

第III章 向大浦遺跡

1 遺跡の現況と微地形

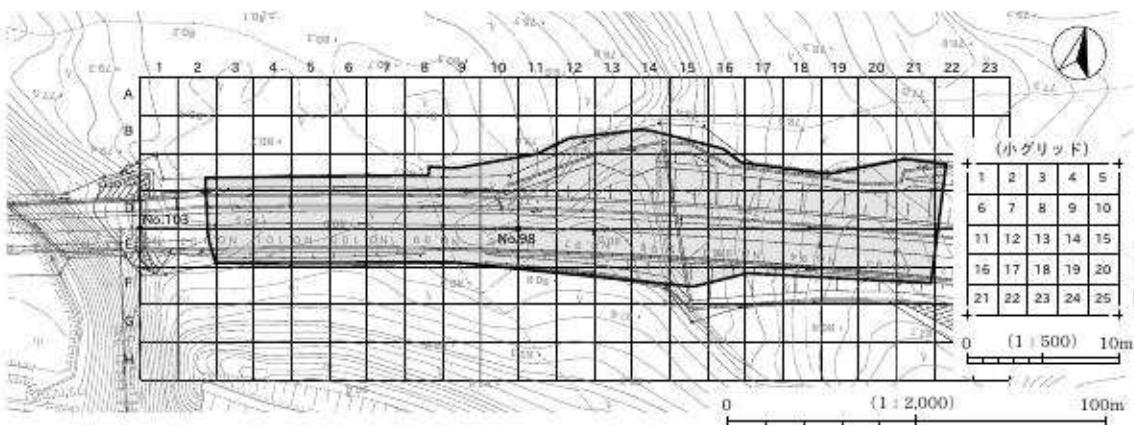
向大浦遺跡は津川盆地の西縁に当たり、西流する阿賀野川の左岸段丘面（西山Ⅰ面）に所在する。遺跡の西側は西ノ沢川が北流し、その対岸に大坂上道遺跡が所在する。南側ではより上位の段丘面（西山Ⅱ面・芹沢面）へ続く斜面が迫っており、東側は幾筋もの小さな沢によって開析されている。北側には最も低い段丘面（田町面）が広がり、その端部は阿賀野川に接している。

調査区内の14～16グリッドには幅20m前後の沢が南から北に伸びており、調査区を東西に二分している。その西側の8～14グリッドでは幅15～18mの沢が南西から北東に伸びており、14Bグリッドで先述した沢に合流する。

2 グリッドの設定

グリッドの方向は道路法線と一致させ、センター杭No.103 = 1Eグリッド（以下、座標は世界測地系、X=186876.178, Y=82497.651）とNo.98 = 11Eグリッド（X=186901.633, Y=82594.357）を結んだ線を基準線とした。この基準線に直交させ1辺10mの方眼を組み、北西隅を基点に、東西を算用数字、南北をアルファベット（大文字）順とし、これを組み合わせて大グリッドを「4Dグリッド」と呼称した（第8図）。1AグリッドはX=186914.860, Y=82487.469である。南北軸は真北から15°西偏している。

小グリッドは大グリッドの北西隅を基点として、2m方眼に25等分して算用数字を付し、大グリッドに続けて「4D15」のように表記した。



第8図 グリッド設定図（□は調査範囲）

3 基本層序

基本層序はI～VII層の7層に分層した。調査区内におけるI層（表土）及びVII層（地山）以外の堆積状況を概観すると、II・V層はほぼ全域で堆積が認められ、III・IV・VI層は調査区西側では色調がはっきり

3 基本層序

としており、層も厚く堆積しているが、14～16グリッドに位置する沢の東側ではほとんど検出していない。また沢部ではⅢ・Ⅳ層が混合して、さらにV層が巻き込まれるようにブロック状に混入して厚く堆積する。以下、I～VII層について説明する（第9図）。

I層：黒褐色（10YR2/2）土。層厚5～15cmを測る。未分解の腐植物を多く含む。表土層である。
II層：黒色（10YR2/1）～黒褐色（10YR2/3）土。層厚1～30cmを測る。炭化物を微量に含む。8～10Cグリッド（第9図⑤・⑥）と17～18Cグリッド（同⑧・⑨）ではⅢ・Ⅳ層に相当すると考えられる黄褐色砂粒が混合しているため、若干黄色味を帯びて黒褐色になる。上層遺構のうちSX62の焼土はこの上面で検出した。縄文時代中・後期と平安時代の遺物包含層である。

III層：鹿瀬軽石質砂層と考えられるにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルトを含む暗褐色（10YR3/3）シルト。IV層からII層への漸移層である。層厚1～30cmを測る。沢の斜面に当たる13Fグリッド（同⑦）や17・18Eグリッド（同⑩・⑪）ではIII層の厚みが増し、IV層に相当する黄褐色砂質シルトとII層に相当する黑色土が流れ込み等によって著しく混じり合うことから、色調が斑状となり、黒味が強くなる。上層遺構の検出面である。

IV層：黄褐色（10YR5/8）～黄色（2.5Y7/8）砂質シルト。層厚1～55cmを測る。福島県金山町沼沢火山を供給源とする噴出物の二次堆積、いわゆる「鹿瀬軽石質砂層」に相当する。調査区西側（同①～④）では層厚50～55cmを測り、混入物もほとんど見られないため黄色味が強い。しかし、東へ向かうにしたがって層厚は薄くなり、16グリッド以東（同⑧～⑪）では、部分的にブロック状に確認できる程度である。上層遺構の検出面である。

V層：黒色（10YR2/1）～黒褐色（10YR3/1）粘質シルト。層厚1～25cmを測る。炭化物を微量に含む。調査区全域で確認でき、ほかの層に比べ層厚や土質は一定している。16グリッド以東（同⑧～⑪）では、若干黒味が強い。縄文時代の前期以前の遺物包含層である。

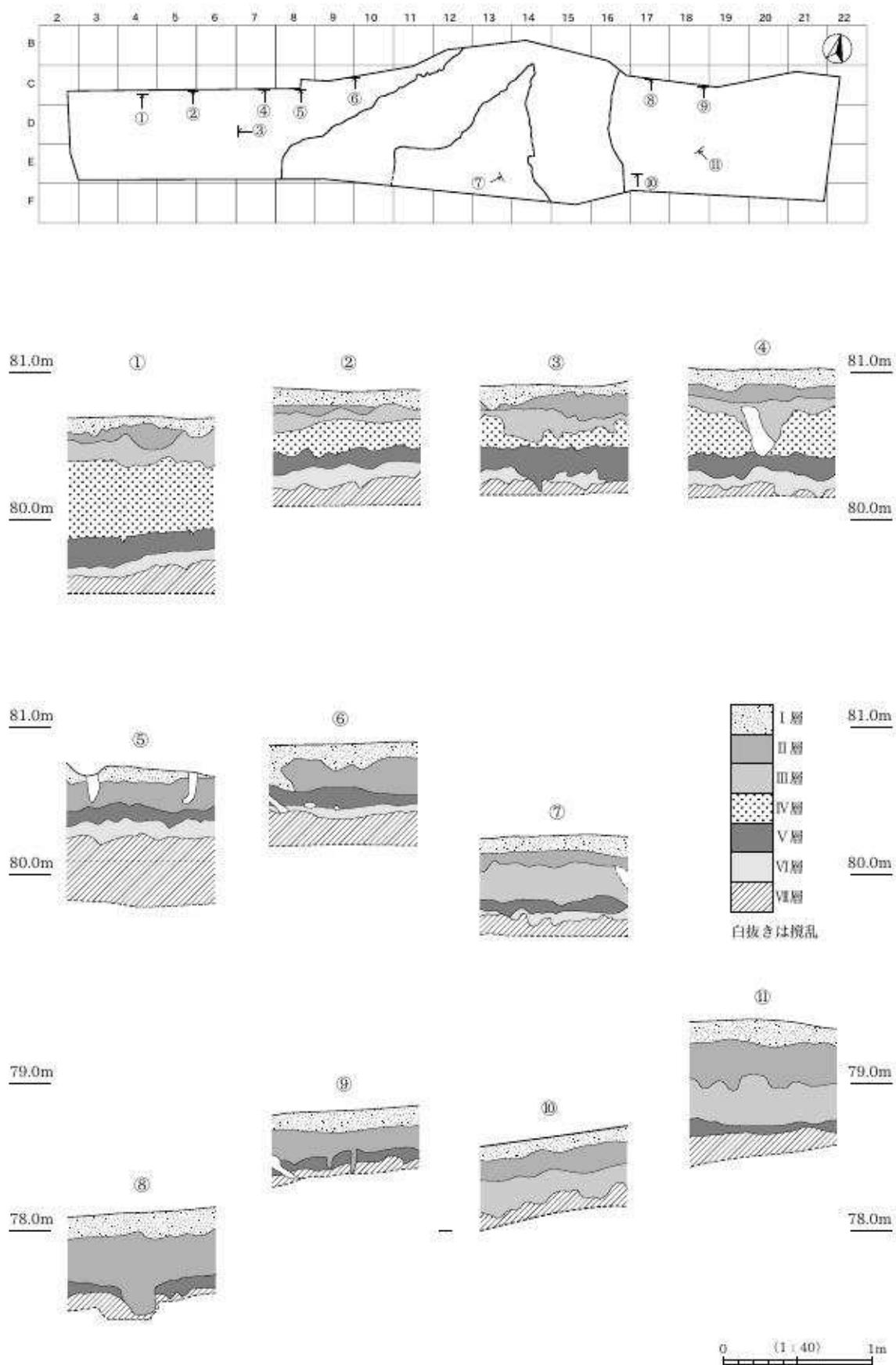
VI層：黒褐色（10YR2/3）～暗褐色（10YR3/4）粘質シルト。層厚1～35cmを測る。VII層からV層への漸移層である。調査区西側の4～7グリッド（同①～④）ではVII層の割合が高いため暗褐色を呈するが、8～14グリッド（同⑨～⑪）ではV層の割合が高いため黒褐色を呈する。14～16グリッドに位置する沢の東側（同⑧～⑪）では見られない。

VII層：黄橙色（10YR7/8～10YR8/8）粘質シルト。層厚は確認できたところで130cmを測り、その下は砂礫層となる。上層遺構の柱穴やピットの底面はこの層まで達しているものも見られる。下層遺構の検出面である（地山）。

向大浦遺跡の基本層序を周辺遺跡と比較すると、第2表のように上空野中丸遺跡及び中棚遺跡を除き一致する。両遺跡は西山Ⅰ面上に立地し、標高95m以上を測る。そのため鹿瀬軽石質砂層（IV層）が堆積しなかつたものと考えられる。

遺跡名		基 本 層 序							段丘面	引用文献
東	西	I・II	III～V					VI	西山Ⅰ面	本報告書
		上空野中丸遺跡	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅱ面	
		向大浦遺跡	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅱ面	
		大坂上道遺跡Ⅱ	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅲ面	
		鶴類遺跡Ⅱ	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅲ面	桐原ほか 2008
		中棚遺跡	I		II			III	西山Ⅳ面	
		上野東遺跡	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅳ面	猪津ほか 1995
		現明獄遺跡	I	II	III	IV	V	VI	西山Ⅳ面	高橋ほか 2006

第2表 周辺遺跡の基本層序



第9図 基本層序

4 遺構

A 概要

向大浦遺跡では鹿瀬軽石質砂層（基本土層IV層）を挟んだ上下の層から遺構・遺物を検出しており、上層からは縄文時代中期前葉または平安時代、下層からは縄文時代の前期以前の遺構が見つかっている。遺構検出面は上層がⅢまたはⅣ層上面、下層がⅦ層（地山）上面となる。

上層で検出した遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑7基、焼土遺構1基、ピット36基である。時期別に見ると、ピット2基が縄文時代中期前葉に属する以外は、すべて平安時代のものと考えられる。このほかに調査区西側で沢2条を検出した。いずれも覆土中またはその上層の遺物包含層（Ⅱ層）から縄文時代中期前葉の土器や石器が出土している。

上層遺構の分布は、調査区北西側（7～9C・Dグリッド）にほぼ集中しており、それ以外では希薄である。また土師器・須恵器の大部分はこの地区から出土している。

下層で検出した遺構は、陥穴12基、土坑2基である。陥穴は大きさや長軸方向から、A・B・Cの3グループに区分できる。土坑（SK001）から縄文時代前期後葉の土器が出土している以外は出土遺物がなく、これらの詳細な時期は不明である。このほかに7E・19Dグリッドで落ち込み2基を検出した。土層断面が不整形を呈し、地山との境が明瞭ではないことから、風倒木痕などの搅乱と考えられる。また調査区南側（11～13Eグリッド）を中心に溝状の落ち込みを数条検出した。土層断面が不整形を呈し、地山との境が明瞭ではないことから、地割れの痕跡と考えられる。いずれも検出層位から縄文時代前期以前に形成されたものと推定できる。

下層遺構の分布状況は、陥穴が調査区西側（5～7C～Eグリッド）にまとまって見られ、土坑は調査区北側の12・13Bグリッドと東側の20Eグリッドで検出した。

B 記述方法

遺構の説明は、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いた。

遺構名

遺構名は略号と番号で表記した。略号は遺構種別ごとにSI:竪穴住居、SB:掘立柱建物、SK:土坑・陥穴、SX:焼土遺構、P:ピットとし、沢はSRとした。

番号は略号の後に付し、上層遺構は1から、下層遺構は001から、それぞれ遺構種別に関係なく検出順に通し番号を付けた。ただし検出段階で遺構番号を付したもののが調査の結果、後世の搅乱または自然の落ち込みと判断したものは、その番号を欠番とした。従って遺構番号の数は遺構数と一致しない。掘立柱建物とそれを構成する柱穴は【SB64P60】のように、それぞれに略号と番号を付した。

本文

遺構の説明は平安時代のピットを除き、原則として個別に記述した。遺構各説または遺構観察表に記載した遺構の平面または断面形状、覆土の堆積形状の表記は、和泉A遺跡〔荒川・加藤1999〕に準拠する（第10図）。規模は1m以上のものはメートル、1m以下のものはセンチメートルで表した。

遺構の長軸方向は、長径を基準に真北からの角度を測定し、【N - 37° - W】のように記載した。

遺構観察表

掘立柱建物の柱穴またはピットについては観察項目を設けて記載した。観察項目は位置・平面形・断面形・標高（掘立柱建物の柱穴のみ）・規模・柱痕の有無・柱間寸法（掘立柱建物の柱穴のみ）・遺構の切り合い関係等である。遺構の切り合い関係は「<」・「>」・「=」の記号を用いた。「A < B」は「AはBに切られる」、「A > B」は「AはBを切っている」、「A = B」は「AとBの切り合い関係は不明」である。

図面図版

遺構図面は上層・下層ごとに、全体図・分割図・個別図で構成される。個別図は竪穴住居、土坑、焼土遺構、ピット、沢の順で掲載した。重複する遺構の表示は、切り合い関係が明確であるものに限り、切っている遺構を実線で表示し、切られる遺構は残存している部分を破線で表示した。

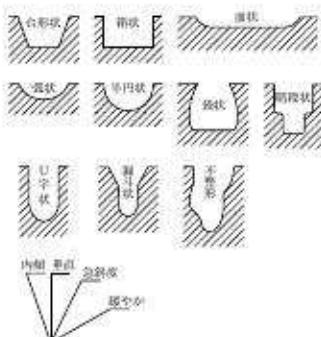
図面の縮尺は基本的には以下のとおりである。遺構全体図：1/300、遺構分割図：1/150、掘立柱建物：1/80、沢の断面図：1/60、竪穴住居・土坑・陥穴・焼土遺構・ピット：1/40である。ただし、状況に応じたため前記の縮尺でない遺構もある。

写真図版

図面図版に掲載した遺構は、一部のピットを除き写真図版にも掲載してある。写真是基本的に土層断面と完掘状況を合わせて掲載した。竪穴住居に関しては、それらに加えてカマドの完掘状況や遺物出土状況を掲載した。

平面形状

円形	長径が短径の1.2倍未満のもの。
梢円形	長径が短径の1.2倍以上、1.5倍未満のもの。
長楕円形	長径が短径の1.5倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の1.2倍未満で、角のあるもの。
隅丸方形	長軸が短軸の1.2倍未満で、角に丸みがあるもの。
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上で、角のあるもの。
隅丸長方形	長軸が短軸の1.2倍以上で、角に丸みがあるもの。
不整形	凸凹が著しく一定の平面形を持たないもの。 ただし、およその形状の分かることは不整形、不整楕円形などと呼ぶ。

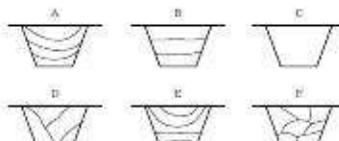


断面形状

台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
皿状	溝を除いた平面長径が深さの10倍以上で、底部に平坦面を持ち、緩やかに立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない楕状で、急斜度に立ち上がるもの。
袋状	検出面の径よりも底部の径が大きく、内側して立ち上がるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。
U字状	平面長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
不整形	凸凹で一定の断面形をも持たないもの。

覆土堆積形状

A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積するもの。
B 水平	複数層が水平に堆積するもの。
C 単層	覆土が單一層のもの。
D 斜位	覆土が斜めに堆積するもの。
E 水平レンズ	覆土下位は水平、上位はレンズ状に堆積するもの。
F ブロック状	覆土がブロック状に堆積するもの。



第10図 遺構の平面・断面・覆土の分類 ([荒川・加藤 1999] から一部改変して転載)

C 上層遺構(平安時代)

上層で検出した平安時代の遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑7基、焼土遺構1基、ピット34基である。第III章4Aで述べたように平安時代の遺構・遺物は調査区北西側(7~9C・Dグリッド)にほぼ集中している。周辺の地形から、これらの遺構群は集落南側の縁辺部に位置し、集落の中心は調査区外の北側平坦面に存在するものと推測される。

1) 竪穴住居

竪穴住居は調査区北西側(7~9C・Dグリッド)で2棟検出した。いずれもカマドを有しており、壁面中央から左側に偏って敷設している。煙道部はSI11が南東側、SI12が北東側に向かっており、当地域における冬季の北西からの季節風に対して理にかなった構造と言える。

SI11(図版3・4・5・29)

8・9Cグリッドに位置する。竪穴の南北隅は平成19年度試掘調査4トレンチによって切られる。また北東隅は木の根による搅乱を受けている。平面形はおむね長方形を呈するが、東・西側の壁は中ほどから南側に撥形に開いている。長軸3.77m、短軸2.34~2.88m、検出面から床面までの深さ22cm、面積は9.26m²を測る。長軸方向はN-155°-Eを示す。覆土は黒色土(1層)・褐灰色土(2層)・黒褐色土(3・4層)の4層に分層でき、レンズ状に堆積する。

床面はほぼ平坦でしまっているが、硬化面や貼床などは検出できなかった。壁面は急斜度に立ち上がる。壁溝と主柱穴は確認できなかつたが、壁際を中心にピット17基(P89~105)を検出した。平面形は円形若しくは梢円形を呈し、径5~27cm、床面からの深さ7~19cmを測る。いずれのピットでも柱痕は確認できなかつた。これらのピットは壁際に並ぶこと、そして通常の柱穴に比べ規模が小さいことから、竪穴の掘り込み壁崩落防止の施設か、それとも壁立式の場合であれば壁の下地材を埋め込んだ痕跡と考えられる。

そのほか竪穴内から性格不明遺構2基(SX81・82)、ピット6基(P83~88)を検出した。このうちSX81・82は床面検出時にその存在を確認した。土層断面では床面と同一レベルまで黒褐色シルト(4層)が堆積しており、その最上面はややしまっており床面と想定されることから、住居の使用時にはすでに床面の一部であったと考えられる。SX81は平面形が不整形を呈し、長軸2.26m以上、短軸0.55~1.03m、床面からの深さ15cmを測る。断面形は弧状を呈する。長軸方向はN-48°-Eを示す。SX82は平面形が不整形を呈し、長軸1.43m、短軸90cm、床面からの深さ12cmを測る。断面形は弧状を呈する。長軸方向はN-34°-Eを示す。P83~87は平面形が円形若しくは梢円形を呈する。径9~33cm、床面からの深さ6~21cmを測り、壁際のピット(P89~105)に比べ規模が若干大きい。これらのピットは竪穴の検出面では確認されず、床面の検出作業時に見つかったもので、SX81・82に比べしまりのない黒褐色土が堆積していた。住居との関係は不明である。

カマドは南壁中央から東寄りに存在する。竪穴検出時には芯材と考えられる礫がカマド周辺に散在しており、カマドは原形をとどめていないと想定された。焚口部から現存する煙道先端部までの長さは75cmを測り、煙道部は31cm住居外に伸びる。カマド内部には明瞭な被熱痕跡がなく、火床範囲は不明瞭である。袖部は黒褐色土に淡黄色砂と黄橙色粘土を混ぜた土(カマド5層)を芯材(礫)に被覆して構築したと考えられる。カマド5層に焼土粒と炭化物粒が微量ながらも確認できるのは、カマドを修復した際に古い構築材を混ぜて、新しいカマドの構築材として再利用しているためとも考えられる。

遺物は、平安時代に比定される土師器椀が口縁部個体識別法〔宇野 1992〕（以下、省略）で 4 個体、ほかに鍋の体部破片が 2 点出土しており、総重量は 339.5g である。そのうちカマドの覆土 1 層中からは 120.7g 出土しており、器種別に見ると椀が 2 個体分（内、掲載 88）と、鍋の体部破片が 1 点（89）出土している。カマド以外の覆土からは椀が 2 個体分と、ほかに鍋の体部破片が出土している。その中でも西壁中央部付近の覆土 2 層中から外面に墨書のあるほぼ完形の土師器椀（87）が出土しており、東蒲原郡内で初の墨書き土器として注目される。また中央部の覆土 1 層から凝灰岩製の砥石（40）が出土した。

このほか握り拳大から人頭大の搬入碟が 37 点、重量にして 7.49kg 出土した。そのうちカマド内及びその周辺から出土した碟は 19 点、重量にして 4.60kg で、被熱によって破碎している。一方、カマド以外から出土した碟は、被熱痕が認められず、破碎していない。遺構の時期は出土遺物から平安時代（9 世紀後半～10 世紀初頭）と推定される。

SI12（図版 3・4・6・30）

7・8D グリッドに位置する。西壁中央部付近で P63 と重複し、これを切っている。また竪穴中央部と北壁中央部及び北東隅は木の根による搅乱を受けている。西側に隣接して SB64 が位置している。平面形は方形を呈し、長軸 4.39m、短軸 4.31m、検出面から床面までの深さ 29cm、面積は 18.01m² を測る。長軸方向は N - 86° - E を示す。覆土は黒褐色土（1～3 層）・暗褐色土（4 層）・褐灰色土（5 層）・灰褐色土（6 層）の 6 層に分層でき、レンズ状に堆積する。

床面はほぼ平坦で、全域が硬くしまっており、特にカマド周辺を含めた東半部では、硬化した床面がよく残っていた。壁面は急斜度に立ち上がる。壁溝はカマド周辺を除いてほぼ全周し、幅 19～42cm、床面からの深さ 1～10cm を測る。覆土は黒褐色土（8 層）の単層である。床面に主柱穴は検出できなかつたが、壁溝内にはピット 22 基（P111～132）を検出した。いずれも柱痕が確認できず、覆土は黒褐色土（7 層）の単層である。このうち P111・124 を除いた各ピットの平面形は円形または梢円形を呈し、長径 9～40cm、短径 8～29cm、壁溝底部からの深さ 5～23cm を測る。壁際に並ぶことから SI11 と同様、P112～123 と P125～132 は竪穴の掘り込み壁崩落防止の施設か、または壁立式の場合であれば壁の下地材を埋め込んだ痕跡と推測されるが、ピットの規模は SI11 に比べ、やや大きい。P111・124 は東西壁の中央部に相対するように位置している。平面形はいずれも梢円形を呈し、長径 33cm、短径 23～26cm、壁溝底部からの深さ 48～55cm を測り、ほかのピットよりも深い。その深さや位置関係から上屋を支えるための柱穴の可能性がある。

そのほか床面からピット 7 基（P133～139）を検出した。平面形は円形若しくは梢円形を呈し、長径 15～43cm、短径 17～39cm、床面からの深さ 12～18cm を測る。覆土は黒褐色土（9 層）の単層である。これらのピットは竪穴検出面では確認できず、床面の検出作業時に見つかったもので、しまりのない覆土が堆積している状態で検出した。

カマドは東壁中央から北寄りに存在する。竪穴検出時には、芯材と考えられる碟がカマド及びその周辺から出土しており、カマドは原形をとどめていないと想定された。焚口部から現存する煙道先端部までの長さは 87cm、燃焼部幅 32cm を測り、煙道部は 14cm 住居外へ伸びる。ただし煙道部上面は削平されており、実際は更に東へ伸びていたものと推定される。袖部は黒褐色土に灰白色粘土や淡黄色砂を混ぜた土（カマド 1 層）で芯材（碟）を被覆して構築したものと考えられる。またカマド内ではピット 4 基（P140～143）を検出した。このうち P140 は右側袖部の焚口側にあることから袖芯材（碟）の設置痕と考えられる。P143 は火床部中央にあることから支脚の設置痕と考えられる。そのほかのピットは用途不明である。

遺物は平安時代に比定されるもので、口縁部個体識別法によると土師器の椀 17 個体・鍋 14 個体・甕 3 個体と、その他底部や体部片、器種不明の脚部など総重量にして（以下省略）4,337g、須恵器の甕が 3 個体、その他底部や体部片など総重量にして 1,249g が出土している。カマドからは土師器の椀 4 個体（このうち、黒色処理を施すもの 3 個体 = 90、黒色処理を施さないもの 1 個体 = 94）・鍋 4 個体（100・101）、須恵器甕 1 個体（104）が出土した。カマド以外の覆土 1 層及び 2 層中からは土師器の椀 13 個体（このうち、黒色処理を施すもの 5 個体 = 91・92、黒色処理を施さないもの 8 個体 = 93・95）・甕 3 個体（96・97）・鍋 10 個体（99）・器種不明の脚部 1 個体（98）、須恵器の甕 1 個体（103）、瓶子 1 個体（102）が出土している。これらの土器の多くは住居中央部から南側にかけて多く出土した。102 は北壁中央部で壁にもたれるように出土した。

このほか搬入碟が 434 点、重量にして 46.77kg 出土した。そのうちカマドから出土した碟は 55 点、重量にして 3.24kg である。カマド周辺では握り拳大から人頭大の碟が床面直上で出土しており、被熱によって破碎しているもののが多かった。一方、住居西側では握り拳大以下の碟が床面から浮いた状態で出土しており、部分的に被熱による破碎が認められたが、カマド周辺のものほど顕著ではなかった。遺構の時期は出土遺物の年代から平安時代（9 世紀後半～10 世紀初頭）と推定される。

2) 挖立柱建物

掘立柱建物は 1 棟検出した。各柱穴のデータは観察表（別表 3）に記載してあるため、以下の文章では観察表から読み取れない部分を中心に記述する。

SB64（図版 3・4・7・31）

7C・D グリッドに位置する側柱建物である。P37 が SK36 と重複し、これに切られる。桁行 2 間（6.45～6.90m）、梁行 2 間（5.58～5.22m）の長方形であるが、梁行南側中央の柱穴は検出できなかつた。面積は 36.29m² を測る。長軸方向は N - 2° - W を示し、南北棟となる。柱間寸法は西側の桁行で北から 3.82m、3.08m、東側の桁行で北から 3.22m、3.23m、北側の梁行で西から 2.32m、2.90m、南側の梁行で 5.58m となり、東側の桁行以外は等間隔ではない。

柱痕は P48 以外で検出し、直径 8～15cm の柱を据えていたと推定される。P39 はほかの柱穴よりも浅く、東柱の可能性がある。遺構に直接伴う遺物は出土していない。

3) 土坑

土坑は調査区北西側（5～7C・D グリッド）で 6 基、東側（18E グリッド）で 1 基の計 7 基を検出した。北西側の土坑は SK30 を除き遺物が出土していないが、平安時代の竪穴住居や掘立柱建物の周辺に位置しており近い時期と考えられる。

SK25（図版 3・4・7・32）

7D3 グリッドに位置する。SB64 の内側に位置しているが、両者の関連は不明である。平面形は長楕円形を呈する。長軸 1.02m、短軸 66cm、検出面からの深さは 20cm を測る。断面形は弧状を呈する。長軸方向は N - 77° - E を示す。覆土は灰黄褐色土を主体とし 4 層に分層でき、ブロック状に堆積する。遺物は出土していない。

SK29（図版 3・4・7・32）

7D1 グリッドに位置する。SK30 と重複し、これに切られている。また SB64 の内側に位置しているが、

両者の関連は不明である。平面形は円形を呈すると推定される。径 82cm、検出面からの深さは 19cm を測る。断面形は台形状を呈する。覆土は褐灰色土と暗褐色土の 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK30 (図版 3・4・7・32)

7D1・2・6・7 グリッドに位置する。SK29 と重複し、これを切っている。また SB64 の内側に位置しているが、両者の関連は不明である。平面形は円形を呈し、径 1.53 ~ 1.62m、検出面からの深さは 18cm を測る。断面形は台形状を呈する。覆土は黒色土と黒褐色土の 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土 1 層から古代の土師器楕 (105) が出土している。

SK36 (図版 3・4・7・32)

7C16・17 グリッドに位置する。SB64P37 と重複し、これを切っている。北側部分は調査区外に伸びるもの、平面形は円形と推定される。径 94cm 以上、検出面からの深さは 27cm を測る。断面形は台形状を呈する。覆土は黒褐色土と褐灰色土の 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK56 (図版 3・8・33)

5C23・24、5D3・4 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸 77cm、短軸 63cm、検出面からの深さは 45cm を測る。断面形は漏斗状を呈する。長軸方向は N - 17° - E を示す。覆土は黒褐色土を主体とし 4 層に分層でき、斜位に堆積する。遺物は出土していない。

SK57 (図版 3・8・32)

4D20、5D16 グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径 69 ~ 76cm、検出面からの深さは 33cm を測る。断面形は台形状を呈する。覆土は黒褐色土と灰褐色土の 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK73 (図版 3・8・33)

18E21・22 グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径 73 ~ 77cm、検出面からの深さは 23cm を測る。断面形は台形状を呈する。覆土は黒色土の単層である。遺物は出土していないが、覆土が平安時代の竪穴住居 (SI11) の覆土 1 層と近似していることから、近い時期と考えられる。

4) 焼土遺構

SX62 (図版 3・4・8・33)

7C21、7D1 グリッドに位置する。周辺の遺構と比べ検出面が高く、II 層上面で検出した。セクションベルトの断面調査時に検出したため、遺構の東側と西側は検出できなかった。平面形は不明であるが、径 78cm の範囲で焼土の分布を検出した。検出面からの深さ 14cm を測り、覆土は明赤褐色土を主体として 4 層に分層でき、覆土 1 層は焼土を主体とし、2 ~ 4 層は焼土粒を少~中量含む程度である。遺物は出土していないため時期は不明であるが、平安時代の遺構検出面より高い位置での検出であることから、本遺構はそれより新しい時期と考えられる。

5) ピット (図版 3・4・7・8・33・34)

調査区北西側 (5 ~ 9C ~ E グリッド) でピット 34 基を検出した。特に竪穴住居間の 8C・D グリッドに多く見られる。各ピットのデータは観察表 (別表 4) に記載した。平面形は円形・楕円形・長楕円形を呈するものが見られる。長軸 12 ~ 87cm、短軸 12 ~ 50cm、検出面からの深さ 18 ~ 57cm を測り、ピッ

トごとのばらつきが目立つ。P15・21・26・38・44・45・47・49・52・61 は柱痕を確認しており、掘立柱建物の柱穴の可能性がある。遺物は P41 覆土 1 層中から平安時代の土師器甕が出土しているだけである。いずれのピットも平安時代の竪穴住居や掘立柱建物の周辺に位置していることや、覆土が近似していることから平安時代の所産と考えられる。

D 上層 遺構（縄文時代）

上層で検出した縄文時代の遺構は、調査区西側（4D・7D グリッド）に位置するピット 2 基である。時期は出土遺物の年代からいざれも縄文時代中期前葉と考えられる。また西側（2～5C～E グリッド）に位置する沢 2 条の覆土中、またはその上面の遺物包含層（II 層）からは縄文時代中期前葉の土器・石器等が多数出土した。

1) ピット

P3 (図版 3・9・35)

4D2・7 グリッドに位置する。SR1 と重複し、これを切っている。平面形は円形を呈し、径 47cm、検出面からの深さ 22cm を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は黒褐色土と灰黄褐色土の 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土 2 層中から縄文土器（3・4）がピット底部に向かって斜位に落ち込むような状況で出土した。口縁部個体識別法（以下、省略）では 2 個体分、重量にして（以下、省略）878.4g を測る。時期は出土土器の年代から縄文時代中期前葉と考えられる。

P50 (図版 3・9・35)

7D11・12 グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈する。長軸 60cm、短軸 46cm、検出面からの深さ 22cm を測る。長軸方向は N - 22° - W を示す。断面形は階段状を呈する。覆土は黒褐色土の単層である。覆土中から縄文土器（5～8）が平面的に散布しているような状況で出土した。3 個体分、1057.2g を測る。時期は出土土器の年代から縄文時代中期前葉と考えられる。

2) 沢

SR1 (図版 3・9・35)

2～4C・D グリッドに位置する。P3 と重複し、これに切られている。沢頭は 4D5 グリッドで確認し、東から西に向かって傾斜している。北側または西側は調査区外に伸びるため正確な規模は不明であるが、長さ 23m 以上、幅 4.3m 以上、検出面からの深さ 60cm 以上を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は II・III 層を起源とする黒褐色土を主体とし、9 層に分層でき、ブロック状の部分もあるがおむねレンズ状に堆積する。底面は IV 層（鹿瀬蛭石質砂層）を開析している。覆土中またはその上面の遺物包含層から 40 個体分、13,913.5g を測る縄文土器（10～13・18～23・25～29・32・33・35・36・39・40・44～47・49・52～56・58・59・61～63・65～69・73～76・78）と土器片円板 4 点（83～86）、石器 52 点（3・5・7・9・10・13・20・33・35・39）が出土している。出土した縄文土器はすべて中期前葉に比定されることから、この時期に存在していた沢と考えられる。

SR4 (図版 3・9・35)

2～5D・E グリッドに位置する。沢頭は 5E4 グリッドで確認し、東から西に向かって傾斜している。南側または西側は調査区外に伸びるため正確な規模は不明であるが、長さ 29m 以上、幅 8.7m 以上、検

出面からの深さ 50cm 以上を測る。断面形は弧状を呈する。覆土はⅡ・Ⅲ層起源とする黒褐色土を主体とし、6 層に分層でき、レンズ状に堆積する。底面はⅣ層（鹿瀬軽石質砂層）を開析している。覆土中またはその上面の遺物包含層から 3 個体分、1,746.8g を測る縄文土器（14～17・42・72）、石器 9 点（19・30・38）が出土している。出土した縄文土器はすべて中期前葉に比定されることから、SR1 と同様この時期に存在していた沢と考えられる。

E 下層 遺構

下層で検出した遺構は、陥穴 12 基、土坑 2 基である。土坑 1 基（SK001）から縄文時代前期後葉の土器が出土している以外は遺物が出土しないため、これらの詳細な時期は不明であるが、鹿瀬軽石質砂層の下で検出したことから縄文時代の前期以前と考えられる。

また 8～14 グリッドの南西から北東に伸びる沢については、基本層序Ⅳ・V 層が堆積しており、縄文時代前期にはすでに存在していたものと考えられる。

1) 陥 穴

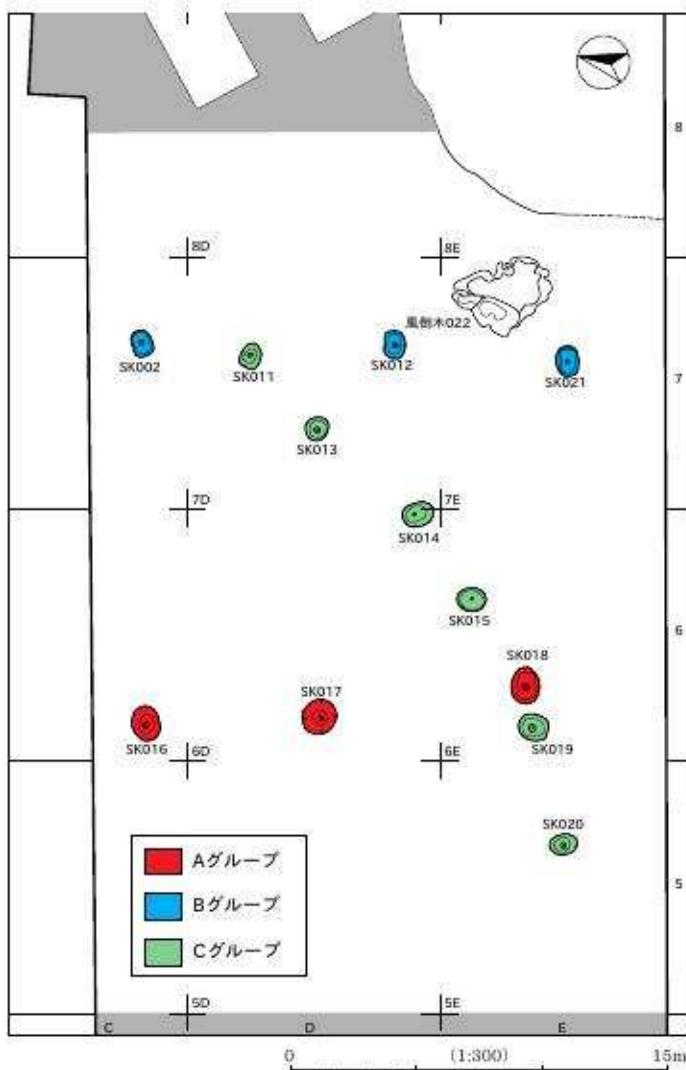
陥穴は 12 基検出した。調査区西側の段丘上に位置しており、尾根上の高い位置に分布する。南北はいずれも調査区外へ分布域が伸びると推定される。

大きさや長軸方向から、A・B・C の 3 つのグループに区分できる（第 11 図）。

A グループは段丘の尾根上、6C16～6E7 グリッド間で南北方向に直線状に並ぶ SK016・017・018 である。陥穴同士の間隔は北側から南側にかけてそれぞれ 6.94m、8.23m を測る。規模は長軸 1.38～1.45m、短軸 1.09～1.31m、検出面からの深さ 1.20～1.31m を測り、ほかのグループよりも規模が大きい。長軸方向は尾根筋に対して直交する。

B グループは段丘の東側縁辺部、7C19～7E14 グリッド間で南北方向に直線状に並ぶ SK002・012・021 である。陥穴同士の間隔は北側から南側にかけてそれぞれ 10.0m、6.9m を測る。規模は長軸 1.04～1.22m、短軸 80～90cm、検出面からの深さ 68～70cm を測り、ほかのグループよりも浅い。長軸方向は段丘の縁辺に対して直交する。

C グループは 7D9～5E14 グリッド間で北東から南西にかけてやや湾曲気味に並ぶ SK011・013・



第 11 図 陥穴グループ別模式図

014・015・019・020 である。陥穴同士の間隔は北東側から南西側にかけてそれぞれ 4.0m・5.1m・4.1m・5.6m・4.8m を測る。規模は長軸 0.98 ~ 1.27m、短軸 0.80 ~ 1.04m、検出面からの深さ 0.85 ~ 1.15m を測り、規模は A グループと B グループとの間に相当する。長軸方向は等高線に対して SK013 が直交、SK011・014 が平行、SK015・019・020 が斜めである。以下、グループごとに陥穴の詳細を記述する。

a A グループ

SK016 (図版 10・11・12・36)

6C16・17・21・22 グリッドに位置する。検出面での平面形は梢円形を呈し、長軸 1.38m、短軸 1.09m を測る。長軸方向は N - 72° - E を示す。底面の平面形は梢円形を呈し、長軸 75cm、短軸 59cm を測る。検出面からの深さは 1.30m で、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近で若干外側に開く箱状を呈する。底部中央で径 23cm、底面からの深さ 25cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒色土 (1・6 層)・黒褐色土 (2・3・5 層)・暗褐色土 (4 層) の 6 層に分層した。1 ~ 5 層はレンズ状に堆積し、3 ~ 5 層は硬くしまっている。6 層が底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK017 (図版 10・11・12・36)

6D11・12 グリッドに位置する。検出面での平面形は円形を呈し、長軸 1.43m、短軸 1.31m を測る。長軸方向は N - 57° - W を示す。底面の平面形は円形を呈し、長軸 61cm、短軸 58cm を測る。検出面からの深さは 1.31m で、断面形は底面が中央に向かって緩やかに傾斜し、壁面はほぼ垂直に立ち上がり上端付近で若干外側に開く箱状を呈する。底部中央で径 14cm、底面からの深さ 26cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒色土 (1・9 層)・暗褐色土 (3 層)・にぶい黄褐色土 (4 層)・にぶい黄橙色土 (2・5・6 層)・褐灰色土 (7 層)・黒褐色土+灰黄褐色土 (8 層) の 9 層に分層した。1 ~ 8 層はレンズ状に堆積し、6 ~ 8 層は硬くしまっている。ピット底部から柱状に伸びる 9 層は逆茂木の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

SK018 (図版 10・11・12・36)

6E7 グリッドに位置する。検出面での平面形は梢円形を呈し、長軸 1.45m、短軸 1.13m を測る。長軸方向は N - 79° - E を示す。底面の平面形は梢円形を呈し、長軸 1.09m、短軸 77cm を測る。検出面からの深さは 1.20m で、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底部中央で径 28cm、底面からの深さ 37cm を測るピット 1 基を検出した。ピットはほかの陥穴と比べると、径が大きい。覆土は黒褐色土または黒色土 (1 ~ 8 層)・にぶい黄橙色土または褐灰色土 (9 ~ 12 層)・にぶい黄褐色土または灰黄褐色土 (13・14・16・17 層)・黒褐色土とにぶい黄橙色土が混合または互層をなす層 (15・18 ~ 25 層) の 25 層に分層した。21 層以外はレンズ状に堆積し、18 ~ 25 層は硬くしまっている。ピット底部から柱状に伸びる 21 層は逆茂木の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

b B グループ

SK002 (図版 10・11・13・37)

7C19・24 グリッドに位置する。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.04m、短軸 80cm を測る。長軸方向は N - 48° - E を示す。底面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 84cm、短軸 59cm を測る。検出面からの深さは 70cm で、断面形は底面が中央に向かって緩やかに傾斜し、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底部中央で径 21cm、底面からの深さ 29cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は

黒色土(1・4層)・明黄褐色土(2・3層)の4層に分層した。1～3層はレンズ状に堆積する。4層は底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK012 (図版 10・11・13・37)

7D18・19・23・24 グリッドに位置する。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.10m、短軸 84cm を測る。長軸方向は N - 77° - E を示す。底面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 80cm、短軸 50cm を測る。検出面からの深さは 68cm で、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近で若干外側に開く箱状を呈する。底部中央で径 20cm、底面からの深さ 29cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒色土(1・8層)・黒褐色土または暗褐色土(2・4層)・灰黄褐色土(3層)・にぶい黄褐色土(5～7層)の8層に分層した。1～7層はレンズ状に堆積し、2・4・5層は礫を含み、5～7層は硬くしまっている。8層は底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK021 (図版 10・11・13・37)

7E13・14 グリッドに位置する。検出面での平面形は楕円形を呈し、長軸 1.22m、短軸 90cm を測る。長軸方向は N - 75° - E を示す。底面の平面形は楕円形を呈し、長軸 96cm、短軸 65cm を測る。検出面からの深さは 69cm で、断面形は底面がほぼ平坦で、北壁が底部付近で内傾し、中位で急斜度に開く以外は、ほぼ垂直に立ち上がっており、箱状を呈する。底面中央で径 15cm、底面からの深さ 31cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒褐色土(1・4・7・8層)・褐灰色土(2・3・5・6層)の8層に分層した。1～7層はレンズ状に堆積する。4～8層は硬くしまっている。8層が底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

c C グループ

SK011 (図版 10・11・13・37)

7D8・9 グリッドに位置する。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.02m、短軸 80cm を測る。長軸方向は N - 78° - W を示す。底面の平面形は長方形を呈し、長軸 57cm、短軸 44cm を測る。検出面からの深さは 95cm で、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近で若干外側に開く箱状を呈する。底面中央で長軸 21cm、短軸 16cm、底面からの深さ 34cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒色土(1・6層)・黒褐色土(2層)・暗褐色土(3層)・にぶい黄褐色土(4層)・灰黄褐色土(5層)の6層に分層した。1～5層はレンズ状に堆積する。2～5層は礫を含み、4・5層は硬くしまっている。6層は底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK013 (図版 10・11・13・38)

7D12 グリッドに位置する。検出面での平面形は円形を呈し、長軸 98cm、短軸 90cm を測る。長軸方向は N - 60° - W を示す。底面の平面形は円形を呈し、長軸 72cm、短軸 64cm を測る。検出面からの深さは 85cm で、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底部中央で径 24cm、底面からの深さ 32cm を測るピット 1 基を検出した。覆土は黒色土(1層)・黒褐色土(2層)・暗褐色土(3層)・にぶい黄褐色土(4・5層)の5層に分層した。1～4層はレンズ状に堆積する。2～4層は礫を含み、4・5層は硬くしまっている。5層は底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK014 (図版 10・11・13・38)

6D25, 7D21 グリッドに位置する。検出面での平面形は楕円形を呈し、長軸 1.27m、短軸 92cm を測る。長軸方向は N - 33° - W を示す。底面の平面形は楕円形を呈し、長軸 84cm、短軸 59cm を測る。

4 遺 構

検出面からの深さは86cmを測る。断面形は底面がほぼ平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底面中央で長軸15cm、短軸12cm、底面からの深さ32cmを測るピット1基を検出した。覆土は黒色土または黒褐色土(1・2・6・9層)・明黄褐色土または浅黄橙色土(3・4層)・暗褐色土または褐灰色土(5・7・8層)の9層に分層した。1～8層はレンズ状に堆積する。3～8層は硬くしまっている。ピット底部から柱状に伸びる9層は逆茂木の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

SK015 (図版10・11・14・38)

6E3・4グリッドに位置する。検出面での平面形は梢円形を呈し、長軸1.14m、短軸92cmを測る。長軸方向はN-4°-Wを示す。底面の平面形は梢円形を呈し、長軸94cm、短軸78cmを測る。検出面からの深さは1.15mを測る。断面形は底面がほぼ平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底面中央で長軸14cm、短軸10cm、底面からの深さ28cmを測るピット1基を検出した。覆土は黒色土(1・2・6層)・暗褐色土(3層)・灰黄褐色土(4層)・黒褐色土(5層)の6層に分層した。1～5層はレンズ状に堆積する。3～6層は硬くしまっている。6層は底面ピットの覆土である。遺物は出土していない。

SK019 (図版10・11・14・38)

6E6・11グリッドに位置する。検出面での平面形は円形を呈し、長軸1.18m、短軸1.04mを測る。長軸方向はN-6°-Eを示す。底面の平面形は梢円形を呈し、長軸87cm、短軸72cmを測る。検出面からの深さは1.08mを測る。断面形は底面がほぼ平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底面中央で径29cm、底面からの深さ28cmを測るピット1基を検出した。覆土は黒褐色土(1・7層)・黒色土(3・5・10層)・暗褐色土(4・6層)・にぶい黄褐色土またはにぶい黄橙色土(2・8・9・12層)・灰黄褐色土(11・13層)の13層に分層した。1～12層はブロック状に堆積する。8～13層は硬くしまっている。ピット底部から柱状に伸びる13層は逆茂木の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

SK020 (図版10・11・14・39)

5E14グリッドに位置する。検出面での平面形は梢円形を呈し、長軸1.10m、短軸81cmを測る。長軸方向はN-30°-Wを示す。底面の平面形は円形を呈し、長軸66cm、短軸58cmを測る。検出面からの深さは1.14mを測る。断面形は底面が中央に向かって緩やかに傾斜し、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近で若干外側に開く箱状を呈する。底面中央で長軸25cm、短軸21cm、底面からの深さ15cmを測るピット1基を検出した。覆土は黒色土(1・4・6・7層)・灰黄褐色土(2層)・黒褐色土(3・5層)・暗褐色土(8層)・にぶい黄橙色土(10層)・にぶい黄褐色土(9・11・14層)・浅黄橙色土(12層)・明黄褐色土(13層)の14層に分層した。2～4・10～14層はブロック状、6～8層は斜位に堆積する。8・9・11・12層は硬くしまっている。ピット底部から柱状に伸びる9層は逆茂木の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

2) 土 坑

土坑は調査区北側(12・13Bグリッド)で1基、東側(20Eグリッド)で1基の計2基を検出した。北側の土坑は縄文時代前期後葉の土器が出土し、この時期の所産と考えられる。東側の土坑は遺物が出土しなかつたので時期は不明であるが、覆土が北側のそれとは異なっていた。

SK001 (図版10・14・39)

12B15・20、13B11・16グリッドに位置する。沢の斜面上で検出し、平面形は不整形を呈する。長軸1.9m、短軸1.63m、検出面からの深さは34cmを測る。長軸方向はN-49°-Wを示す。底面の北

側部分は一段高いテラス状で、全体に凹凸が著しく、断面形は不整形を呈する。形状から2基の土坑が重複している可能性も考えられる。覆土はV層由来の黒褐色土を主体とし、4層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は覆土1層中から縄文土器の深鉢(1)の破片がバラバラに散在した状態で出土した。1は縄文時代前期後葉に比定されるため、この時期の遺構と考えられる。

SK003 (図版10・14・39)

20E21グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径82~87cm、検出面からの深さは69cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土は小礫を含むにぶい黄褐色土の単層で、VII層(地山)との区別は色調のみである。遺物は出土していない。SK003は形状が整っているものの、同様の覆土が不定方向に伸びる落ち込みを周辺で複数検出していることから、SK003も遺構とは断言できないものである。

3) 沢 (図版10・15・39)

12~14B、11~13C、8~12D、8~10Eグリッドに位置する。南西から北東に向かって傾斜している。北東側の14Bグリッドで14~16B~Fグリッドに位置する沢と合流する。南西側または北東側は調査区外に伸びるため正確な規模は不明であるが、幅15~18m、段丘上の地山面からの深さ3.0~4.0mを測る。断面形は弧状を呈する。

VII層(地山)を開析して形成されており、東西側の段丘上~斜面部にかけて基本層序I~VI層に相当する層が堆積しているのを確認した。沢底の覆土は黒褐色土(1~4・9・14層)・褐灰色土(5~8・10~13・15・16層)の16層に分層でき、レンズ状に堆積する。縄文時代の前期以前の堆積層であるV・VI層が斜面上に確認できるため、縄文時代前期には存在していたものと考えられる。遺物は東側斜面部のII層中から縄文土器(82)、古代の土師器(107)、須恵器、石器が散在的に出土している。

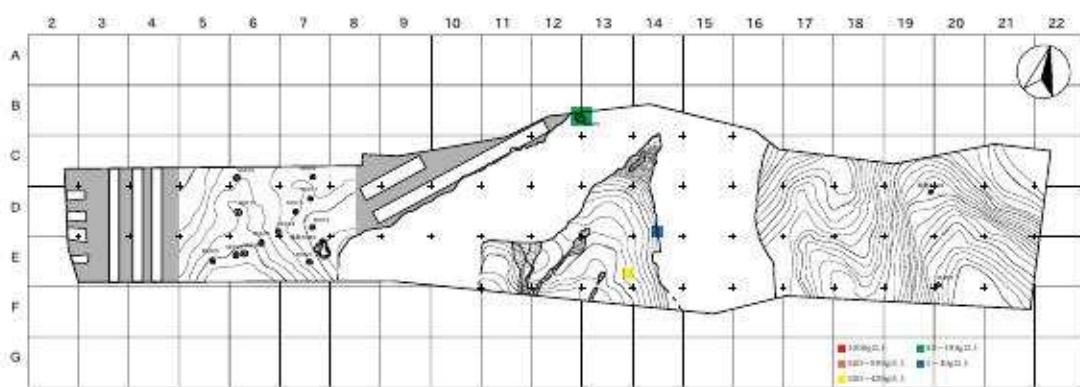
5 遺 物

A 概 要

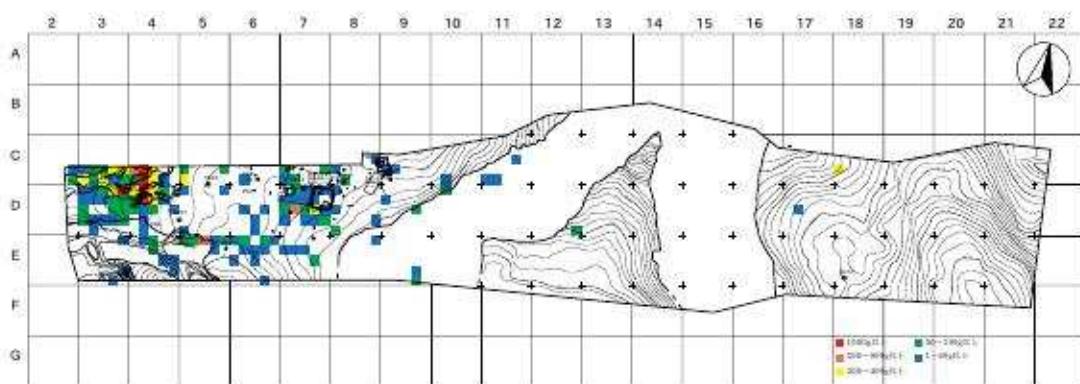
遺物は鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土している。出土遺物には縄文時代の土器・土製品(土器片円板)・石器と古代の土器(土師器・須恵器)・石器(砥石)・鉄滓のほか、中近世の陶磁器が少量ある。

縄文土器はコンテナ(54×34×10cm)で5箱分、重さにして22,752g出土している。そのうち、鹿瀬軽石質砂層の下層から前期後葉に比定されるものが1,080.6g出土している。12・13Bグリッドに位置するSK001と、14D23グリッドV層中または13E15グリッドVI層中からの出土である(第12図)。上層からは中期前葉または後期以降のものが21,671.4g出土している。中期前葉のものが主体を占め、分布は調査区西側のSR1全体(2~4C~Dグリッド)とSR4北東側(5Eグリッド)またはP50周辺(7Dグリッド)に集中している。後期以降のものは調査区中央の沢の斜面部(11Cグリッド)または東側(18Cグリッド)で少数出土している(第13図)。器種別に見ると上層で浅鉢と台付土器を1点ずつ確認したほかはすべて深鉢と考えられる。土器片円板はSR1内またはその上層(II層)から4点出土した。縄文時代中期前葉の土器に混在した状態で出土している。

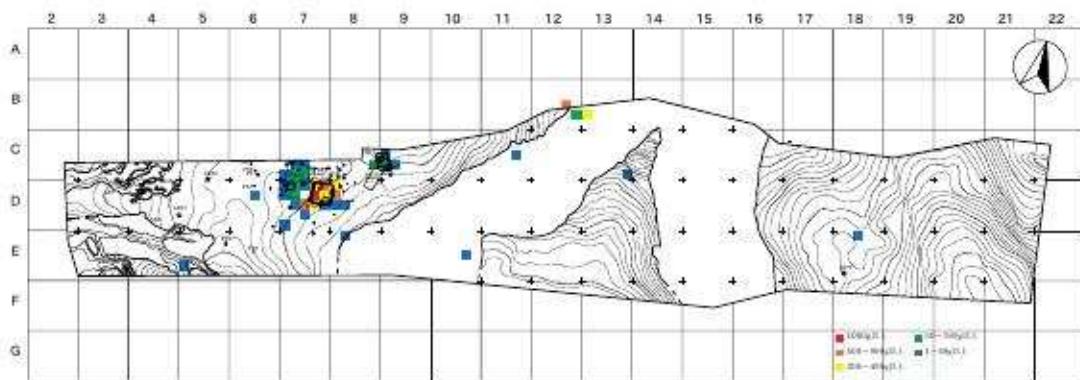
土師器は上層からコンテナ(54×34×10cm)で2箱分、重さにして7,213.8g出土している。器種別に見ると、椀1,288.1g、甕57.8g、鍋5,861.0g、器種不明6.9gである。分布は調査区北側の竪穴住居(SI11・12)または掘立柱建物(SB64)の周辺と沢の斜面部(12・13Bグリッド)にまとまっている(第14図)。



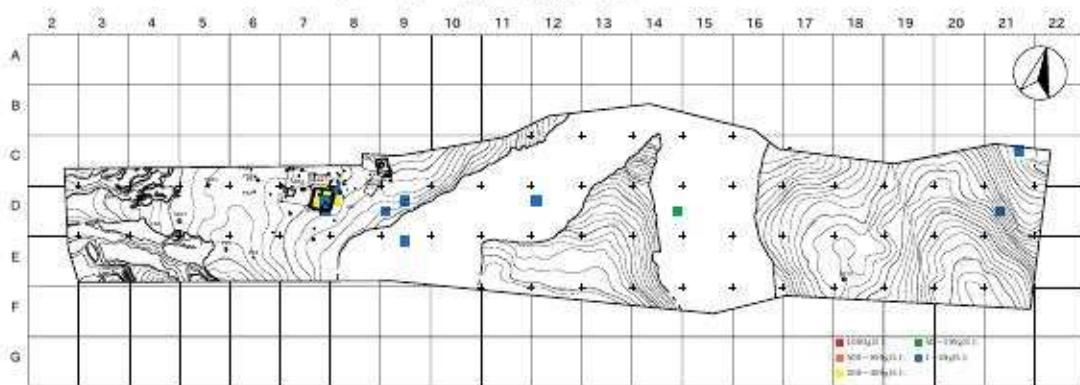
第12図 下層 縄文土器分布図 (S=1/1,500)



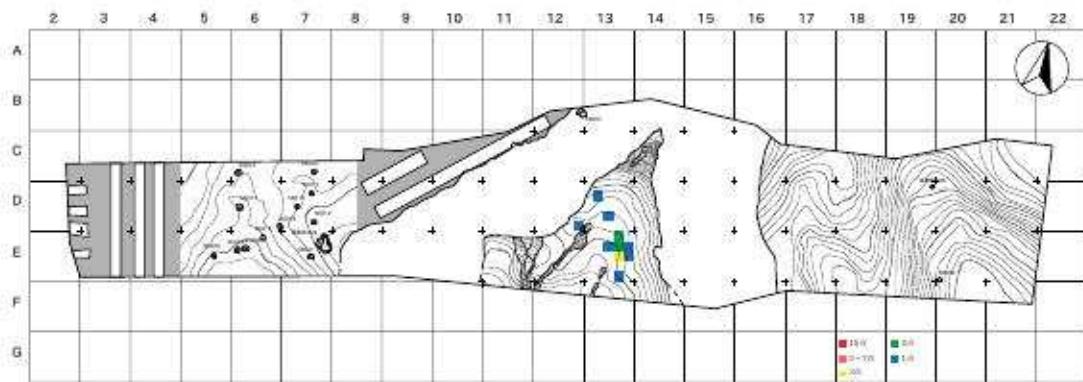
第13図 上層 縄文土器分布図 (S=1/1,500)



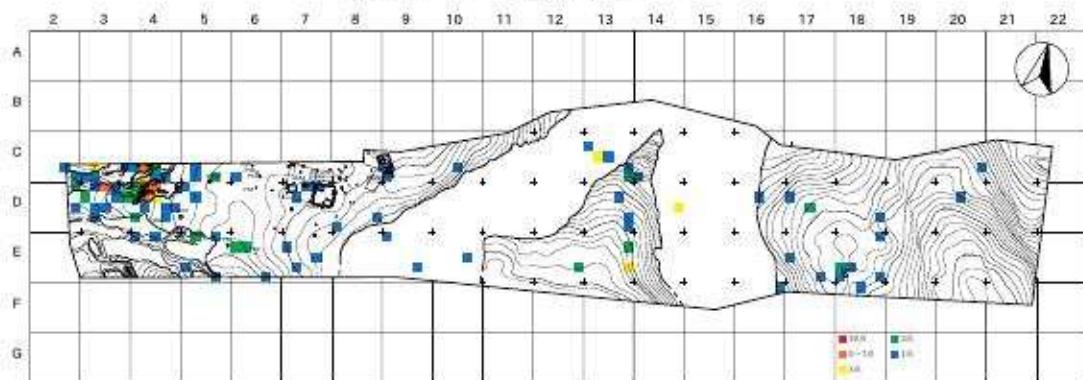
第14図 上層 土師器分布図 (S=1/1,500)



第15図 上層 須恵器分布図 (S=1/1,500)



第16図 下層 石器分布図 (S=1/1,500)



第17図 上層 石器分布図 (S=1/1,500)

須恵器は上層からコンテナ ($54 \times 34 \times 10\text{cm}$) で 0.5 箱分、重さにして 1,396.1g 出土している。器種別に見ると、杯 42.1g、杯蓋 33.0g、甕 875.2g、瓶子 445.8g である。分布は SI12 に集中するが、SI11 からは出土していない。調査区中央～東側からも少数出土している(第 15 図)。

石器は 170 点出土している。このうち下層から 13 点出土しており、層位から縄文時代の前期以前のものと推測できる。出土位置は調査区中央 (12・13D・E グリッド) の舌状の尾根に限定される(第 16 図)。上層からは 157 点出土している。2～4C・D グリッドに分布する一群、6・7D・E グリッドにかけて散漫に分布する一群、13・14C～E グリッドに分布する一群、17・18D・E グリッドにかけて散漫に分布する一群に分かれているが、大部分は西側の SR1 (2～4C・D グリッド) に集中しており縄文土器とほぼ同様の出土傾向を示している(第 17 図)。以下、縄文土器・土製品、古代の土器、中世の土器、縄文時代の石器、古代の砥石、鉄滓の順に説明を行う。石器は種類別に記述した。

B 土器・土製品

1) 縄文土器(図版 16・17・18-60～82、図版 40・41)

a 分類

縄文土器の分類は時期別に I～III群に大別した。出土量の多い中期前葉の土器群(II群土器)については、本遺跡西側に位置し、時期も近似する阿賀町大坂上道遺跡の報告書で示された分類案【桐原ほか 2008】を参考にした上で、系統・器種・文様等による細別を行った。

I群土器(1・2) 前期に比定されるもの。下層の遺構または遺物包含層から出土している。東北系の大木 5b 式土器を確認した。

II群土器(3～80) 中期前葉に比定されるもの。上層の遺構または遺物包含層から出土している。

1類 (5・9・10・14・18～51) 北陸系の新崎式土器またはそれに類似するもの。器種・文様等で以下の様に細別した。

- A : 口縁部を半隆起線で横位区画する深鉢。
 - B : 口縁部の横位区画内に陰刻手法で施文する「彫刻蓮華文」¹⁾を施す深鉢。
 - C : 横位区画内に軌軸文を施す深鉢。
 - D : 口縁部に縦沈線を施す深鉢。
 - E : 口縁部下半に縦沈線を施す深鉢。
 - F : 体部の区画内に格子目文を充填する深鉢。
 - G : 体部に燃糸文を施す深鉢。
 - H : 新崎式系土器の深鉢と目されるが、破片のため詳細が不明なもの。
 - I : 浅鉢。
 - J : 台付土器。
- 2類 (15・52～61) 関東系の五領ヶ台式土器またはそれに類似するもの。沈線文に沿って交互刺突列を施すものが多い。
- 3類 (3・62・63) 口縁部外側が肥厚しているもの。
- 4類 (6・7・11・12・64～75) 隆線や沈線等で文様を描いているが、1～3類に当てはまらないもの。
- 5類 (4・8・13・16・17・76～80) 繩文を主体とするもの、あるいは無文のもの。
- Ⅲ群土器 (81・82) Ⅱ群土器と比べて薄手の作りであるため、後期以降に比定されると考えられるもの。
上層の遺物包含層から出土している。

b 土器各説

下層遺構出土

SK001 (図版 16-1、図版 40)

I群土器が出土している。1は体部から口縁部にかけて直線状に開く器形を呈し、口縁部は若干肥厚する。頸部に横走沈線が巡り、その下に沈線による鋸歯状文を横位に描くことで口縁部と体部を区画する。東北系の大木 5b 式土器に比定できる。

下層遺物包含層出土 (図版 16-2、図版 40)

2はI群土器である。4条の沈線が横位に巡る。風化が著しいが、胎土や混入物は1に類似する。

上層遺構出土

P3 (図版 16-3・4、図版 40)

II群土器が出土している。3は3類である。体部に縦方向の燃糸文を施す。4は5類の底部と考えられ、底面に網代痕が見られる。

P50 (図版 16-5～8、図版 40)

II群土器が出土している。5は1D類である。6・7は4類である。6は口縁部に爪形を施し、その下に隆線が横位に巡る。7は頸部に半截竹管状の工具によって施文される半隆起線と刺突列が横位に巡る。

1) 1990年代以降、彫刻蓮華文を施すものは新保式土器の最終段階に位置付けられ、次段階の刻印蓮華文を施すものから新崎式土器とする考え方〔前山 1994・佐藤 1997・長澤 2007など〕が多数を占めている。本報告書では「新崎式の成立を設定当時に立ち返って蓮華文出現時と定め」とする〔寺崎 2009〕に準じ、上記の土器を新崎式土器として記述する。

8 は 5 類の体部破片である。

P60 (図版 16-9、図版 40)

II 群土器が出土している。P60 は平安時代の掘立柱建物の柱穴と考えられるため、遺構に直接伴うものではなく、混入品と推定される。9 は 1B 類である。

SR1 (図版 16-10 ~ 13、図版 40)

II 群土器が出土している。10 は 1H 類である。半隆起線で縦位に文様区画した後、区画内に縦方向の沈線を施す。11・12 は 4 類である。11 は口縁部の羽状縄文地に半隆起線を横位に巡らす。12 は口縁部に二個貼瘤して、その下に半隆起線と沈線による鋸歯状文が横位に巡る。13 は 5 類である。口縁部内側が肥厚する。

SR4 (図版 16-14 ~ 17、図版 40)

II 群土器が出土している。14 は 1I 類である。口縁部から体部上半にかけて LR 縄文を縦方向に施文した後、2 条の半隆起線で口縁部と体部を横位区画する。口縁部は下部に三角形の陰刻を施文し、陰刻間に縦位の沈線を描く「彫刻蓮華文」が横位に巡る。15 は 2 類である。縦位の沈線に沿って交互刺突を施す。16・17 は 5 類である。

上層遺物包含層出土 (図版 16-18 ~ 21・17・18、図版 40・41)

18 ~ 80 は II 群土器である。18 ~ 21 は 1A 類である。18・19 は口縁部と体部の間の区画内に爪形が横位に巡る。18 の口縁部には縄文が施される。19 の口縁部には U 字状の隆線が垂下する。20・21 は無文地に半隆起線で横位区画する。

22 ~ 27 は 1B 類である。22・23・26 は口縁部の蓮華文下に 1 条の半隆起線を巡らし、その下は無文である。24 は蓮華文下に 2 条の半隆起線を巡らし、25 は蓮華文下の 2 条の半隆起線間に無文帯を持つ。なお、本遺跡で確認できた蓮華文はいずれも陰刻手法で施文する「彫刻蓮華文」で、半截竹管状の工具を連続刺突することで花弁文様を表現する「刻印蓮華文」は確認できなかった。

28 は 1C 類である。半隆起線による横位区画内にヘラ状の工具で縦または横沈線を描く、いわゆる「軌軸文」を施す。

29 ~ 31 は 1D 類である。29 は口縁部下に半隆起線で区画した無文帯を持つ。

32・33 は 1E 類である。両者は色調が異なるものの、文様の類似性から同一個体の可能性がある。33 は半隆起線による横位区画内に縦方向の沈線を描く。

34 ~ 38 は 1F 類である。34・35 は蕨手状文、36・37 は半隆起線による B 字状文が描かれる。

39・40 は 1G 類で、半隆起線による横位区画内に 39 は蕨手状文と縦方向の半隆起線が描かれ、40 は爪形が横位に巡る。

41 ~ 50 は 1H 類である。41・42 は爪形文、44・47・50 は半隆起線による B 字状文、49 は U 字状文が描かれているものと考えられる。45 は隆線による蕨手状文、46 は貼瘤を付す。

51 は 1J 類で、台付土器の脚部である。上半は円形または方形の透孔が開けられていたものと考えられ、縦方向の沈線が垂下する。裾部には半隆起線が巡り、その区画内には陰刻手法による円形文とヘラ状工具による軌軸文が施される。

52 ~ 61 は 2 類である。52 は半隆起線で区画した口縁部に三角形の交互刺突列が横位に巡る。53 ~ 59 は体部破片で、縦方向の沈線に沿って交互刺突を施す。58・59 は同一個体と考えられ、縦方向の隆線も見られる。60 は口縁部に縦方向の沈線を施し、貼瘤文を付す。61 は底部で 3 条の沈線が横位に巡り、

その上に円形の刺突が横位に巡る。

62・63は3類である。阿賀町大坂上道遺跡の第I群3類A種〔桐原ほか2008〕とされているものに類例がある。62は体部に半隆起線を施す。63は口縁部から体部にかけて縄文を施す。

64～75は4類である。64～66は口縁端部に刺突を巡らすものである。65は刺突列下に半隆起線が巡る。67～69は貼瘤文を付するものである。67・68は体部に縄文を施しており、魚沼市清水上遺跡捨場B出土土器〔寺崎ほか1996〕、津南町城林遺跡4号住居出土土器〔長澤1997〕に類例がある。70・71は口縁部または体部の隆線上に縄文を施す。72は頸部に三角形の貼付文を付す。73は円形の刺突を連続させることで口縁部から体部にかけて渦巻等の文様を描いている。74は隆線上に縄の圧痕が見られる。75は口縁部に1条の沈線を横位に巡らし、その下に縦方向の隆線が垂下する。体部には縄の圧痕により文様が描かれる。

76～80は5類である。76・77は無文、78～80は縄文を主体とする。78は口縁部に突起を持ち、突起上端または口縁端部に縄文を施す。79・80は底部で、底面に網代痕が見られる。

81・82はⅢ群土器である。81は波状口縁を呈し、体部には櫛歯状の工具による斜行文が描かれる。82はⅡ群土器と比べて薄手の作りで、単節縄文を施文する。

2) 土器片円板 (図版 18-83～86、図版 41)

83～86はⅡ群5類土器の体部片を二次加工したものと考えられる。意図的なものか、使用による摩滅かは不明だが、周縁破碎面の大部分を研磨しており、平面形は83・86が楕円形、84が円形、85が多角形である。83はSR1出土。ほかは上層遺物包含層出土である。

3) 古代の土器 (図版 19-87～111、図版 41)

古代の土器には土師器・須恵器があるが、出土数が少ないとから器種のみを提示し、その中の細別は行わないこととした。すべて上層からの出土である。土器の時期は〔春日1999〕を参考にした。

a 遺構出土

SI11 (図版 19-87～89、図版 41)

土師器椀(87・88)、鍋(89)が出土している。87・88は内面に黒色処理を施す。87の体部外面下半はロクロケズリ調整され、中位に墨書があるが判読できない。時期は9世紀後半から10世紀初頭に比定される。89は体部破片で、外面に平行のタタキ痕が見られる。

SI12 (図版 19-90～104、図版 41)

土師器椀(90～95)、甕(96・97)、器種不明の脚部(98)、鍋(99～101)、須恵器瓶子(102)、甕(103・104)が出土している。90は内・外面にミガキを施した後黒色処理を行う。91は内面にミガキを施した後黒色処理を行う。92は内・外面全体にミガキを施した後、内面に黒色処理を行う。時期は9世紀後半～10世紀初頭に比定される。93～95は黒色処理を施さないものである。93の口縁部は外反する。94は体部中位で若干内傾し、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。95の底面の切り離しは糸切りである。

96・97は小型の甕である。96の口縁は上方に摘み上げられている。97の口縁部は段を持ち、端部は上方に摘み上げられている。99は口縁が外反する。体部はカキメ調整され、外面の体部下半から底部にかけて平行のタタキ痕が見られる。100の体部は直線的に開き、口縁部で上方に摘み上げられる。101

は口縁が外反する。口縁部には補修のための孔が開けられている。

102 は口縁が欠損しているものの、ほぼ完形の状態で出土した。底部は一部剥落しているものの、平底と考えられる。体部下半が最大径となり、頸部がくびれ、口縁部が外反するいわゆる徳利形の器形を呈する。体部外面下半はロクロケズリ調整され、その上に茶色の付着物（漆？）が見られる。徳利形の器形を呈する須恵器は石川県小松市二ツ梨豆岡向山古窯跡 3 号窯〔望月 1993〕、同市戸津古窯跡群 8 号窯〔望月ほか 1992〕で出土しており、愛知県三好町猿投古窯跡黒窯 90 号窯〔檣崎ほか 1980〕出土の灰釉陶器との類似性が指摘されている〔望月 1993〕。

103 は内面の体部下半にヘラケズリ痕が見られる。胎土から会津大戸窯産と推定される。104 はカマ下内部から出土しているが、被熱した痕跡が見られないため、カマドが使われなくなった後に遺棄されたものと考えられる。

SK30 (図版 19-105, 図版 41)

土師器椀 (105) が出土している。体部外面下半はロクロケズリ調整され、内面はミガキを施した後、黒色処理を行う。

b 遺物包含層出土 (図版 19-106 ~ 111, 図版 41)

106 は土師器椀である。口縁部内面に火だすき痕が見られる。107 は土師器鍋である。口縁部と体部の間には微隆線が横位に巡る。口縁部は外反し、微隆線の上には指で押されたような円形のくぼみが横位に巡る。体部は上から下にかけてのヘラケズリ痕が見られる。

108・109 は須恵器杯蓋である。108 の外面には自然釉が付く。109 の内面は磨耗し、墨痕は見られないものの転用窓であろう。110 は須恵器有台杯である。底部破片で、高台は外端接地する。111 は須恵器甕の体部破片である。

4) 中世の土器 (図版 19-112, 図版 41)

112 は片口鉢の底部破片である。内面は 9 本一単位の卸目が多条に入り組んでいる。破碎面を含む全体に灰色を呈する石灰状の付着物が見られる。胎土の特徴から越前焼と推定される。

C 石器・石製品

1) 縄文時代の石器 (図版 20 ~ 22・23-33 ~ 38, 図版 41 ~ 42)

a 分類

石器の分類は本遺跡周辺に位置し、時期も近似する阿賀町北野遺跡上層〔高橋ほか 2005〕または大坂上道遺跡〔桐原ほか 2008〕の分類に従った。ただし、すべての分類項目を提示すると煩雑になるため、本遺跡で実際に出土した石器に適用できる分類項目のみを抽出し、記述する。

出土した石器の総数は 170 点で、鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土した。その内訳は上層 157 点、下層 13 点である。石器は石鏃未成品・石錐・箆状石器・不定形石器・剥片・石核・磨製石斧・敲磨石類・石皿・砥石・台石が出土した。各集中域（第 16・17 図）の石器が器種別に偏在する傾向は箆状石器以外では認められなかった。箆状石器は 13・14C ~ E グリッドに分布し、その他の集中域では出土していない。また石器には珪質頁岩・頁岩・流紋岩・緑色凝灰岩・凝灰岩・鉄石英（赤）・鉄石英（黄）・碧玉・玉髓・蛇紋岩・安山岩・花崗岩などが使用されている。器種別の石材の偏りや、集中域ごとに異なる

5 遺物

る石材が利用されるといった傾向は見いだせなかった。各集中域の石器分布範囲が極めて広いことや、石器製作時に出る剝片・碎片はほとんど出土していないことから、いずれの集中域も石器製作跡でないことは明らかである。遺物図版に掲載する石器は、定形的なもの、二次加工や使用痕が明瞭に認められるものを選択した。石器器種・石材別組成は以下のとおりである（第3表）。

下限																
重量／(重箱) g	件数	刃部	剥離部	鋸切部	鉋石角(度)	鉋石角(度)	半軸	複合部	穿孔部	鉋石部	鉋石部	その他	合計	当種ごとの合計		
鉋工具	1	(D.E)										1	(0.8)	1	(0.8)	
鉋状石器B2		3	(34.5)									1	(29.7)	4	(33.7)	
不規則石器A		1	(133.8)									1	(133.8)	1	(133.8)	
剝片	2	(127.8)	9	(215.9)	1	(38.4)			3	(16.9)			8	(389.0)	9	(389.0)
複合石器A2												1	(117.0)			
複合石器C												1	(649.7)			
鉋石	2	(127.8)	1	(D.E)	6	(39.4)	1	(38.4)			2	(16.9)				
合計	31	(929.3)	1	(D.E)	6	(39.4)	1	(38.4)			12	(176.3)				
上限												128	(1340.8)			
直角／(重箱) g	件数	刃部	剥離部	鋸切部	鉋石角(度)	鉋石角(度)	半軸	複合部	穿孔部	鉋石部	鉋石部	その他	合計	当種ごとの合計		
石器未成品	1	(14.1)										1	(14.1)	2	(14.1)	
右側刃	1	(16.5)										1	(16.5)	2	(16.5)	
直角石器A1	1	(54.0)										1	(54.0)			
直角石器A2		1	(69.7)									1	(69.7)			
直角石器B2		3	(131.1)									3	(131.1)	3	(131.1)	
不規則石器A		3	(110.0)									4	(112.1)			
不規則石器B	2	(145.6)	3	(115.0)	2	(25.6)	1	(31.4)				6	(126.1)			
半規則石器D	3	(17.8)										4	(18.9)			
不規則石器D	2	(19.8)	1	(12.9)								3	(10.7)			
半規則石器E		1	(30.5)									2	(49.7)			
半規則石器F	4	(16.0)	5	(16.9)	2	(22.0)	2	(16.5)	1	(31.0)		14	(128.6)			
不規則石器G	12	(253.2)	9	(253.5)	2	(33.0)	8	(33.0)				31	(961.5)	60	(2010.6)	
鉋石	13	(240.0)	17	(436.3)	10	(141.1)	7	(72.0)	1	(13.8)		3	(340.0)	58	(1016.7)	
右側	3	(132.4)	3	(262.7)	2	(208.6)	4	(224.2)	1	(17.1)			13	(1004.0)	34	(1084.0)
複合石器A2												1	(11.0)	2	(11.0)	
複合石器B1												1	(72.9)			
複合石器B2												1	(113.1)			
複合石器B3												2	(139.7)			
複合石器C												2	(501.0)			
鉋石A												2	(534.3)	6	(2780.0)	
鉋石B												1	(24.9)	1	(24.9)	
鉋石C												1	(1413.5)	4	(1413.5)	
右石												1	(2194.0)	4	(2194.0)	
分厚不同												1	(2.0)	1	(2.0)	
合計	31	(929.3)	1	(D.E)	45	(1632.7)	23	(396.0)	26	(3070.2)	3	(51.8)	1	(2.1)	2	(2.0)
												1	(113.8)	8	(2447.3)	
												3	(3790.1)	14	(3840.0)	
												157	(10662.0)			

第3表 石材別石器器種数

b 石器各説

石鎌未成品（図版 20-1、図版 41）

小型の剝片・礫の周縁に奥行きのある二次調整が施され、石鎌の未成品と考えられる石器である。1は裏面に平坦な疊面を残す素材を用いる。左側面は折損している。右側縁から奥行きのある平坦な調整が、基部側の平坦面からその厚みを減じる調整が行われている。

石錐（図版 20-2・3、図版 41）

剝片の一部または全面に二次調整を加え、錐部を作り出した石器である。錐部と摘み部の境が不明瞭で緩やかに広がり、長さに対し幅の比率が小さく、錐部から摘み部への開き角が小さい C1 類 (2) と素材の端部に二次調整が加えられ、ピック状の短い錐部が作り出される D 類 (3) が出土した。2は下層から出土しており、左側縁上部に折損が認められる。折損後、形状修正のために基部側から1回の剝離による調整が行われる。錐部先端の縁辺には使用痕と考えられる光沢がわずかに認められる。3の錐部の先端には肉眼では使用痕と考えられる痕跡は認められない。

不定形石器（図版 20-4～12・21-13～21、図版 41・42）

剝片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や、使用痕が認められる不定形な石器である。連続的な押圧剝離による滑らかで長い刃部を持つもののうち、片面・半両面調整の A 類 (4～8)、連続状の剝離による鋸歯状の刃部を持つ B 類 (9～13)、両面に連続状の剝離のある C 類 (14～17)、素材の端部に連

続状の剥離による刃部を持つ E 類 (18)、不連続な剥離の刃部を持つ F 類 (19)、二次調整が認められず、刃こぼれ状の微細剥離・摩耗・光沢などの使用痕が認められる G 類 (20・21) が出土した。

4 は下層から出土しており、主要剥離面側を正面として図示した。石器の左側面または右側面に見られる大きな剥離面は折損または折り取りである。この折損または折り取り後の面から細かい調整が正面側に向かって行われている。左側縁には急斜度な刃部が、右側縁にはやや鋭い刃部が形成される。5 は上半部を欠損する。両側縁に急斜度で大きな調整が行われ、剥片末端側は尖頭状となる。左側縁には大きな調整後、細かい調整が連続して認められ、大きな調整が主体的な右側縁とは対照的である。6・7 は石核下縁を大きく取り込み、末端が肥厚する剥片を用いる。6 は右側縁から下縁にかけて、7 は両側縁から下縁にかけて調整が行われている。特に下縁は肥厚した剥片末端部の形状を利用した急斜度な刃部を形成している。8 の右側縁には主要剥離面側に向かう折損面があり、その面から正面側に細かい調整が行われる。石器の大きさは異なるがこれらの特徴は 4 の右側縁と類似する。

9 は正面に向かう調整が主体的であるが、剥片末端側は裏面にも調整が行われる。10 は上縁が裏面方向、右側縁が正面方向、下縁が裏面方向と縁辺の部位によって交互に剥離方向を変えている。上縁の刃部は急斜度でそのほかは比較的緩斜度な刃部を形成する。左側縁には礫面が残存しその部分には調整は認められない。比較的奥行きのある剥離が見られること、平面方形で、各辺を意識し調整していると考えられることから、定形的な石器の未成品の可能性もある。11・12 は主に剥片の一辺にのみ急斜度な調整が認められる石器で、向かい合う未調整の一辺と交わり、尖頭状を呈する。裏面の調整も部分的に行われる。13 は縦長剥片の右側縁に連続的な調整が施される。丁寧な調整ではないため、結果的に鋸歯状の刃部となる。

14 は上半部を折損または折り取りによって失っている。弧状を呈する剥片下縁に沿って左側縁から底縁に両面調整を行う。右側縁には折損または折り取り面が認められる。15 は下縁側の一部に折損面が認められる。上縁・両側縁・下縁に調整が行われる。調整は裏面に認められるものの方は奥行きがある。正面の調整に打点の認められるものは少なく、裏面の調整の方に打点を残すものが多いことから、裏面側の調整の方が新しいと言える。下縁側の折損面からも裏面に調整が行われている。16 は上半部を折損または折り取りによって失う。両側縁から下縁にかけて調整が認められる。14 と同様に弧状を呈する剥片下縁に沿って調整を行う。剥片末端部には調整を行っていない部分がある。17 も上半を折損または折り取りによって失う。左側縁から下縁にかけては両面調整で、右側縁は裏側に片面調整が行われる。

18 は石核下縁を取り込み、末端部が肥厚する寸詰まりな剥片を用いる。素材の形状を利用して下縁に円弧状の分厚い刃部が形成される。19 は両側縁に連続的な微細剥離痕が観察される。右側縁下部裏側に若干大きめの剥離が連続し、意図的な二次調整の可能性がある。右側縁の微細剥離痕が連続する範囲には、正・裏面ともに縁辺に沿って光沢が認められる。

20 は右側縁下部に微細剥離痕が連続する。21 は礫の表皮部分の大型の剥片を用いる。微細剥離痕は剥片下縁側の正・裏面の両方に認められる。

箇状石器（打製石斧）（図版 22-22～27、図版 42・43）

中型から大型の扁平礫や剥片の両側縁に二次調整を加え、斧形に仕上げた石器で、刃部幅が広く、基部幅が狭い A 類のうち、刃部から基部への側縁ラインが外湾状ないしは直線状の A1 類 (22) と刃部から基部への側縁ラインが内湾状の A2 類 (23)、刃部幅と基部幅がほぼ同じ B 類のうち刃部幅と基部幅がともにやや広く、太身の B2 類 (24～27) が出土した。

22 は正面に礫の表皮を大きく残す縦長剥片を素材とする。基部から両側縁は両面調整であるのに対し

刃部は裏面への調整が主体的で片刃に近い形状となる。23の素材は横長剝片で上半部を欠損する。両側縁は入念な両面調整により抉入部を作り出す。刃部は素材獲得時の鋭い線辺をそのまま生かし、顕著な調整は行われていない。刃部には部分的に摩耗・光沢が認められる。24は横長剝片を素材とし、22と同様に両側縁は両面調整で正・裏面とも加工量は同様である。刃部は正面への調整が主体的で片刃に近い形状を呈する。25は横長剝片を素材とする。基部から左側縁にかけては正面側への調整が、刃部は裏面側への調整が主体的で、共に片刃に近い形状となる。26は下層から出土しており、裏面に調整がほとんど行われず、正面側への調整が主体的である。完全な片刃で、断面形は蒲鉾形を呈する。27は基部から両側縁にかけて両面加工であるが、刃部は正面側への加工量が多く片刃に近い形状となる。

磨製石斧（図版 22-28、図版 43）

敲打・研磨により斧状に仕上げた石器で、基部幅が広く、刃部から基部へのすぼまり方の弱いA類のうち、基部平面形が跳び箱状または隅丸方形状を呈し、基部の縦位断面形は隅丸方形状、基端の平面形は隅丸長方形となるA2類(28)が出土した。28の石質はオリーブ灰色を呈する蛇紋岩である。研磨され光沢がある。正・裏面には斜位の線条痕が密に認められ、側面には長軸方向の線状痕が認められる。刃部には刃こぼれ状の微細な凹凸がある。

敲磨石類（図版 22-29～31、図版 43）

礫の表面に、使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器で、礫面に磨痕が認められず、敲打痕が認められるB類のうち、正・裏面のいずれかに敲打痕があるB1類、正・裏面に敲打痕ではなく、側面のいずれかに敲打痕があるB2類、正・裏・側面のいずれにも敲打痕がなく、端部のみに敲打痕があるB3類、主に梢円柱・角柱状の礫の側縁部に磨痕や敲打痕が施され面をなすC類（29～31）が出土した。なお敲磨石類についてはC類のみ遺物図版に掲載する。

29～31は、片側縁にのみ帯状の磨面が形成される。29・30はやや扁平な梢円礫を素材とする。29の磨面は滑らかではなく、ざらつきがある。30の磨面中央は滑らかであるが縁辺に近い部分は細かい敲打痕が残り、ざらつきがある。正面中央には深く短い線条痕が横位に認められる。31は下層から出土しており、断面三角形状を呈する礫を素材とし、面と面が交わる稜線部分に幅の狭い平坦な磨面が形成される。いずれも縄文早期末葉～前期初頭の特殊磨石に類似する。

砥石（図版 22-32・33、図版 43）

礫の表面に、使用の結果残された磨面（砥面）が認められる石器のうち、面状または帶状砥面を持つA類（32・33）が出土した。32は上部・右側縁部を欠損する。粒度のやや粗い凝灰岩を素材とする。裏側には平坦な砥面が作り出され、顕著な線条痕が認められる。35は軽石質の安山岩の円形扁平礫を素材とする。砥面は裏側に認められ線条痕が密に認められる。利用が著しいため完全に砥面は平坦化している。

石皿（図版 23-34、図版 43）

扁平大型な礫の正面または裏面に、使用や調整の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもののうち、使用面が作り出されず、素材獲得時の礫面をそのまま使用するB類（34）が出土した。

34は多孔質な安山岩を素材とし、正・裏面に非常に滑らかで平坦な磨面が形成される。

石核（図版 23-35～38、図版 43）

剝片剝離終了後の残核である。石核に関しては多様性があり分類基準に当てはめることが難しいため今回は分類していない。35は分厚い剝片の主要剝離面を石核の打面として設定する。剝片背面側に寸詰まりな横長剝片を剥離する。剝離は剝片の基部・左側縁・下縁に及び、円盤状の残核となる。36は直径

7cm程度の礫を半割した素材を用いており、下縁に礫の表皮を残している。礫を半割した面に打面調整を行う。作業面は礫の外縁部に沿って設定され、正面・右側面・裏面に剥片剥離作業を行う。37も36と同様な石核で、礫を半割した素材を用いている。

38の石核は裏面に主要剥離面を残しており、分厚い剥片を素材としていることが分かる。石核は四角くサイコロ状を呈する。作業面は剥片背面側に設定される。打面は左・右側面と上面に設定され、正面に剥片剥離作業を行なう。石核としたが、非常に小型であることから小型石器の未成品の可能性もある。

2) 古代の砥石 (図版23-39~41、図版43)

39はSI11覆土1層中から出土した。凝灰岩製で、石質は灰黄褐色を呈し、粒度は比較的細かく均質である。砥面は正・裏面、左・右側面、上・下面とすべてに認められる。上・下面の砥面は微細な凹凸が残存し、滑らかな砥面を形成していない。そのほかの砥面は滑らかでごく浅い線条痕が認められる。

40は9C17グリッドII層中から出土した。左側面を欠損する。凝灰岩製で、石質は明るい灰白色を呈し、39よりも粒度が若干粗い。正・裏面、右側縁には滑らかで平坦な砥面が形成され、ごく浅い線条痕が認められる。下面には砥石素材を切り出した面が残り、深く凹凸のある線条が認められる。おそらく鋸で切り出した痕跡であろう。41は7D4グリッドII層中から出土した。凝灰岩製で、石質は灰白色を呈し、粒度が細かく均質である。右側縁には平坦な砥面が形成され、縁辺には明瞭な稜を残す。礫面にも広範囲にごく浅い線条痕が認められることから、様々な部位を利用していたことが分かる。

D 鉄 淬 (図版23-42、図版43)

42はSI12覆土2層中から出土した楕円形淬で、重さ309gを測る。鉄淬はほかにもSI12覆土中と7D3グリッドII層中から1点ずつ出土している。向大浦遺跡で鉄淬以外の鍛冶関連の遺構・遺物は検出できなかった。

6 ま と め

A 陥穴について

陥穴は調査区西側(5~7C~Eグリッド)の下層で12基を検出した。検出層位から、縄文時代の前期以前に形成されたものと推定できるが、出土遺物がないため詳細な存続時期は不明である。それぞれの規模や長軸方向から、A・B・Cグループの3つに区分できるものと考えられる。

新潟県における陥穴の分類基準については、133基の陥穴を検出した新潟県湯沢町岩原I遺跡〔佐藤1990〕を基にして論述したものが多い〔品田ほか1997・田海1999〕。本稿でもこれを参考として、新潟県内における他地域との比較・検討を行いたい。分類は以下のとおりである¹⁾。

- a類：検出面の平面形は円形を呈するものが多く、楕円形、隅丸方形も見られる。底面の平面形は円形、楕円形、隅丸長方形を呈する。断面形は漏斗状を呈するものが多く、箱状も見られる。
- b類：検出面または底面の平面形が円形を呈するものが多く、楕円形も見られる。断面形は中間部が狭まる箱状を呈するものが多く、漏斗状も見られる。

1) 平面形または断面形の表記は第四章4Bに準拠した。従って〔佐藤1990〕とは異なる表記をしたか所もある。

c類：検出面または底面の平面形が円形または楕円形を呈する。断面形は箱状を呈する。底部にピットを有するもの（I）と有さないもの（II）に細分できる。

d類：検出面の平面形が楕円形、長楕円形を呈するものが多く、隅丸長方形、円形も見られる。底面の平面形は長楕円形、隅丸長方形を呈するものが多く、楕円形も見られる。断面形は箱状を呈するものが多く、漏斗状も見られる。底部にピットを有するもの（I）と有さないもの（II）に細分できる。

e類：検出面の平面形は中央部が狭まる長楕円形（溝状）を呈する。底面の平面形は中央部が狭まる隅丸長方形（溝状）を呈する。断面形は袋状を呈するものが多く、箱状も見られる。底部にピットを有するもの（I）と有さないもの（II）に細分できる。

f類：a～e類に属さないもの。【品田ほか1997・田海1999】では検出面または底面の平面形が長楕円形（溝状）、断面形は箱状を呈し、底部にピットを有さないものとしている。

向大浦遺跡の陥穴をグループごとに上記の分類に照合して見ると、Aグループは検出面または底面の平面形が楕円形2基、円形1基、断面形は3基とも箱状で、底部にピットを有しており、c I類に相当する。Bグループは検出面または底面の平面形が隅丸長方形2基、楕円形1基、断面形は3基とも箱状で、底部にピットを有しており、I類に相当する。Cグループは検出面の平面形が楕円形3基、円形2基、隅丸長方形1基、底面の平面形が楕円形3基、円形2基、長方形1基、断面形は6基とも箱状で、いずれも底部にピットを有しており、d I類に相当する。

本遺跡の陥穴は切り合い関係が見られず、出土遺物もないため、グループごとの新旧関係は不明である。ただ新潟県内の事例では検出された層位や切り合い、出土遺物の年代からc類は縄文時代早期後半から前期前半を中心に、d類は縄文時代早期後半から前期にそれぞれ築かれたものと考えられており【田海1999】。Aグループの形態はB・Cグループのそれよりも古い様相を持つものと考えられる。

東蒲原郡内で縄文時代の陥穴を検出した遺跡は、向大浦遺跡のほかに旧三川村上ノ平遺跡A地点、旧上川村戸中遺跡、旧津川町上野遺跡がある¹⁾。上ノ平遺跡A地点は阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は約73mを測る。4基が北東から南西方向に直線状に並んでいた。検出面または底面の平面形が円形または隅丸方形を呈する。断面形はいずれも漏斗状を呈し、底部にピット1基を有している。岩手県・青森県の事例【平井1986・福田1982】と比較すると構築時期は縄文時代早期末から前期初頭の可能性が高いが、出土遺物がないため詳細な時期は不明である。a類に近似しているが、底部にピットを有している点が異なっている【沢田ほか1994】。戸中遺跡は常浪川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は約180mを測る。7基が東西方向に直線状に並んでいた。検出面または底面の平面形が長楕円形または隅丸長方形を呈する。断面形は箱状を呈し、うち3基には底部にピット1基を有している。戸中遺跡では縄文時代早期後葉から末葉に集落を営んでいたと考えられ、構築時期はそれ以外の時期と想定されるが、出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。d類に相当する【遠藤1992・2006d】。上野遺跡は阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は約85mを測る。1基を検出し、南側半分は試掘トレンチにより削平されているが検出面または底面の平面形は円形と推測され、断面形は漏斗状を呈する。底部のピットは有していない。鹿瀬軽石質砂層を掘り込んで構築されていることと、底部付近から縄文時代後期中葉の土器が出土したことから構築時期は後期以降と推定している。d類に相当する【尾崎2004】。

東蒲原郡以外の下越地域で縄文時代の陥穴を検出した遺跡は、村上市奥三面遺跡群、同市東興屋遺跡、

1) 旧上川村大谷原遺跡でも11基の陥穴を検出している【遠藤2006e】が、現在報告書作成中のため今回は対象外とした。

同市海老堤遺跡、同市上ノ山遺跡、新潟市南赤坂遺跡がある¹⁾。

奥三面遺跡群は三面川またはその支流の河岸段丘上に立地し、標高は173～224mを測る。4か所の遺跡（脇ノ沢遺跡・ガラハギ遺跡・本道平遺跡・下ゾリ遺跡）で計67基を検出した。a類またはd類に相当する。時期はいずれも前期と推定している〔山崎2000〕。

東興屋遺跡は門前川下流域の左岸に広がる岩船丘陵上に立地し、標高は32～34mを測る〔石川ほか2009〕。海老堤遺跡は村上丘陵の尾根または斜面上に立地し、標高は20～50mを測る〔加藤2008〕。上ノ山遺跡は旧岩船湯を望む浦田山丘陵上に立地し、標高は約20mを測る〔田辺ほか2007〕。いずれの遺跡でもf類に相当する陥穴を1基ずつ検出している。東興屋遺跡で縄文中期の土器が出土した以外は遺物がないため、これらの詳細な時期は不明である。

南赤坂遺跡は角田山麓の緩斜面上に立地し、標高は約14mを測る。1基を検出し、検出面または底面の平面形は長楕円形（溝状）、断面形は袋状を呈する。底部のピットは確認できなかった。e II類に相当する。覆土中から縄文時代前期末葉の土器が出土しており、時期は前期末葉以降と推定している〔前山ほか2002〕。

上・中越地域は下越地域と比べて検出例が多く、上越地域は妙高山麓の緩斜面上または高田平野西縁の丘陵上、中越地域は信濃川・魚野川の河岸段丘上または柏崎平野中央部の独立丘陵上での検出例が多い。形態は上・中越地域ともにa～e類が早期後半から前期に築かれ、f類が中期以降に主体となる〔田海1999〕。

向大浦遺跡の陥穴は河岸段丘上に立地し、構築時期は検出層位から前期以前と考えられ、c類またはd類に相当する。この点は新潟県内の他地域の傾向とほぼ一致している。東蒲原郡内では溝状のe類またはf類が検出されていないが、上野遺跡の調査事例から後期以降にもd類が構築されている。このことが郡内の特性であるかについては検出例が少ないこともあり、今後の調査事例の増加を待って検討したい。

B 縄文時代中期前葉の土器について

向大浦遺跡から出土したII群土器（縄文時代中期前葉に比定されるもの）の多くは1類（北陸系の新崎式土器またはそれに類似するもの）または2類（関東系の五領ヶ台式土器またはそれに類似するもの）に位置付けられる。新潟県における新崎式土器の編年または他型式との併行関係については、〔寺崎2009〕に詳細に論じられていることから、本稿ではこれを参考にII群土器を検討することにする。

1類土器については、新崎式系土器3段階細分の第I段階のメルクマールとされる彫刻蓮華文・軌軸文〔寺崎2009〕を施すものが1B・1C類に相当する。一方で第II段階のメルクマールとされる刻印蓮華文を施すものは出土していない。ほかにも第I段階において多用される口縁部に縦沈線を施すものや口縁部と体部の間の区画内に爪形文が横位に巡るもののが、1D類または1A類18・19、1G類40に相当する。このことから1類土器は〔寺崎2009〕の新崎系土器第I段階に比定される。向大浦遺跡周辺に位置している阿賀町大坂上道遺跡第I群1類土器〔桐原ほか2008〕、または阿賀野市萩野遺跡第I群C～G類土器〔亀井ほか1994〕は本遺跡1類土器と近似した様相を示しており、同段階の資料と考えられる。

2類土器については、すべてが破片資料であり全体の文様構成を判断できるものは見られない。しかし

1) 村上市二又遺跡1号溝状遺構は形状からf類に相当する陥穴の可能性があるが、報告書では深さが浅い点からこれを疑問視している〔大滝ほか1997〕。また同市古渡路遺跡では23基のe類またはf類に相当する陥穴を検出している〔土橋2010〕が、現在報告書作成中のため今回は対象外とした。

その多くには集合沈線とそれに沿った交互刺突列が見られる。このモチーフは五領ヶ台II式土器あるいはそれに併行するものとされる大坂上道遺跡第I群2類土器または萩野遺跡第I群A・H類土器の中で確認されており、2類土器はこの段階に併行するものと考えられる。1類土器との関係については、向大浦遺跡では両者の出土状況に際立った違いは見いだせなかった。彫刻蓮華文・軌軸文を施す新崎式系土器に五領ヶ台II式系土器が併出するのは第I段階の特徴とされており〔寺崎2009〕、向大浦遺跡でも同様の出土傾向を示している。

3類土器は大坂上道遺跡第I群3類土器に相当するものである。東北地方南部から関東地方北東部において五領ヶ台式併行期に見られる土器で、非装飾的なものがほとんどである〔桐原ほか2008〕。

4類土器の中でも70・71に見られる隆線上に縄文を施す手法は、大坂上道遺跡第I群1類A種土器の中にも見られる。また67・68に見られる貼瘤文を持ち体部に縄文を施すものは、第III章5で前述したように魚沼市清水上遺跡捨場B出土土器〔寺崎ほか1996〕、津南町城林遺跡4号住居出土土器〔長澤1997〕に類例が見られる。これらは新崎式系土器第II段階に比定されるものに併出していることから、67・68はII群土器の中でも新しい様相を持つことが推測できる。しかし、類例が向大浦遺跡から離れた魚沼を中心に見られることや、出土数の少なさから断定はできず、周辺資料の増加を待って検討したい。

以上の観点からII群土器は一部が第II段階に下る可能性があるものの、新崎式系土器第I段階にはほぼ併行するものと考えられる。新潟県内における同段階の資料として、上記した大坂上道遺跡第I群土器、萩野遺跡第I群土器のほかにも新潟市豊原遺跡VI群土器〔前山2009〕、津南町城林遺跡3号住居出土土器〔長澤1997〕などが挙げられる。

C 東蒲原郡内における平安時代の集落について

向大浦遺跡で検出した平安時代の遺構・遺物の分布状況は、第III章4Aで述べたように調査区北西側(7~9C・Dグリッド)に集中し、集落の中心は調査区外北側の平坦面に存在すると推測できる。出土土器の年代が9世紀後半から10世紀初頭(春日編年VII期)と推定され、この時期に集落が営まれていたと考えられる。また向大浦遺跡からは現在の東蒲原郡内初の出土例となる墨書き土器1点を確認した。竪穴住居(SI11)から出土した土師器楕体部外面に文字1字が記されていたが、墨が薄く判読できなかった。さらに竪穴住居(SI12)の覆土を中心に鉄滓3点が出土していることから、周辺で鍛冶作業が行われていたと推測される。しかし調査区から鍛冶関連遺構や金床石・羽口等の鍛冶作業に伴う遺物は検出できなかった。

東蒲原郡内における同時期の集落遺跡には大坂上道遺跡〔滝沢ほか1995・桐原ほか2008〕、上野東遺跡〔高橋ほか2006〕があり、いずれも阿賀野川左岸の河岸段丘(西山II面)上に立地する。検出した建物は大坂上道遺跡が竪穴住居1棟・掘立柱建物1棟、上野東遺跡が竪穴住居と推定されるもの1棟である。いずれも調査区縁辺に位置しており、遺跡は調査区外の平坦面にも伸びていると推測できるが、平坦面の面積を考慮すると、少數の建物・住居が散在する程度の小規模な集落であったと推測される。向大浦遺跡の集落も立地や遺構の検出状況が上記の遺跡と近似しており、似た性格を持っていたものと考えられる。

郡内の古代遺跡は上記以外にも旧津川町の平堀地区、旧鹿瀬町の日出谷地区に集中して見られる。しかし発掘調査がほとんど行われておらず、集落の様相など不明な点が多い。平堀地区に位置する高瀬遺跡は分布調査の結果、南北約400m、東西150mの範囲で遺物が散布しており、その中に奈良~平安時代の所産と考えられる管状土錘や、9世紀ごろの所産で会津大戸窯産と推定される須恵器壺を確認している〔國

島 2006b]。また日出谷地区に位置する長者屋敷遺跡からは古代の遺構は検出できなかつたものの、9世紀中葉の所産と考えられる土師器椀・長胴甕や会津大戸窯産・小田原窯産と推定される須恵器甕が出土している [横山 2000]。会津大戸窯産と推定される須恵器は向大浦遺跡・大坂上道遺跡・上野東遺跡でも出土している。現在の東蒲原郡内にこれらの須恵器が流通していたことがうかがえることから、会津との関わりが強かつたものと考えられている [中島 2006b]。

向大浦遺跡で検出した竪穴住居は2棟とも主柱穴は見られず、壁溝内にピットが壁際を巡る。カマドは南辺の東寄り（南東隅）と東辺の北寄りに存在する。内部またはその周辺に構築材と考えられる搬入磚が出土したことから、石組みの外側に砂質土を被覆して構築したものと考えられる。郡内で検出した竪穴住居を見ると、大坂上道遺跡は大部分が調査区外に伸びるため一部しか検出できていない。上野東遺跡はカマド・柱穴を有するものの住居の掘り込みが明確ではない。そのため、向大浦遺跡の竪穴住居と比較・検討することは困難である。一方、東蒲原郡に近接し、関わりが強いと考えられる福島県会津坂下町では、9世紀後半から10世紀初頭と推定される竪穴住居が古館遺跡で7棟 [和田ほか1992]、高畠遺跡で3棟 [和田ほか1992]、四百刈遺跡で1棟 [吉田ほか1993] それぞれ検出されている。遺構・遺物の検出状況から、いずれの遺跡も少数の建物・住居が散在する程度の小規模な集落であったものと推測される。上記の竪穴住居11棟は面積が4.83～18.60m²の範囲に収まる。壁溝は高畠遺跡1号住居、主柱穴は古館遺跡4号住居以外では検出されていない。カマドは6棟で検出され、内5棟は南東隅、1棟は南側に位置している。カマドの構築材は判断できるものが少ないが、2棟のカマドは粘土で構築されたものと考えられる。煙道部は3棟で残存しており、40～101cmの長さで住居外に伸びている。これらの特徴は、向大浦遺跡の竪穴住居と比べても大きな違いは見られず、近似した構造を持っていたものと推測される。

第IV章 上空野中丸遺跡

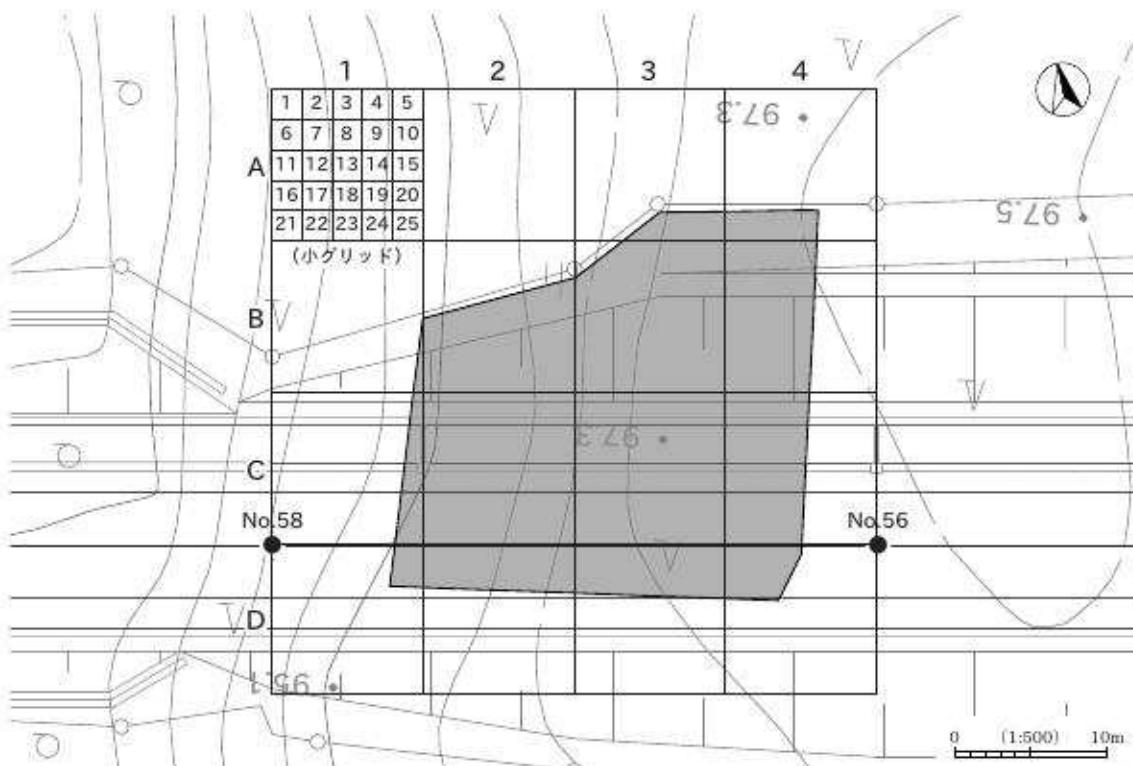
1 遺跡の現況と微地形

上空野中丸遺跡は津川盆地の西縁に当たり、西流する阿賀野川の左岸段丘（西山1面）上に所在する。遺跡の東西側には南北方向に伸びる沢があり、舌状に張り出したような地形となっている。現況は杉林である。上空野中丸遺跡の西側約1km先には向大浦遺跡が存在する。

2 グリッドの設定

グリッドの方向は道路法線と一致させ、センター杭No.58 = 1Dグリッド（以下、座標は世界測地系、X=186537.540, Y=83669.135）とNo.56 = 5Dグリッド（X=186529.576, Y=83708.334）を結んだ線を基準線とした。この基準線に直交させ一辺10mの方眼を組み、北西隅を基点に、東西を算用数字、南北をアルファベット（大文字）順とし、これを組み合わせて大グリッドを「2Cグリッド」などと呼称した（第18図）。1AグリッドはX=186566.940, Y=83675.109である。南北軸は真北から9°西偏している。

小グリッドは大グリッドの北西隅を基点として、2m方眼に25等分して算用数字を付し、大グリッドに続けて「2C13」というように表記した。



第18図 グリッド設定図（■は調査範囲）

3 基本層序

基本層序はI～VI層の6層に分層した。遺跡内におけるI層(表土)及びVI層(地山)以外の堆積状況を概観すると、II・III層は比較的標高が高く平坦な位置に堆積しているが、調査区西側の沢に面する斜面では明確に検出できない。IV・V層は調査区西側の斜面上でI層とVI層の間に堆積しており、平坦な所ではまったく検出できない。遺構検出面はIII層上面であるが、実際にはVI層上面まで掘り下げて検出作業を行った。遺構の覆土はII層を主体としたものが多い。

以下、I～VI層について説明する(第19図)。

I層：層厚3～30cmを測り、黒褐色(10YR3/1)シルトを主体とする層である。杉などの常緑針葉樹を主体とする未分解の腐植物を多く含む。3B1・6グリッド付近ではII層起源の黒褐色土の大・小ブロックを中量含み、2B11グリッド付近ではIII層起源のにぶい黄橙色土の大・小ブロックを中量含む。表土層である。

II層：層厚0～20cmを測り、灰黄褐色(10YR4/2)シルトを主体とする層である。I層に比べると未分解の腐植物は少なく、III層を起源とするにぶい黄橙色土の大・小ブロックを少量含む。

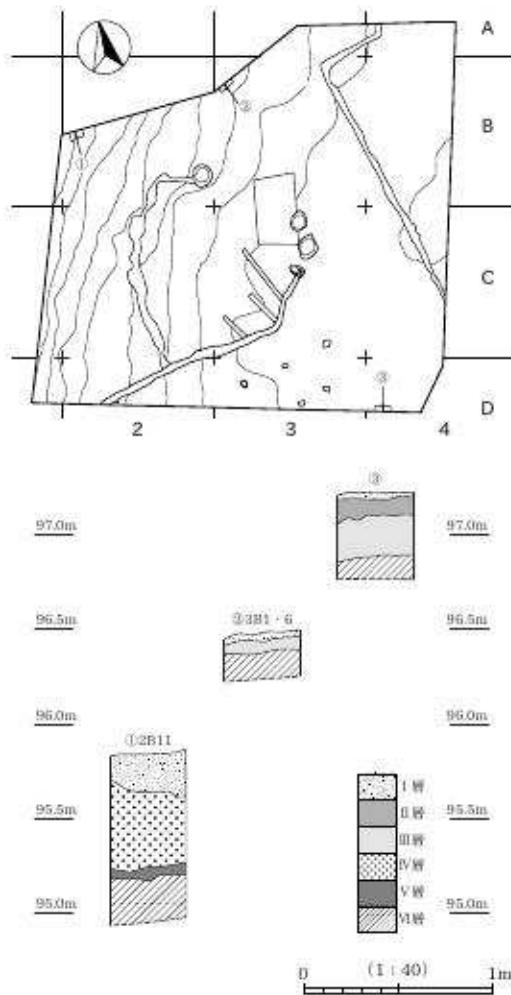
III層：層厚0～25cmを測り、にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質シルトを主体とする層である。黒褐色土の大・小ブロックを少量含む。遺構検出面である。

IV層：層厚0～55cmを測り、灰褐色(7.5YR4/2)シルトを主体とする層である。ややしまりがあり、にぶい黄橙色土ブロックを少量含んでいる。調査区西側の斜面上に堆積が限定される。

V層：層厚0～7cmを測り、褐灰色(7.5YR4/1)シルトを主体とする層である。よくしまっており、にぶい黄橙色土ブロックを中量含む。調査区西側の斜面上に堆積が限定される。

VI層：明黄褐色(10YR6/8)粘土を主体とする層である。よくしまっている。調査区全域で検出しており、安定した堆積状況を示す(地山)。

基本層序を周辺の遺跡と比較すると、向大浦遺跡などで堆積が見られる鹿瀬軽石質砂層は上空野中丸遺跡では堆積していないことが分かった(第Ⅲ章第2表参照)。上空野中丸遺跡の標高は95～97mを測り、西山I面上に立地する。沼沢火山が噴出した軽石や火山灰の二次堆積はこの地点まで及んでいなかったものと考えられる。



第19図 基本層序

4 遺構

A 概要

上空野中丸遺跡で検出した遺構は、土坑4基、溝3条、ピット5基である。土坑は調査区中央の2B・3Cグリッド、溝は土坑の周辺、ピットは調査区南側の3C・Dグリッドにそれぞれ位置している。明らかに中世以前と考えられる遺構は検出できず、時期の分かる遺構はすべて近世以降の所産であった。

遺構の記述方法は基本的に向大浦遺跡と共通のものとし、第Ⅲ章4Bに準ずる。

B 遺構

SK1 (図版25・26・44)

3C3・4グリッドに位置する。試掘調査で検出したもので、縄文土器小片1点が出土した。平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.18m、短軸1.06m、検出面からの深さは44cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土はにぶい黄褐色土(1・2・4層)・褐灰色土(3層)・灰黄褐色土(5層)・にぶい黄橙色土(6層)の6層に分層した。1・3・6層はレンズ状に堆積する。2・4・5層は壁面の崩壊などによって形成されたものと考えられ、ブロック状の土が壁際に堆積する。底面近くの覆土(3・6層)から近世陶磁器が出土していることから、近世以降の所産と考えられる。縄文土器は遺構に直接伴うものではなく、混入品と推測される。

SK2 (図版25・26・44)

3C4・8・9グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.39m、短軸1.19m、検出面からの深さは45cmを測る。断面形は箱状を呈する。覆土はにぶい黄褐色土(1・3・4層)・にぶい黄褐色土と灰褐色土の混合土(2層)・褐灰色土(5層)の5層に分層した。1・4・5層はレンズ状に堆積する。2・3層は壁面の崩壊などによって形成されたものと考えられ、ブロック状の土が壁際に堆積する。遺物は出土していない。形状や覆土がSK1と類似しており近世以降の所産と考えられる。

SK3 (図版25・26・45)

3C8・13・14グリッドに位置する。東側で近世以降の溝と重複し、これに切られる。平面形は長梢円形を呈する。長径92cm、短径58cm、検出面からの深さは28cmを測る。断面形は箱状を呈する。覆土は褐色土(1・2層)とにぶい黄褐色土(3層)の3層に分層した。レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。覆土最下層である3層がSK1の覆土2・4層やSK2の覆土3・4層と類似しており、近世以降の所産と考えられる。

SK5 (図版25・26・45)

2B20・25グリッドに位置する。西側で近世以降の溝と重複するが、覆土がほぼ同質で、切り合い関係は不明である。平面形は円形を呈する。長径1.47m、短径1.33m、検出面からの深さは15cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土は基本層序Ⅱ層を主体とする灰黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。重複する近世以降の溝とは覆土が同質で、近接した時期に存続したものと考えられる。近世以降の所産と考えられる。

溝 (図版25・26・44)

検出した溝はいずれも幅30～100cm、検出面からの深さは5～30cmを測る。断面形は弧状若しく

は台形状を呈する。覆土は基本層序Ⅱ層を主体とする灰黄褐色土の単層である。覆土中から近世の陶磁器片や礫が出土した。試掘調査で検出した土地境の溝の続きと考えられ、近世以降の所産と考えられる。

ピット（図版 25・26・44）

検出したピットはいずれも平面形が楕円形を呈する。検出面からの深さは 10～30cm と浅く、柱痕も検出できなかったが、配置から掘立柱建物を構成する柱穴の可能性もある。遺物は出土していないが、覆土が近世以降の溝と同質であり、近世以降の所産と考えられる。

5 遺 物

A 概 要

遺構出土の遺物には、SK1 から出土した縄文土器小片 1 点、不定形石器 1 点及び近世陶磁器 3 点、溝（SD1 の 3C グリッドを中心）から出土した近現代の陶磁器がある。このうち SK1 出土の縄文土器としたものは胎土の特徴から時期を推測したもので、実物は細片で表面の風化が著しく文様なども確認できないことから、縄文土器に限定できないものである。遺構外出土の遺物は中世の陶器 1 点と砥石片 1 点、そして数点の近現代の陶磁器片がある。

次に平成 20 年度試掘調査で出土した遺物について若干記す。試掘調査では前述したトレンチ 2（SK1）出土の土器片のほかは、いずれも台地の中心よりも東側のトレンチで出土している。出土層位は表土（1 層）とその直下の褐色土（II 層）である。

トレンチ 6 からは II 層で土師器片が 1 点出土しているが、器種は不明である。トレンチ 7 からは I 層で近現代の所産と考えられる磁器が 2 点、II 層で土師質土器 1 点、近世以降の陶磁器 6 点、石器 4 点（簞状石器 1 点・剝片 3 点）、鉄製品 1 点（刀子）が出土している。トレンチ 9 からは II 層で土師器 1 点（器種不明）、近世以降の陶磁器 2 点が出土している。トレンチ 10 からは II 層で須恵器細片 1 点（杯の口縁部）、土師質土器 2 点（器種不明）、近世以降の陶磁器 3 点、石器 2 点（剝片）が出土している。トレンチ 11 からは縄文土器の細片 1 点、陶器 1 点、青磁 1 点が出土している〔田海 2009〕。

B 土器・陶磁器（図版 27・45）

本発掘調査で出土した中世陶器 1 点、及び試掘調査で出土した青磁 1 点について報告する。

本発掘調査出土

1 は中世の片口鉢である。平坦な口唇部はほとんどが欠損しているが、深い沈線が一条確認できる。須恵系の陶器であるが、産地は特定できない。

試掘調査出土

2 はトレンチ 11 の I 層から出土した中世の青磁である。器種は不明であるが、体部片と考えられる。文様は認められないが、内・外面とも厚さ 0.5mm 程度のオリーブ灰色の釉が掛かっている。

C 石器・石製品（図版 27・45）

本発掘調査で出土した縄文時代と考えられる石器 1 点と砥石 1 点、及び試掘調査で出土した縄文時代と考えられる石器 4 点について報告する。

6 ま と め

本発掘調査出土

3はSK1の覆土3層から出土した。灰白色を呈する凝灰岩製の不定形石器である。4は3CグリッドII層から出土した。灰白色を呈する凝灰岩製の砥石で、下端を欠損する。砥面は両面に認められる。正面は複数の砥面で構成され、弧状をなし、幅広で深い線条痕や擦痕が付いている。裏面は右半分に砥面が見られる。長さ8.7cm、幅11.4cm、厚さ4.0cmを測り、重量は313gである。

試掘調査出土

5～7はトレンチ7から出土した。5は籠状石器である。黒色の珪質頁岩であるが、風化のため表面が灰色を呈する。縁辺は部分的に欠損している。比較的粗い両面加工が行われ、周辺からの調整剝離は端部で階段状となるものが多い。長さ6.5cm、幅4.0cm、厚さ2.5cmを測り、重量は60.2gである。6は流紋岩製の縦長剝片で、暗い褐灰色を呈する。縁辺に細かな欠損が見られる。正面には主要剝離面と同方向の剝離痕が複数見られる。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測り、重量は5.4gである。7の側縁は細かく欠損しているが、部分的に二次加工の小剝離が残ることから、不定形石器と考えておきたい。緑色凝灰岩製で、長さ5.6cm、幅5.6cm、厚さ1.4cmを測り、重量は35.2gである。

8はトレンチ10から出土した。8は頁岩製の剝片である。縁辺に細かな欠損が見られる。長さ2.8cm、幅2.6cm、厚さ0.6cmを測り、重量は4.1gである。

6 ま と め

今回、南北に伸びる舌状台地の西側斜面について本発掘調査を行った。その結果、遺構には中世以前のものはなく、近世以降の遺構と遺物、そして縄文時代の石器や中世の陶磁器などをわずかに検出しただけである。今回の調査で中世以前の遺跡の性格を明らかにすることはできなかつたが、遺跡の中心は調査区外に存在するものと考えられ、出土遺物の量や周辺地形を考慮すれば、極めて小さな規模の遺跡と推測される。

要 約

向大浦遺跡

- 1 向大浦遺跡は新潟県東蒲原郡阿賀町大字津川字向大浦 2853 ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は 79 ~ 81m を測る。
- 2 発掘調査は一般国道 49 号揚川改良の建設に伴い、平成 21 年 7 月 23 日 ~ 12 月 7 日まで実施した。調査面積は上層 4,000m²、下層 4,000m²で、延べ 8,000m²である。
- 3 調査によって、約 5,000 年前の堆積と言われている鹿瀬軽石質砂層を挟んで、下層から縄文時代の前期以前、上層から縄文時代中期前葉、後期以降及び平安時代の遺構・遺物を検出した。
- 4 縄文時代の前期以前の遺構は、陥穴 12 基、土坑 2 基を検出した。狩猟場として利用されていたと推測される。
- 5 縄文時代の前期以前の遺物には、縄文土器・石器がある。縄文土器は東北系の大木 5b 式が含まれる。
- 6 縄文時代中期前葉の遺構は、ピット 2 基を検出した。
- 7 縄文時代中期前葉の遺物には、縄文土器・土器片円板・石器がある。縄文土器の大部分は調査区西側の沢、若しくはその周辺から出土している。遺物量に比べて遺構の数が少ないことから、集落の中心は調査区外北側の段丘先端部と推測される。
- 8 平安時代の遺構は、竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑 7 基、焼土遺構 1 基、ピット 34 基を検出した。これらの遺構群は調査区北側に集中していることから、集落の中心は調査区外北側の平坦面に存在するものと推測される。
- 9 平安時代の竪穴住居は、東蒲原郡内では上野東遺跡と大坂上道遺跡に次ぐ 3 例目の検出となる（推定されるものも含む）。上野東遺跡は住居の掘り込みが明確ではなく、大坂上道遺跡は大部分が調査区外に伸びるため一部しか検出できていない。そのため本遺跡の竪穴住居は全体像が分かる希少な調査事例と言える。
- 10 平安時代の遺物には土師器・須恵器・砥石・鉄滓があり、大部分は竪穴住居内から出土している。土器の年代は 9 世紀後半から 10 世紀初頭と推定され、その中に東蒲原郡内では初の出土となる墨書き土器 1 点が含まれる。

上空野中丸遺跡

- 1 上空野中丸遺跡は新潟県東蒲原郡阿賀町大字津川字上空野中丸 4425 ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は 93 ~ 99m を測る。
- 2 発掘調査は一般国道 49 号揚川改良の建設に伴い、平成 21 年 7 月 9 日 ~ 8 月 5 日まで実施した。調査面積は 500m²である。
- 3 調査によって、近世以降の土坑 4 基、溝 3 条、ピット 5 基を検出した。
- 4 遺物は縄文時代の石器、中世の陶器、近世以降の陶磁器が少量出土している。
- 5 遺構・遺物量ともに少なく、遺跡の中心は調査区外に存在するものと考えられる。遺跡の性格は不明である。

引用・参考文献

- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川博行^著 2009 『東興屋遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査報告 第192集 大館跡II・東興屋遺跡・高山東遺跡・宮田遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 今村啓爾 1973 『霧ヶ丘遺跡の土坑群に関する考察』『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団
- 稲葉 明^著 1976 『津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について』『新潟県立教育センター研究報告』9 新潟県立教育センター
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史博物館研究報告』40
- 遠藤 佐 1992 『上川村文化財調査報告書 第5集 平成3年度常浪川ダム予定地内遺跡確認調査報告書』 新潟県上川村教育委員会
- 遠藤 佐 2006a 『池ノ尻遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006b 『室谷居平遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006c 『キンカ杉遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006d 『戸中遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006e 『大谷原遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 大滝良夫^著 1997 『二又遺跡』『朝日村文化財報告書 第12集 二又遺跡・豊岩遺跡・ガラハギ遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
- 尾崎高宏 2004 『津川地内(赤岩橋橋台工事部分・町道部分)試掘調査』『平成15年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『第4章古代 第2節土器編年と地域性』『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 加藤 学 2008 『村上I.C～朝日I.C間 遺跡推定地7 試掘調査』『平成19年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 龟井 功^著 1994 『萩野遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査報告 第61集 萩野遺跡・官林遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮 2006 『猿額遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 桐原雅史^著 2006 『大坂上道遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査報告 第186集 大坂上道遺跡II・猿額遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 國島 聰 2006a 『原遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 國島 聰 2006b 『高瀬遺跡』『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 佐藤俊幸 1990 『陥穴状土坑』『新潟県埋蔵文化財調査報告 第56集 岩原I遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 佐藤雅一 1997 『城林遺跡出土土器の編年学的考察』『牛肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』 新潟県津南町教育委員会
- 沢田 敦^著 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第64集 上ノ平遺跡A地点』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦^著 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第73集 上ノ平遺跡C地点』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山武考古学研究所 1984 『原遺跡発掘調査報告』 新潟県津川町教育委員会
- 品田高志^著 1997 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第25集 合作』 新潟県柏崎市教育委員会
- 高橋保雄・荒谷伸郎 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第119集 北野遺跡I』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄^著 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第141集 北野遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄^著 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第160集 上野東遺跡・現明嶽遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗^著 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 只見川第四紀研究グループ 1966a 『只見川・阿賀野川流域の第四系の編年ーとくに沼沢浮石層の層位学的諸問題に

ついでー』『第四紀総合研究連絡紙』8

- 只見川第四紀研究グループ 1966b 「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代XXVI—」『地球科学』82
- 田辺早苗^著 2007 『神林村埋蔵文化財報告 第26集 上ノ山遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会
- 丹野隆明・本間 宏 1991 「鹿島遺跡」『福島県文化財調査報告書 第266集 鹿島遺跡・平林B遺跡・権現山下遺跡』(財)福島県文化センター
- 寺崎裕助^著 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第72集 清水上遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式系土器—縄文時代中期初頭後半から前葉の編年と型式—」『新潟県の考古学II』 新潟県考古学会
- 田海義正 1999 「第2章縄文時代 第4節生業 第2項狩獵」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 田海義正・田中一穂 2007 「阿賀町大字西地区・三川地区試掘調査」『平成18年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田海義正・田中一穂 2008 「阿賀町津川 試掘調査」『平成19年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田海義正 2009 「阿賀町津川地区試掘調査」『平成20年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 2010 「古渡路遺跡III」『平成21年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長澤展生 1997 「遺跡確認試掘調査その6地点(城林遺跡)の概要」『牛肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』新潟県津南町教育委員会
- 長澤展生 2007 「魚沼地方の中期前葉の土器について」『火焰土器前夜』信濃川火焰街道連携協議会
- 中島栄一 2006a 「屋敷島遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 中島栄一 2006b 「古墳時代から古代の概要」『東蒲原郡史 資料編1 原始』 東蒲原史編さん委員会
- 中村孝三郎 1960 「小瀬ヶ沢洞窟」 長岡市立博物館
- 中村孝三郎・小片 保 1962 「室谷洞窟」長岡市立博物館
- 植崎彰一^著 1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(1)』 愛知県教育委員会
- 二宮俊策 1973 「新潟県東蒲原地方における阿賀野川の河岸段丘について」『新潟県教育センター研究収録 第6集(理科研究編12)』 新潟県立教育センター
- 平井 進 1986 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第110集 桂平遺跡」(財)岩手県文化振興事業団
- 福田友之 1982 「青森県埋蔵文化財調査報告書 第76集 鶴窪遺跡」 青森県教育委員会
- 芳賀英一・藤田 誠 1986 「下谷ヶ池B・C遺跡」『福島県文化財調査報告書 第164集 腰巻遺跡・下谷ヶ池平B・C遺跡』福島県教育委員会
- 芳賀英一^著 1984 「福島県会津高田町文化財調査報告書 第5集 胃宮西遺跡」 福島県会津高田町教育委員会
- 芳賀英一^著 1990 「胃宮西遺跡」『福島県文化財調査報告書 第227集 中胃遺跡・上胃A遺跡・胃宮西遺跡・三十刈遺跡・水上遺跡』(財)福島県文化センター
- 前山耕明 1994 「松郷屋遺跡」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
- 前山耕明^著 2002 「南赤坂遺跡—縄文時代前・中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査—」 新潟県巻町教育委員会
- 前山耕明 2009 「豊原遺跡VI群3類土器再考—特定遺跡に偏在する中期前葉縄文土器をめぐって—」『新潟県の考古学II』 新潟県考古学会
- 望月精司^著 1992 「戸津古窯跡群II」 石川県小松市教育委員会
- 望月精司 1993 「二ツ梨豆岡向山古窯跡」 石川県小松市教育委員会
- 山崎忠良 2000 「奥三面地域の陥し穴状土坑」『朝日村文化財報告書 第20集 本道平遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
- 横山勝栄 2000 「長者屋敷遺跡 中貝遺跡 発掘調査報告書」 新潟県鹿瀬町教育委員会
- 吉田博行^著 1993 「四百刈遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書 第34集 四百刈遺跡・村北遺跡』 福島県会津坂下町教育委員会
- 和田 聰^著 1992 「会津坂下町文化財調査報告書 第27集 古館遺跡・高畑遺跡」 福島県会津坂下町教育委員会

観察表

別表1 S111 ピット観察表

測定番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P83	SC11-16	円形	33	33	9	
P84	SC11	楕円形	11	9	11	
P85	SC11	楕円形	27	19	25	
P86	SC15	円形	23	18	10	
P87	SC15	楕円形	32	24	16	
P88	SC15-20	楕円形	17	14	14	
P89	SC14	楕円形	22	18	7	
P90	SC16	円形	11	11	11	
P91	SC11	楕円形	8	6	7	
P92	SC11	楕円形	16	12	10	
P93	SC15, 9C11	楕円形	10	8	10	
P94	SC15	楕円形	10	8	12	
P95	SC15	楕円形	9	5	9	
P96	SC15	楕円形	7	6	7	
P97	SC15	楕円形	11	8	12	
P98	SC15	円形	6	6	7	
P99	SC15	楕円形	6	5	8	
P100	SC15	円形	10	9	11	
P101	SC15-20	楕円形	18	15	13	
P102	SC20	楕円形	11	9	17	
P103	SC20	楕円形	27	22	19	
P104	SC20	円形	11	10	12	
P105	SC20	楕円形	7	5	7	

別表2 S112 ピット観察表

測定番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P111	SD6	楕円形	33	26	55	柱穴か?
P112	SD6	長窓円形	23	14	8	
P113	SD11	楕円形	17	12	13	
P114	TD15	楕円形	10	8	6	
P115	TD15	円形	16	16	7	
P116	TD15	円形	23	21	14	
P117	TD15	円形	15	13	15	
P118	TD14	円形	17	15	5	
P119	TD14	楕円形	13	10	11	
P120	TD14	円形	14	13	8	
P121	TD14	円形	9	8	6	
P122	TD14	楕円形	16	13	9	
P123	TD9-14	楕円形	28	22	23	
P124	TD9	楕円形	33	23	48	柱穴か?
P125	TD4	円形	23	23	20	
P126	TD4	楕円形	40	29	12	
P127	TD4	楕円形	38	28	16	
P128	TD4	円形	13	12	17	
P129	TD4	楕円形	16	13	15	
P130	TD4	円形	18	17	20	
P131	TD5	楕円形	16	13	11	
P132	TD5	円形	18	13	13	
P133	TD10-15, SD6-11	楕円形	43	31	13	
P134	TD10	円形	17	15	13	
P135	TD10	円形	38	35	18	
P136	TD10-15	円形	43	39	20	
P137	TD4-5	楕円形	34	27	7	
P138	TD5	楕円形	30	24	2	
P139	TD5	円形	34	34	5	
P140	SD6	円形	27	25	10	カマドの袖の痕跡か?
P141	SD6	不整形	18	15-18	6	カマド内に位置する。
P142	SD6	円形	15	13	12	カマド内に位置する。
P143	SD6	長窓円形	16	10	8	カマドの支脚穴か?

別表3 SB64 柱穴観察表

柱穴番号	位置 (グリッド)	平面形	断面形	標高 (m)			柱頭	柱間寸法 (m)	備考
				袖出し面	底面	長軸			
P31	TD6	円形	U字状	80.74	80.20	30	29	54	有 P31-P60: 5.58
P60	TD8-13	楕円形	U字状	80.50	80.12	39	31	38	有 P60-P48: 3.23
P48	TD4	円形	U字状	80.57	80.15	24	21	42	P48-P27: 3.22
P27	TC19	円形	U字状	80.53	80.15	30	29	38	有 P27-P32: 2.90
P32	TD18	楕円形	U字状	80.65	80.16	30	23	49	有 P32-P7: 2.32
P37	TC14-17	—	U字状	80.70	80.15	—	20	55	有 P37-P42: 3.82 < SK36 北側調査区外
P42	TC21-TD1	円形	U字状	80.60	80.03	30	27	57	有 P42-P31: 3.08
P39	TD2	楕円形	U字状	80.65	80.39	35	26	26	有 P42-P39: 1.48 P39-P48: 3.98

別表4 ピット観察表

ピット番号	位置 (グリッド)	平面形	断面形	規模 (cm)			柱頭	備考	
				長軸	短軸	深さ			
P13	SC22	楕円形	U字状	42	29	20			
P14	SC22	不整楕円形	U字状	32	23	36			
P15	SC16-17-21	楕円形	U字状	37	28	33	有		
P16	SC16	楕円形	漏斗状	24	20	25			
P17	SC17	円形	不整形状	34	31	32			
P18	SD3	円形	U字状	22	22	35			
P19	SD12	長楕円形	U字状	18	12	28			
P20	SD13	円形	U字状	23	22	31			
P21	SD1-2	長楕円形	不整形状	87	26	33	有		
P22	SC19-20	円形	漏斗状	22	20	28			
P23	SD2	円形	U字状	12	12	49			
P24	SD7	円形	U字状	26	25	50			
P25	TC20	円形	漏斗状	38	25	54	有		
P28	TC17-22	楕円形	U字状	39	28	42			
P33	TD18	楕円形	漏斗状	33	23	50			
P34	SC21	長楕円形	台形状	59	37	18			
P38	TC16	円形	漏斗状	51	50	57	有		
P40	7E4	不整円形	不整形状	59	50	52			
P41	TD14-15	円形	台形状	34	34	22			土師器発見 2点出土
P43	TD1-6	長楕円形	不整形状	46	24	49			
P44	SC21	楕円形	台形状	33	25	41	有		
P45	SD18	円形	U字状	25	23	35	有		
P46	SC21-22	不整円形	U字状	54	46	30			
P47	TD3-4	円形	U字状	32	28	41	有		
P49	TD24	不整円形	U字状	42	36	50			
P51	SC23	円形	漏斗	49	46	14			
P52	SD3	楕円形	U字状	28	23	44			
P53	SE13	円形	U字状	14	13	30			
P54	SE10	不整長楕円形	漏斗状	66	36	40			
P55	SC18	不整椭円形	不整形状	33	27	26			
P58	SC23	楕円形	U字状	26	21	39			
P59	SD5	楕円形	U字状	33	26	35			
P61	SD26	長楕円形	U字状	37	23	35	有		
P63	TD9	楕円形	不整形状	30	25	36			< S112

別表5 繩文土器觀察表(1)

別表 6 繩文土器觀察表 (2)

張番號	遺物名・出土場所	層位	種類	遺存部位・残存率	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(内/外)	付着物(内/外)	器種など	備考
55 41.14	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	13.5	—	—	淡褐色・淡褐色	—	口縫跡・火炎	縄文柱・中期前段
65 41.16	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	22	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
66 31.94	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
67 41.2	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
68 41.2	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
69 41.2	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
70 56.21	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
71 31.14	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
72 31.18	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
73 46.23	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
74 31.04	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
75 41.13	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	18	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
76 46.17	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	15	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
77 56.21	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
78 46.22	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
79 61.2	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	20	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
80 61.4	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
81 38.146	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段
82 31.C2+32	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段

別表 7 土製品觀察表

張番號	遺物名・出土場所	層位	種類	遺存部位	基盤(内/外)	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(内/外)	付着物(内/外)	器種など	備考
83 30.17	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	13.7	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
84 40.3	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
85 40.15	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
86 31.15	縄文柱・出土場所	II	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—

別表 8 古代・中世土器觀察表

張番號	遺物名・出土場所	層位	種類	遺存部位	基盤(内/外)	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(内/外)	付着物(内/外)	器種など	備考
87 S11.18/20	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13	—	—	灰白・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
88 S11.9/マ28.39C16	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13.4	—	—	灰白・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
89 S11.9/マ28.39D6	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
90 S11.9/マ28.39D6	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	16	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
91 S11.9/マ28.39D6	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
92 S11.7D10	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
93 S11.7D10	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	15.6	—	—	灰白・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
94 S11.5/マ28.39D1	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	14	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
95 S11.7D13	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	6.2	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
96 S11.7D13	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	11.4	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
97 S11.7D10	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
98 S11.7D10	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	9	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
99 S11.7D13.14	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	4.9	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
100 S11.7D5	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
101 S11.25.25.8/16	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	3.8	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
102 S11.7D5	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
103 S11.7D9	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	13	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
104 S11.27.27.8/16	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	6	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
105 SK.30.(7D2)	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	1.7	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
106 7D7	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	14	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
107 12.14	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
108 12.16	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
109 21.D1.2	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
110 21.C9	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	6	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
111 14.D1.5	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	—	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—
112 10.E	縄文柱・出土場所	Ⅳ	深鉢	口縁部・底	15	—	—	淡褐色・淡褐色	—	—	縄文柱・中期前段	—

別表 9 縄文時代石器觀察表

出土地点・遺構名	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	保存状態	備考
1 14C21	II	石錐未完成		4.6	3.2	1.2	14.3	珪質頁岩	完形	
2 13D7	VI	石錐	C1類	3.6	1.6	0.6	0.8	頁岩	癒長	完形 第2断面斜: 始削。錐部に摩耗感あり
3 4C16	II	石錐	D類	7.7	3.7	1.2	16.5	珪質頁岩	癒長	完形 錐部断面斜: 三角形抜
4 12D25	V	不定形石錐	A類	9.4	5.5	3.2	133.8	流紋岩	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫一下縫
5 4D3	II	不定形石錐	A類	(6.6)	4.7	1.9	47.3	流紋岩	癒長	上半部欠損 二次加工部位: 右側縫一下縫 - 左側縫
6 8C21	II	不定形石錐	A類	6.9	4.7	1.6	26.2	流紋岩	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫一下縫
7 14C22	II	不定形石錐	A類	7.3	3.9	1.9	36.5	流紋岩	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫一下縫
8 13C26	III	不定形石錐	A類	1.8	2.6	0.7	2.1	鐵石英(黄)	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫
9 SR1	II	不定形石錐	B類	8.1	7.2	3.0	124.6	流紋岩	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫一下縫 - 左側縫上部
10 4C24	II	不定形石錐	B類	5.6	4.4	1.7	41.1	綠色凝灰岩	癒長	完形 二次加工部位: 左縫 - 右側縫一下縫
11 9D21	II	不定形石錐	B類	3.8	7.2	2.5	46.5	綠色凝灰岩	癒長	完形
12 5C17	II	不定形石錐	B類	6.2	(4.3)	2.6	34.7	綠色凝灰岩	癒長	右側縫欠損 二次加工部位: 左側縫
13 3C - 4C	II	不定形石錐	B類	4.9	2.6	0.9	9.4	鐵石英(赤)	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫
14 13E21	II	不定形石錐	C類	(3.5)	(4.6)	1.1	17.8	珪質頁岩	不規	上半部欠損 二次加工部位: 左側縫一下縫
15 9E19	I	不定形石錐	C類	8.9	6.1	1.9	56.8	綠色凝灰岩	癒長	完形 二次加工部位: 右側縫一下縫
16 4D12	II	不定形石錐	C類	(4.6)	4.9	1.2	24.6	綠色凝灰岩	癒長	上半部欠損 二次加工部位: 右側縫一下縫
17 12E20	II	不定形石錐	C類	(3.0)	5.1	1.6	16.7	流紋岩	不明	上半部欠損 二次加工部位: 右側縫一下縫
18 10C18	II	不定形石錐	E類	4.1	3.4	1.0	10.6	鐵石英(赤)	癒長	完形 二次加工部位: 下縫
19 4D16	III	不定形石錐	F類	14.3	2.8	2.3	88.9	流紋岩	癒長	完形 鐵石英(赤): 右側縫
20 2C25	II	不定形石錐	G類	8.5	4.1	1.6	44.6	流紋岩	癒長	完形 二次加工部位: 左側縫 - 右側縫下部
21 13E25	II	不定形石錐	G類	8.4	10.4	3.0	211.6	鐵石英	癒長	完形 鐵石英(赤): 下縫
22 17D6	II	圓狀石器	A1類	7.3	4.0	1.9	54.6	頁岩	癒長	兩刃
23 13C12	II	圓狀石器	A2類	(7.5)	6.4	1.9	69.7	流紋岩	癒長	上半部欠損 兩刃
24 14E21	不規	圓狀石器	B2類	7.3	3.8	1.7	45.7	流紋岩	癒長	兩刃
25 13E10	II	圓狀石器	B2類	5.8	3.8	2.1	43.6	流紋岩	癒長	兩刃
26 13E15	V	圓狀石器	B2類	6.9	4.1	1.8	39.7	流紋岩	癒長	兩刃
27 14D15	II	圓狀石器	B2類	8.5	4.4	2.4	80.0	流紋岩	不明	兩刃
28 7C - 8C	II	磨製石斧	A2類	4.1	2.0	0.9	11.8	鈣長岩	癒長	兩刃
29 5E24	I	磨擦石類	C類	(10.0)	7.5	5.1	479.9	安山岩		下半部欠損 被熱
30 6E24	II	磨擦石類	C類	13.8	6.4	4.0	51.4	安山岩		完形
31 13E24	V	磨擦石類	C類	(9.7)	7.7	6.8	649.7	安山岩		下半部欠損
32 3D9	II	砾石	A類	(3.9)	(6.4)	0.9	15.9	鈣長岩	欠損	
33 4C18	II	砾石	A類	(6.1)	6.9	1.3	47.6	安山岩		上半部欠損
34 3C17	II	砾石	B類	(18.5)	(14.0)	7.0	1413.5	安山岩		欠損 被熱
35 13E10	II	砾石		4.9	4.6	1.6	27.7	流紋岩	癒長	
36 5R12 (4E3)	II	砾石		6.6	6.7	3.3	77.6	流紋岩	癒長	
37 4C17	II	砾石		6.8	5.8	3.9	157.4	流紋岩	癒長	
38 7E14	II	砾石		1.9	2.3	1.5	7.1	鐵石英(赤)	完形	

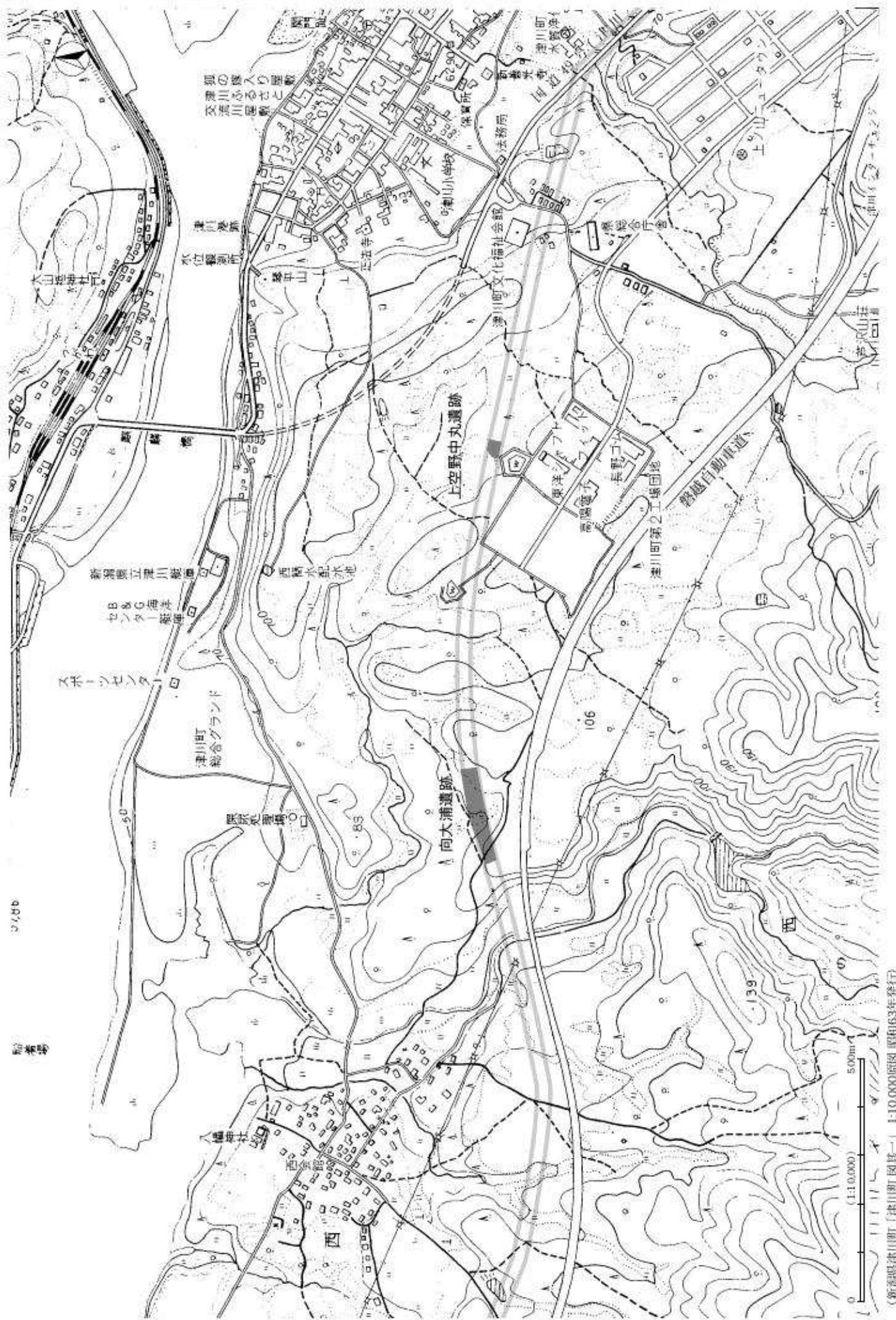
別表 10 古代砥石觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	保存状態	備考
39 3J11	層土 I	石製品	砾石		7.1	4.9	3.2	142.7	鈣長岩	完形	
40 9C17	II	石製品	砾石		6.3	(2.7)	2.8	61.6	鈣長岩	左側面欠損	
41 7D4	II	石製品	砾石		11.5	5.9	4.6	374.4	鈣長岩	準完形	

図 版

向大浦遺跡・上空野中丸遺跡の調査位置

図版 1



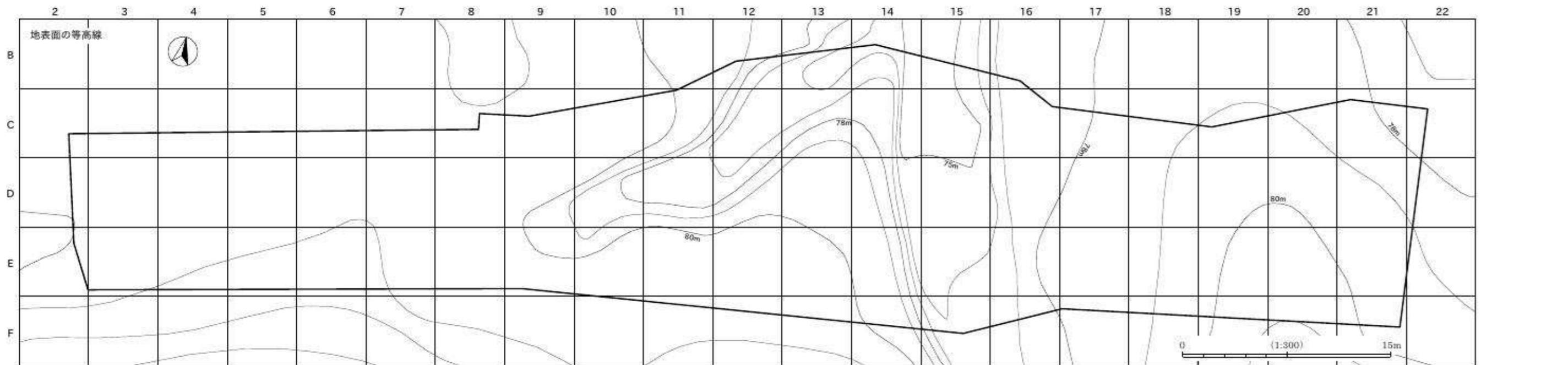
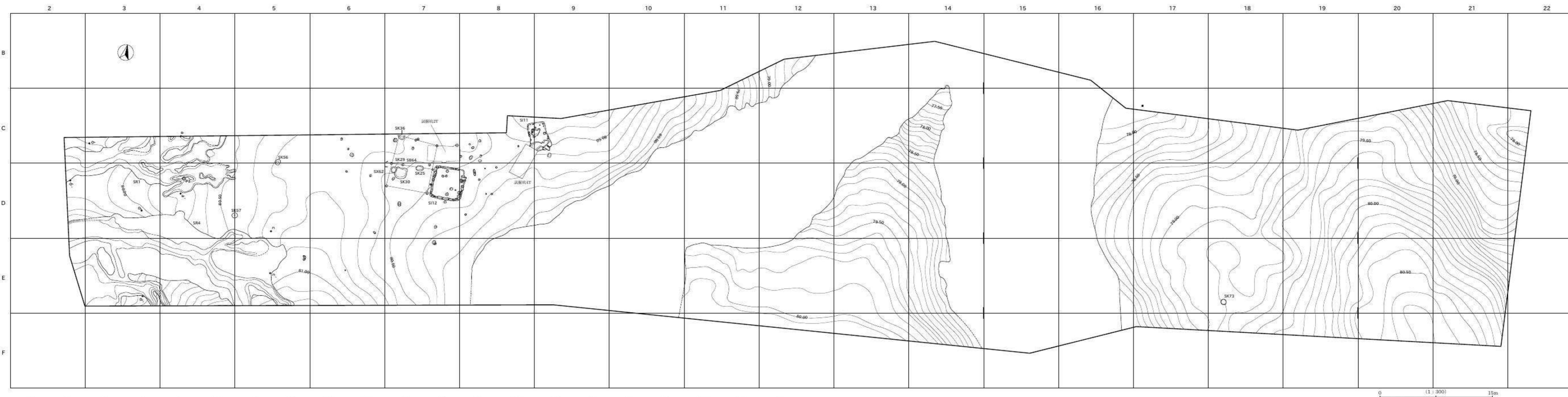
図版 2

向大浦遺跡の調査範囲と周辺の地形

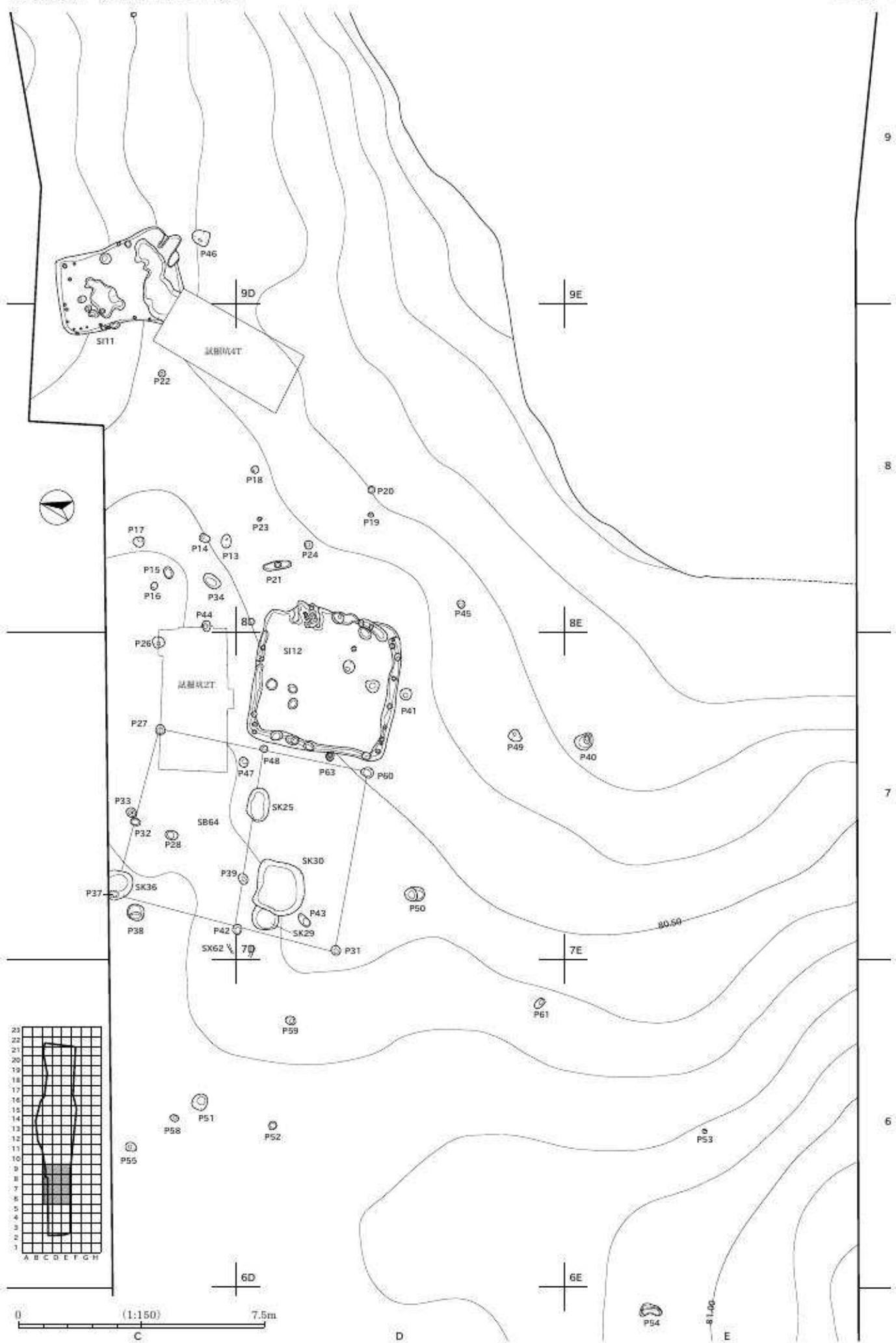


向大浦遺跡 遺構全体図 1 (上層)

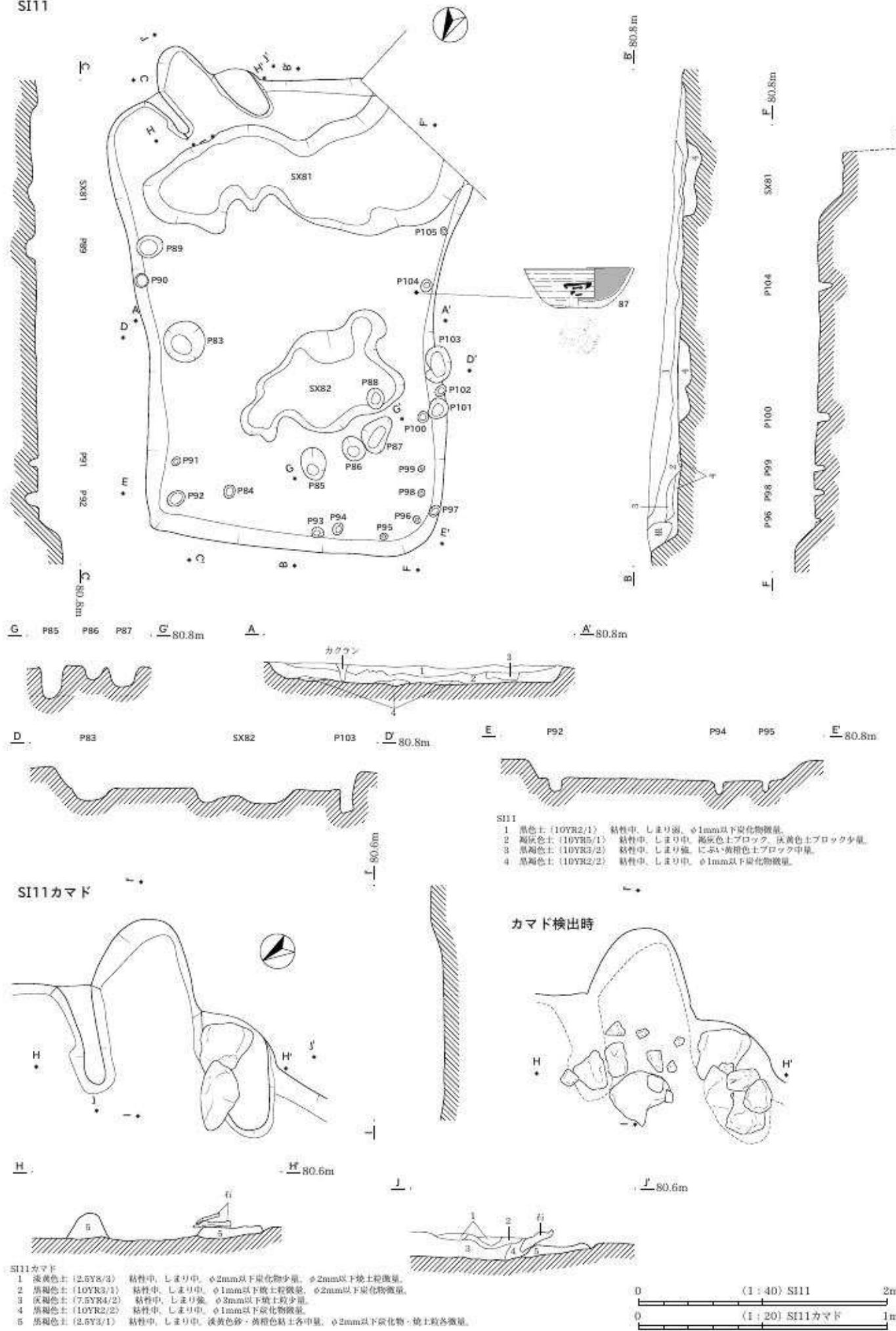
図版 3

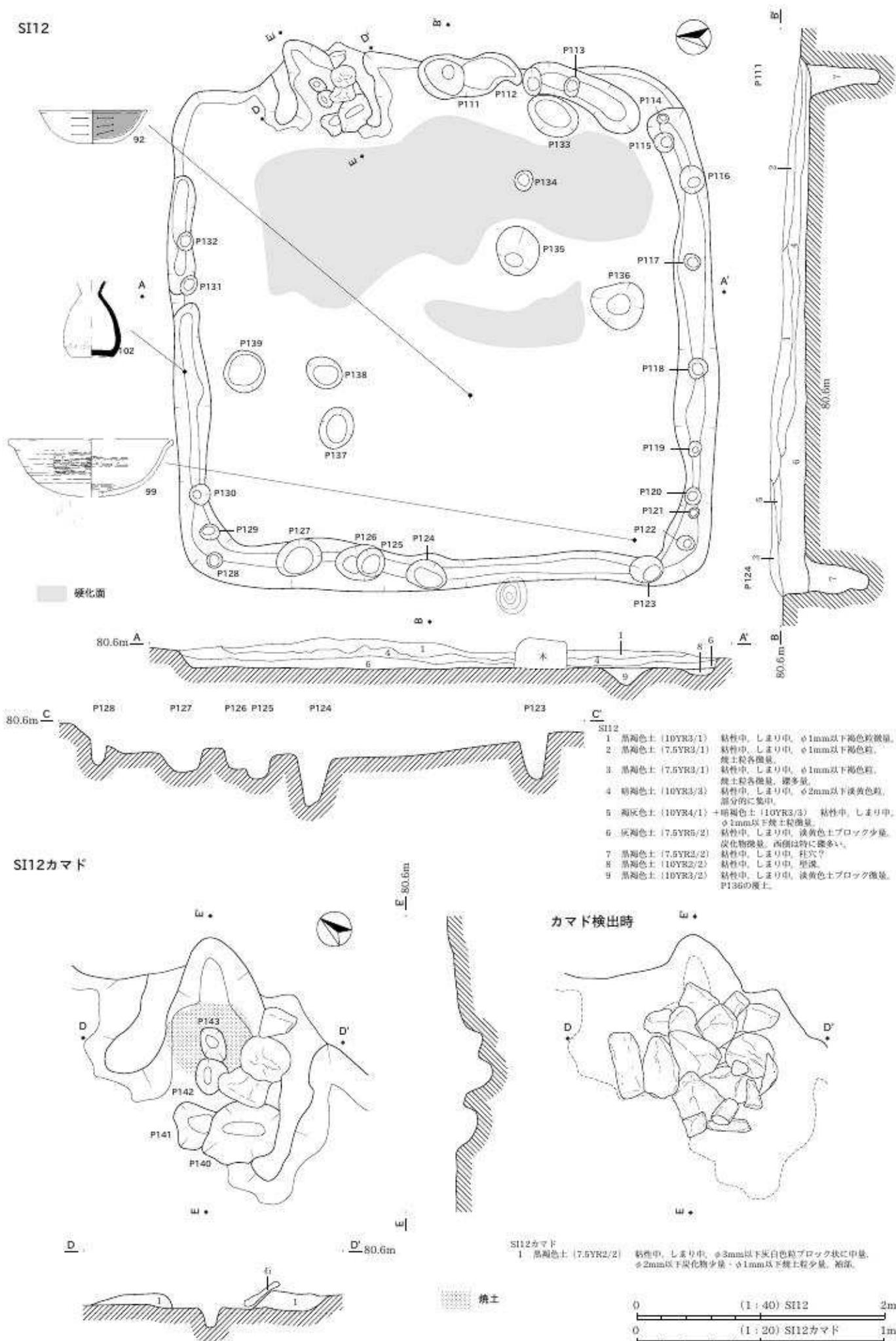


向大浦遺跡 遺構分割図 1 (上層)



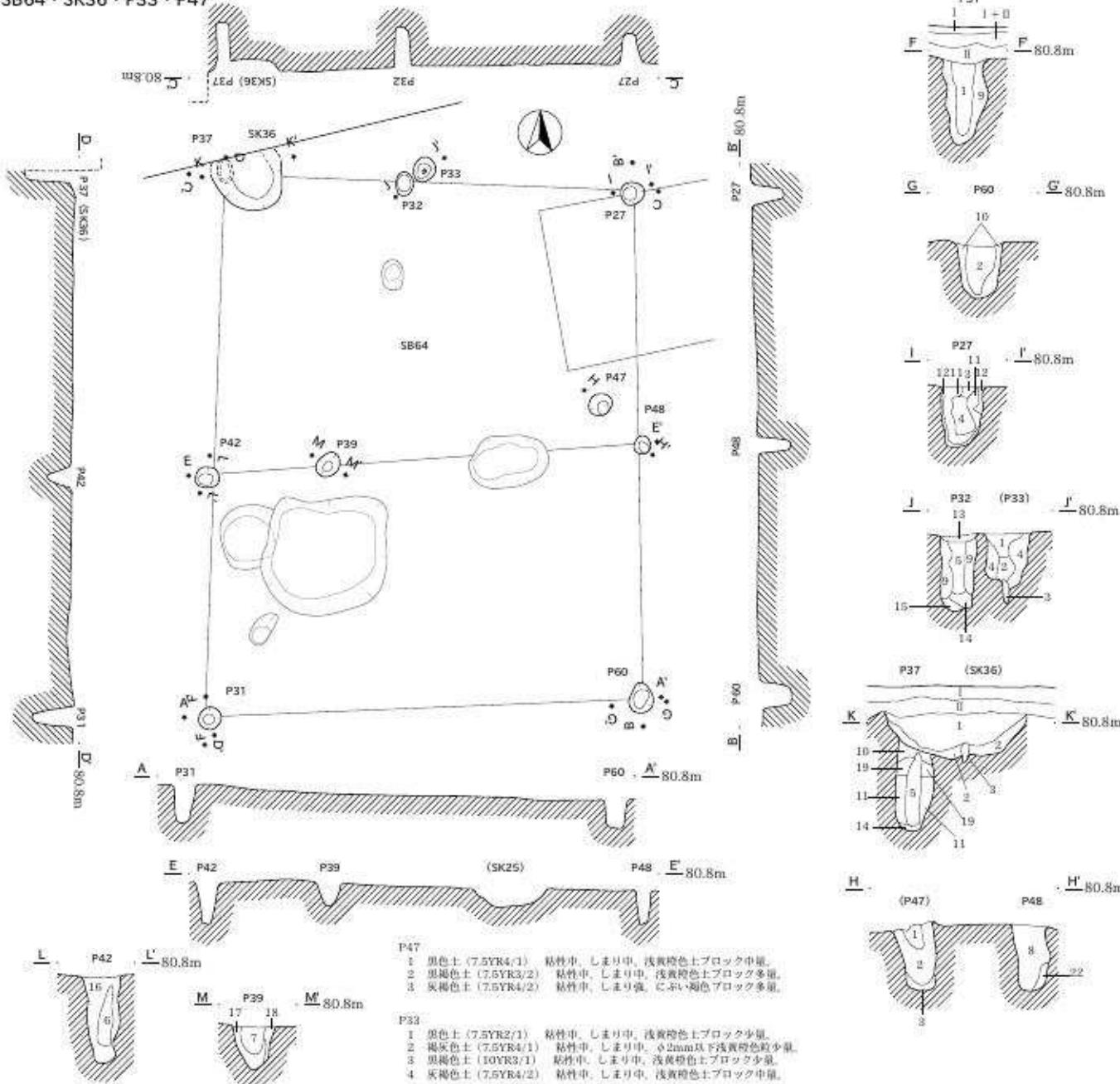
SI11



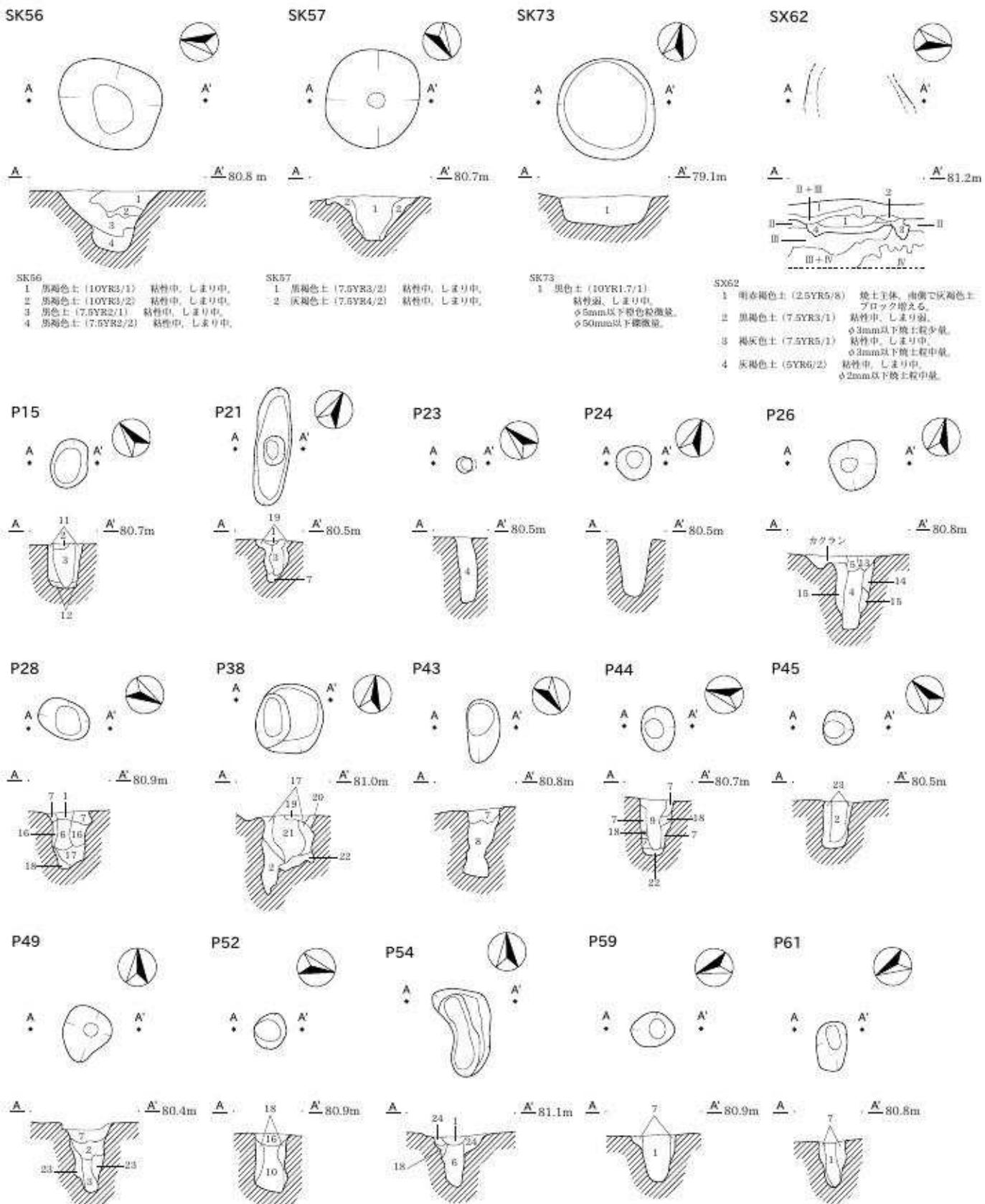


図版7

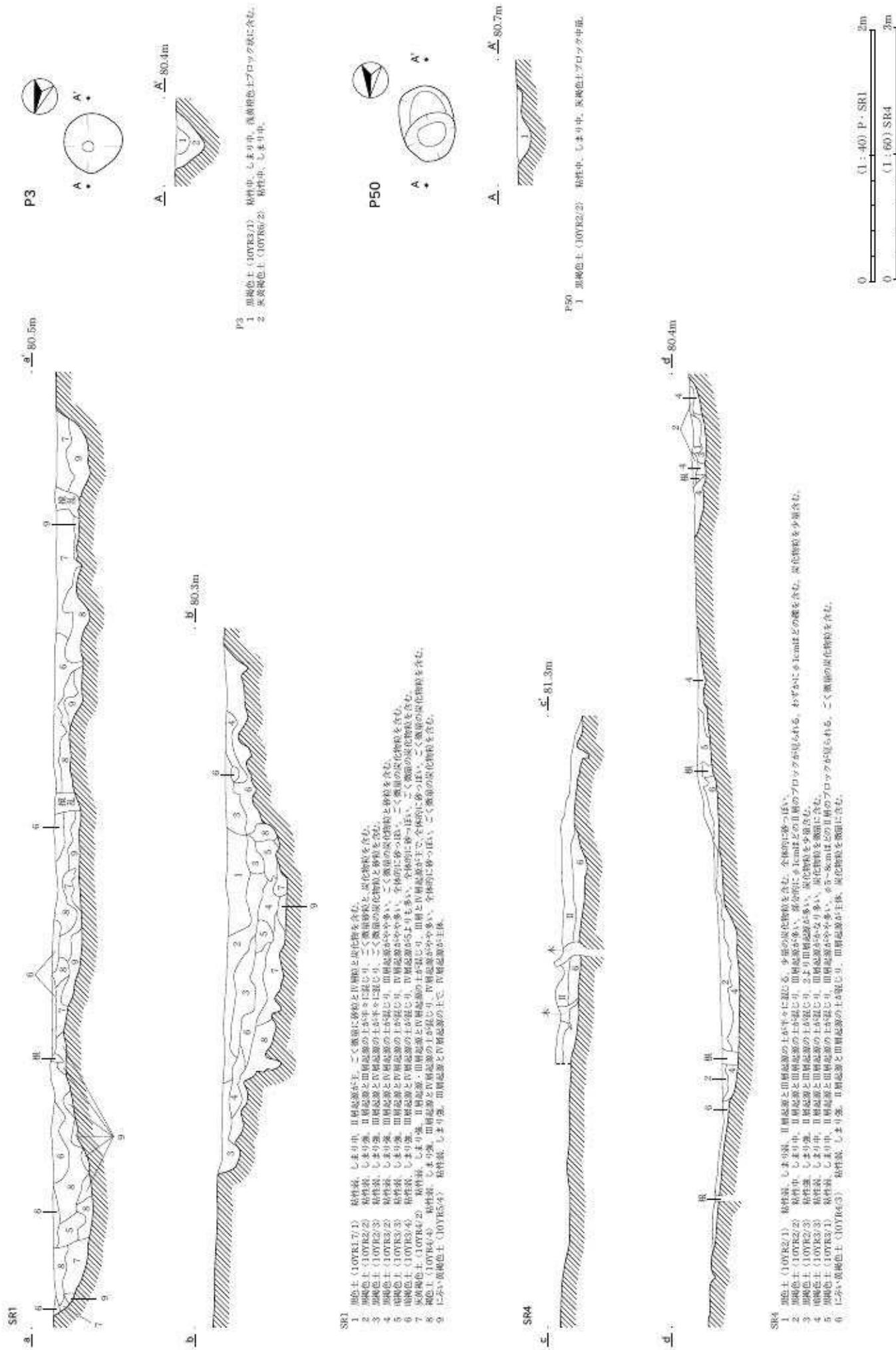
SB64・SK36・P33・P47

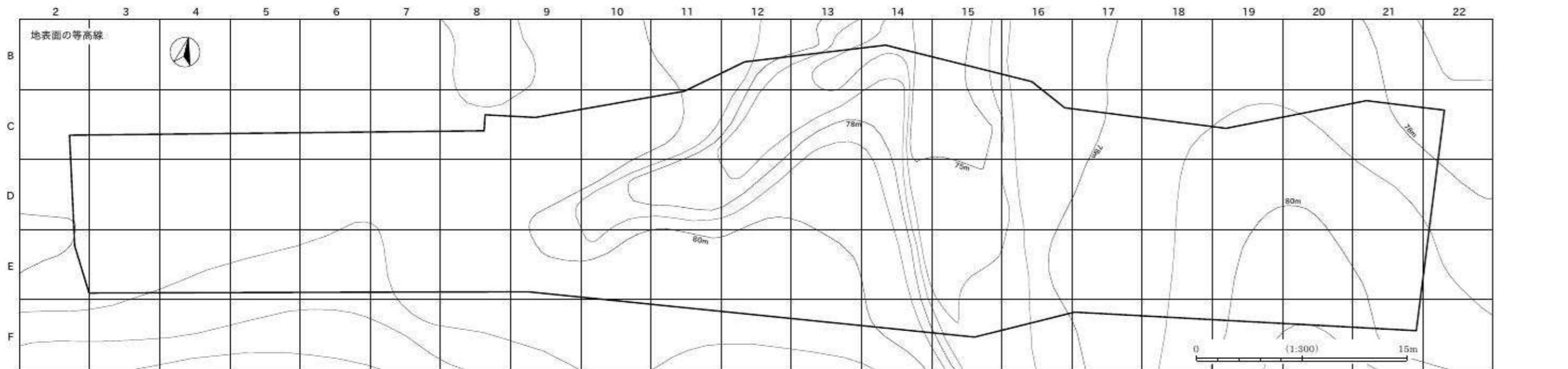
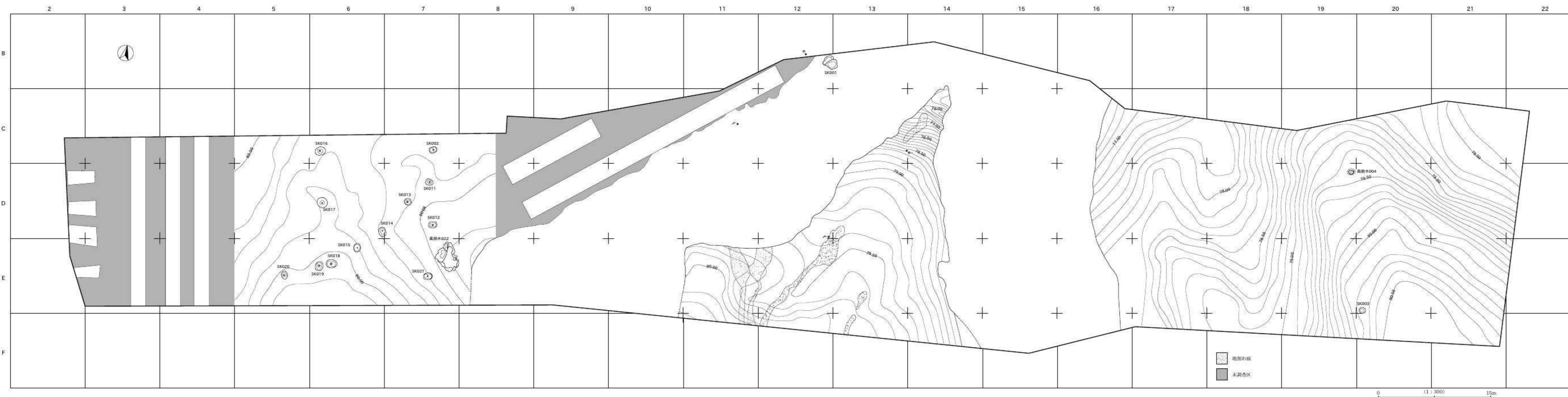


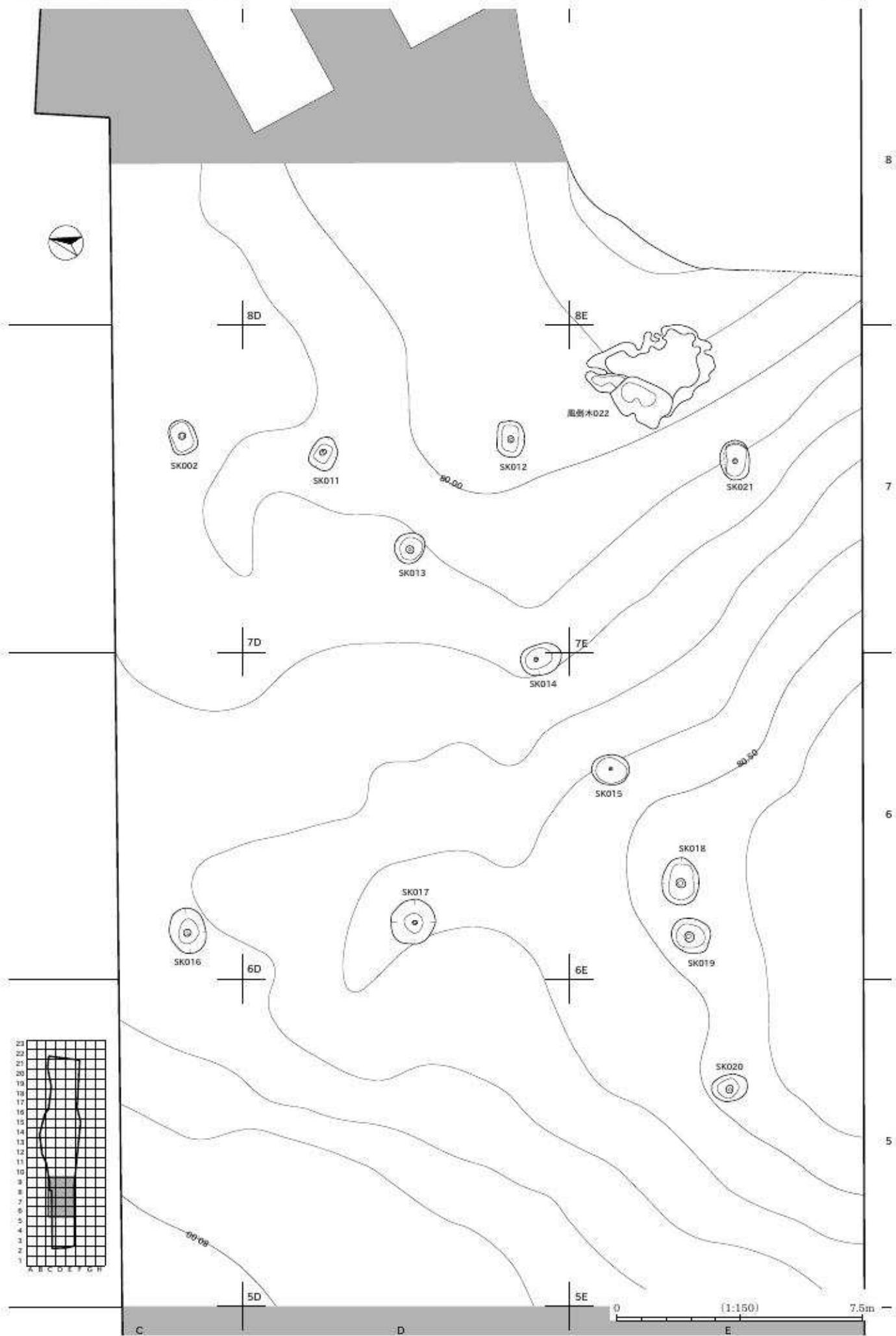
向大浦遺跡 遺構個別図 4 (上層、SK・SX・P)

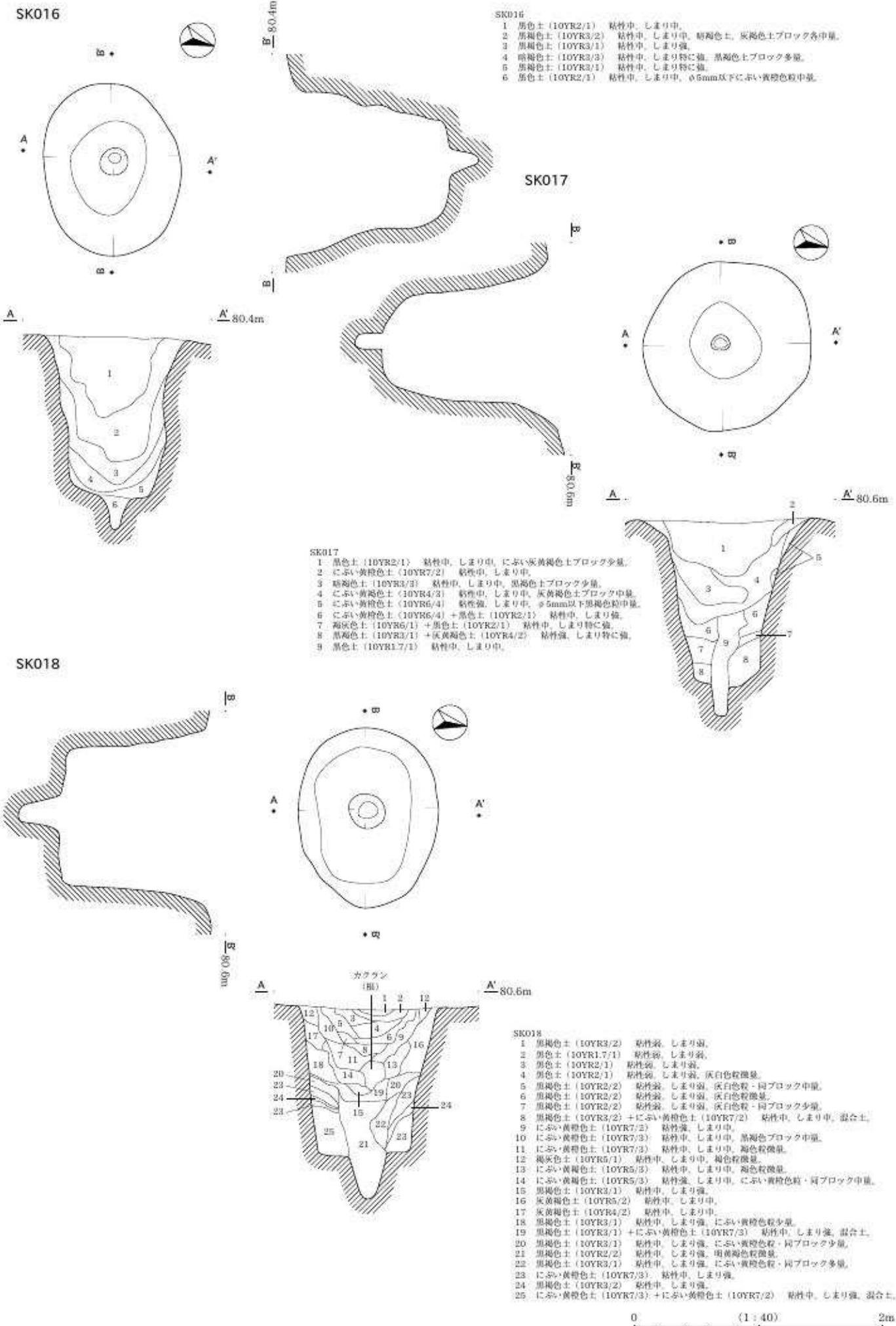


- ピット(P15・21・23・26・28・38・42・45・49・52・54・59・61)共通
- 1 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性中、しまり中。φ1mm以下液化物微量。
 - 2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中、しまり中。φ1mm以下液化物微量、液化物粘微量。
 - 3 黄褐色土 (10YR3/3) 粘性中、しまり中。φ1~2mm以下黄褐色粒少量。
 - 4 黄褐色土 (10YR3/2) 粘性中、しまり弱。φ2mm以下にぶい黄褐色粒中量。
 - 5 黄褐色土 (7.5YR4/3) 粘性中、しまり中。黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック多量。
 - 6 黑褐色土 (10YR3/1) 粘性中、しまり中。深黄褐色土ブロック中量。
 - 7 黑褐色土 (10YR3/1) 粘性中、しまり中。φ3mm以下浅黄褐色粒少量。
 - 8 黄褐色土 (7.5YR4/1) 粘性中、しまり中。φ1mm以下液化物粘微量。
 - 9 黑褐色土 (10YR2/1) 粘性中、しまり中。φ2mm以下にぶい黄褐色粒少量。
 - 10 黑褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中、しまり中。灰褐色土ブロック少量。
 - 11 黑褐色土 (10YR2/1) 粘性中、しまり中。φ2mmにぶい黄褐色土ブロック・φ2mm以下にぶい黄褐色粒中量。
 - 12 底黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中、しまり中。にぶい黄褐色土ブロック多量。
 - 13 浅褐色土 (7.5YR4/3) 粘性中、しまり弱。φ2mm以下にぶい黄褐色粒中量。
 - 14 浅褐色土 (7.5YR4/2) 粘性中、しまり中。黄褐色土ブロック多量。
 - 15 浅褐色土 (7.5YR4/3) + 黑褐色土 (10YR3/1) 粘性中、しまり中。φ2mm以下黄褐色粒少量。
 - 16 浅褐色土 (10YR4/1) 粘性中、しまり中。浅黄褐色土ブロック多量。
 - 17 黑褐色土 (10YR2/2) 粘性中、しまり中。浅黄褐色土ブロック少量。
 - 18 浅黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中、しまり中。浅黄褐色土ブロック少量。
 - 19 浅褐色土 (10YR4/1) 粘性中、しまり中。φ3mm以下液化物粘少量。
 - 20 にぶい黄褐色土 (10YR7/2) 粘性中、しまり中。
 - 21 黑褐色土 (10YR2/1) 粘性中、しまり中。φ3mm以下液化物粘少量。
 - 22 浅褐色土 (10YR4/1) + にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 粘性中、しまり中。
 - 23 深褐色土 (7.5YR4/2) 粘性中、しまり中。73mm以下液化物粘少量。
 - 24 黑褐色土 (10YR3/1) 粘性中、しまり中。灰褐色土ブロック多量。

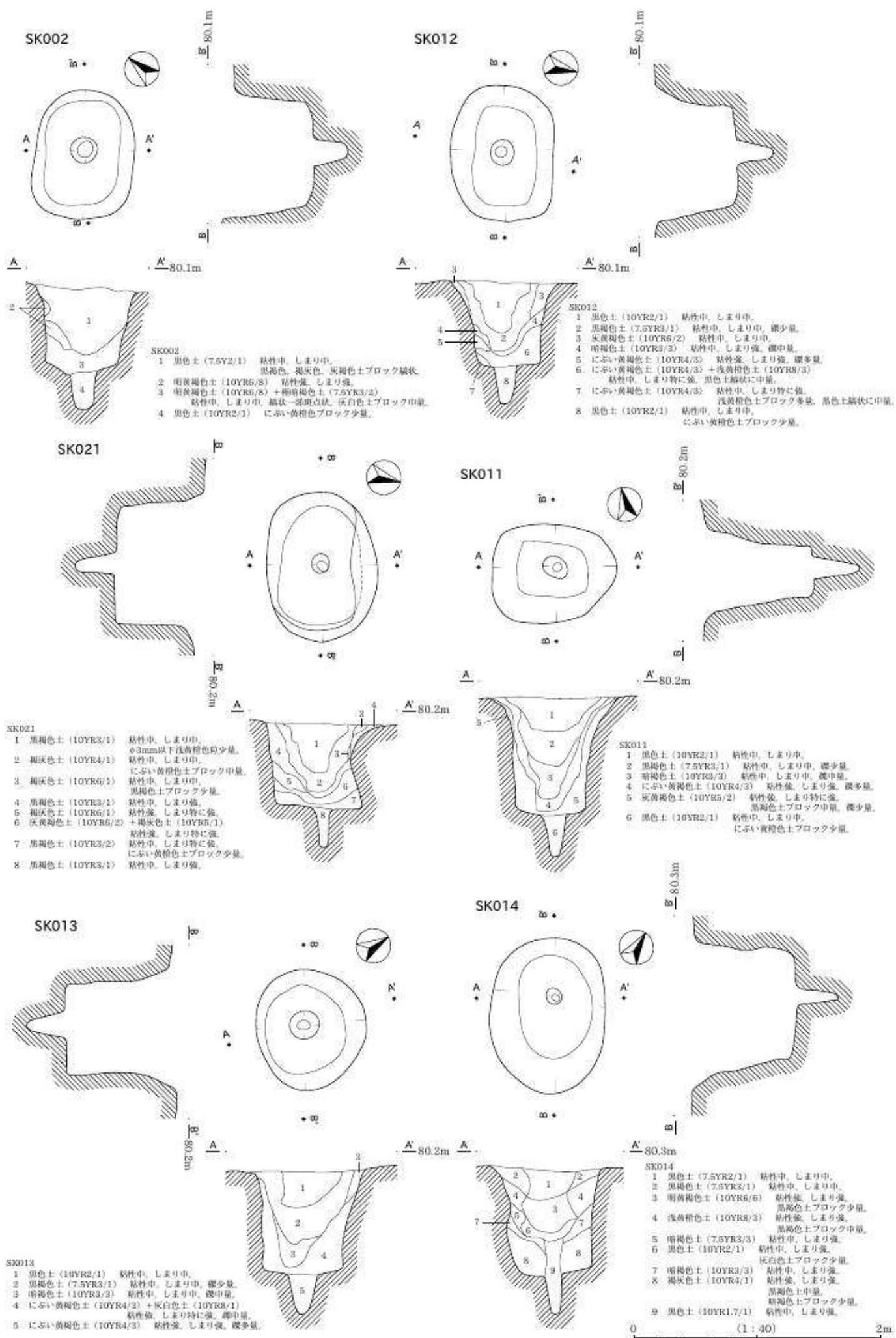


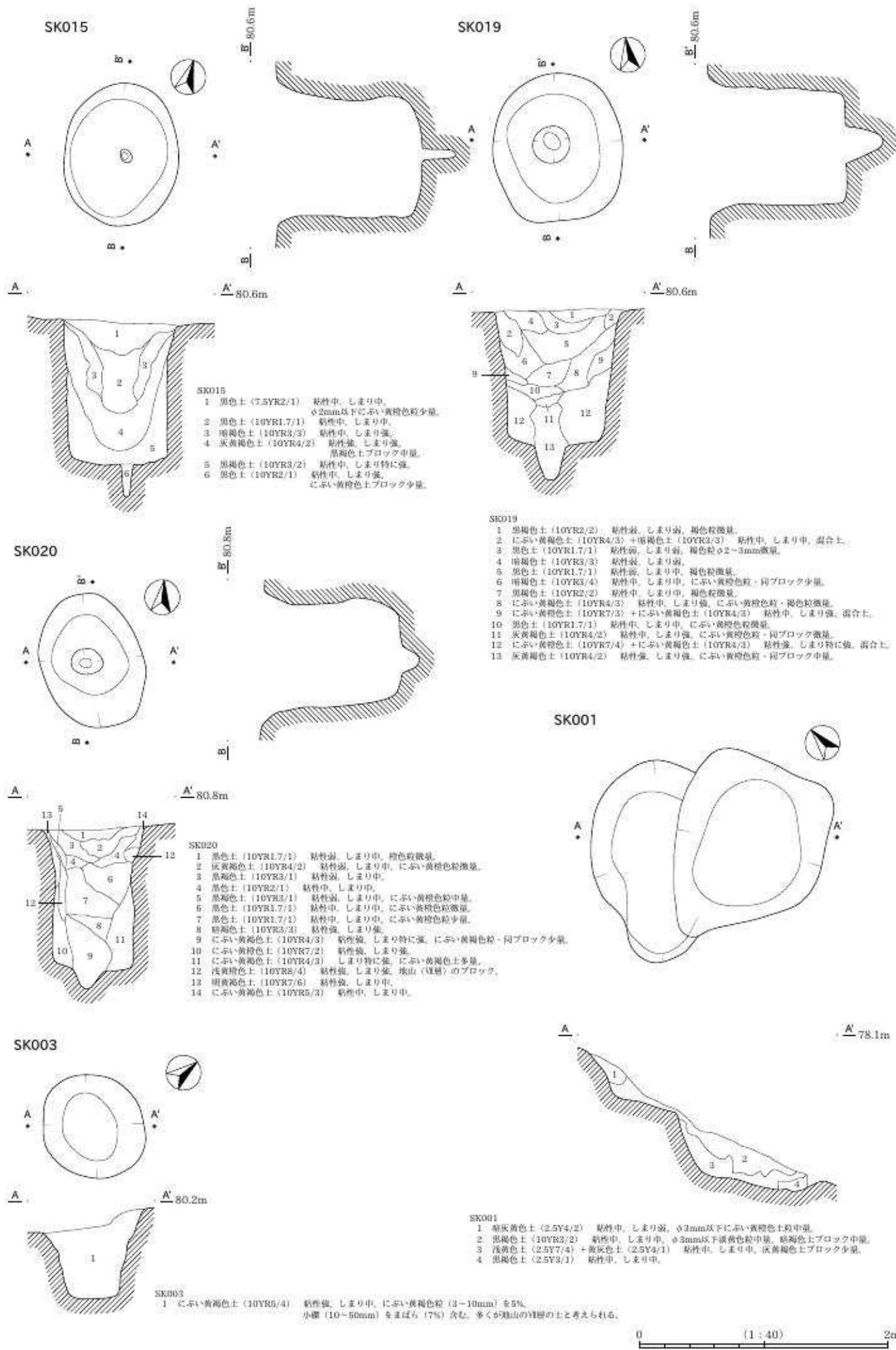


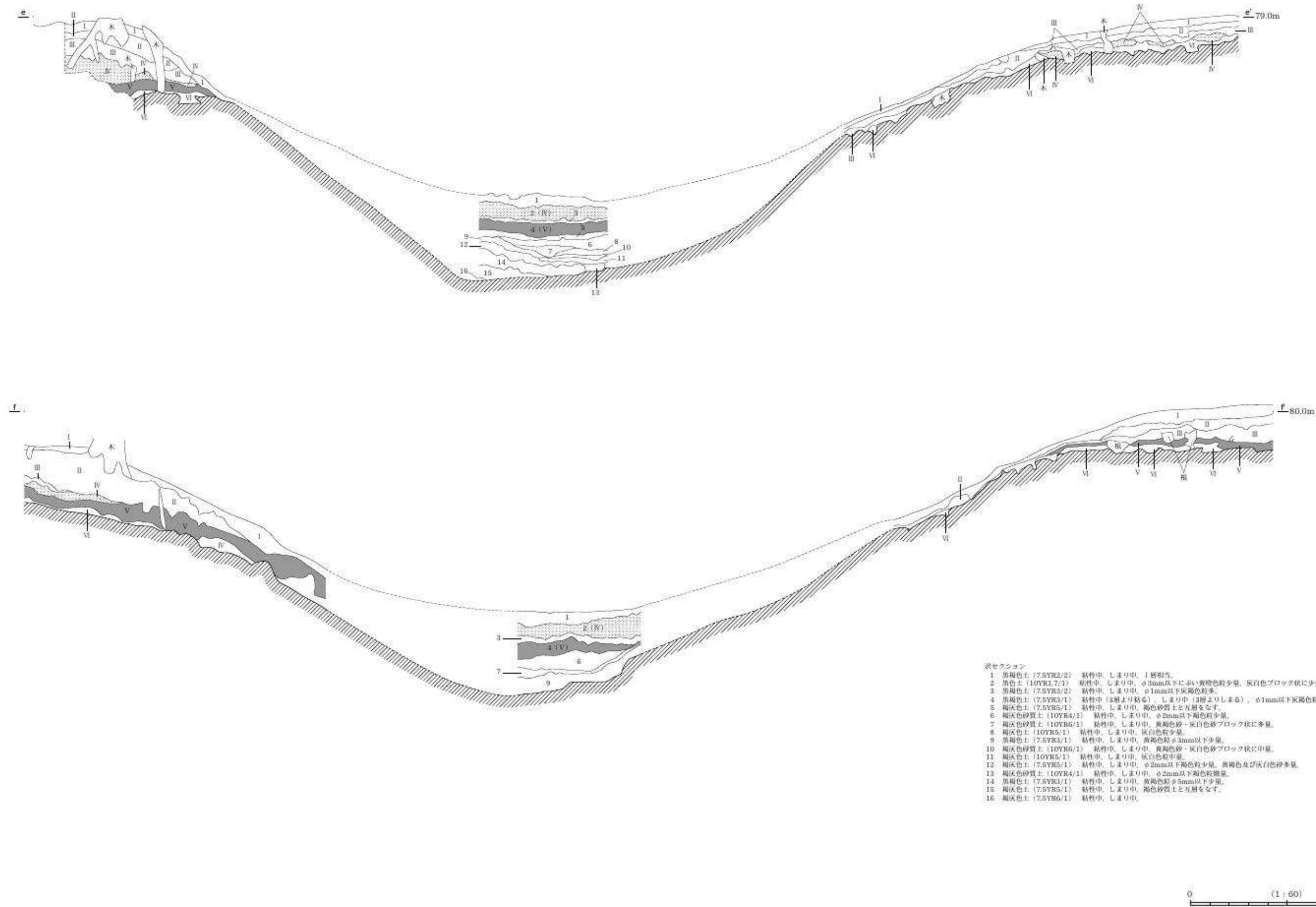




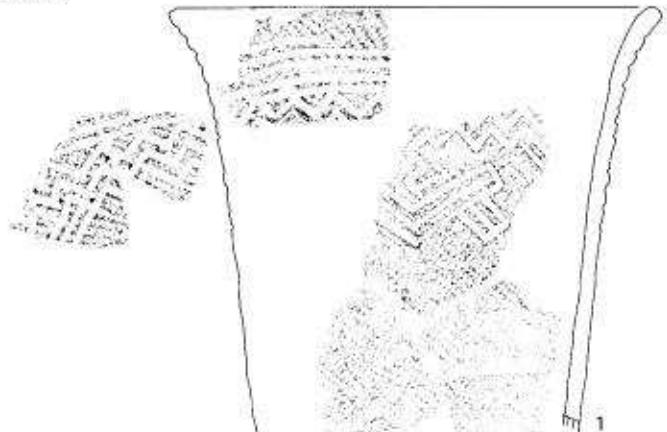
向大浦遺跡 遺構個別図 7 (下層、陥穴 B・C グループ)



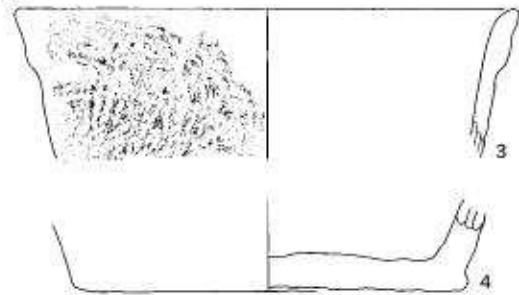




SK001



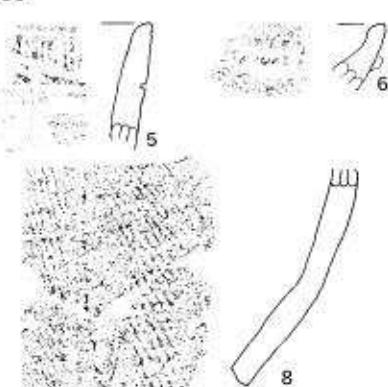
P3



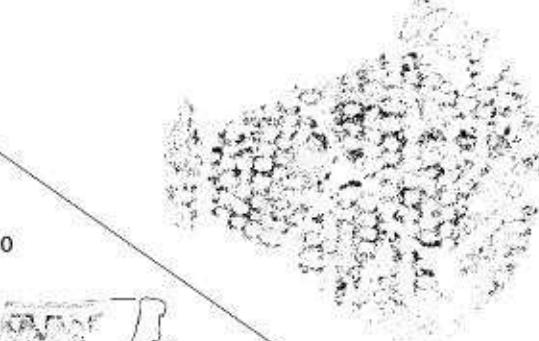
下層遺物包含層



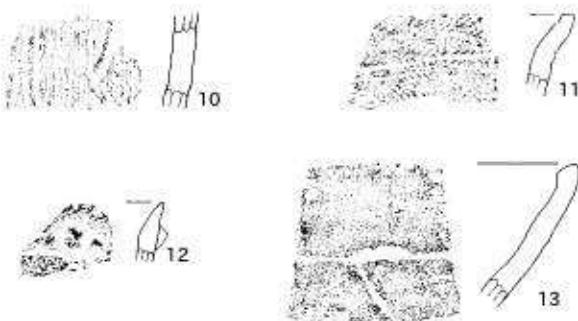
P50



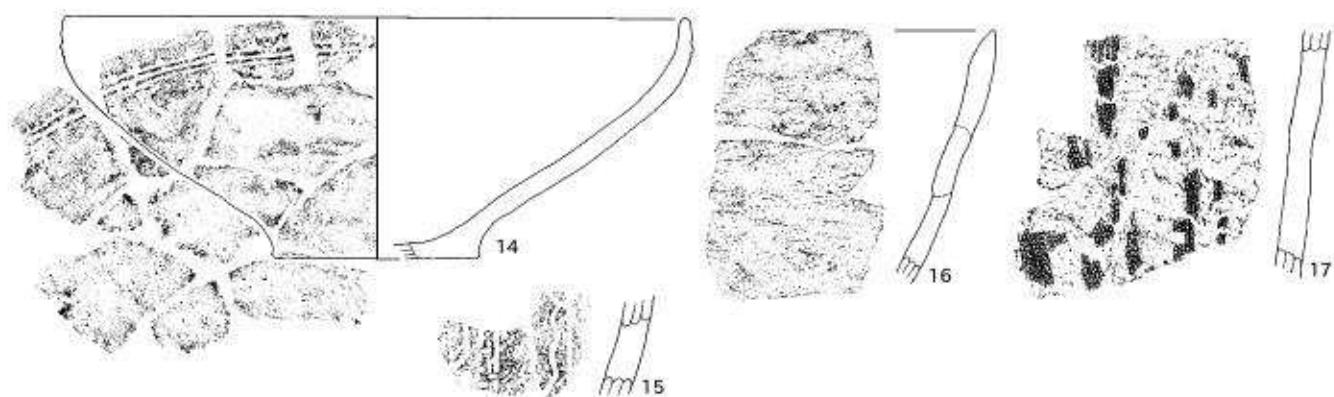
P60



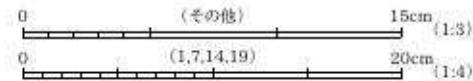
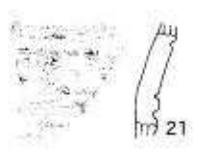
SR1



SR4



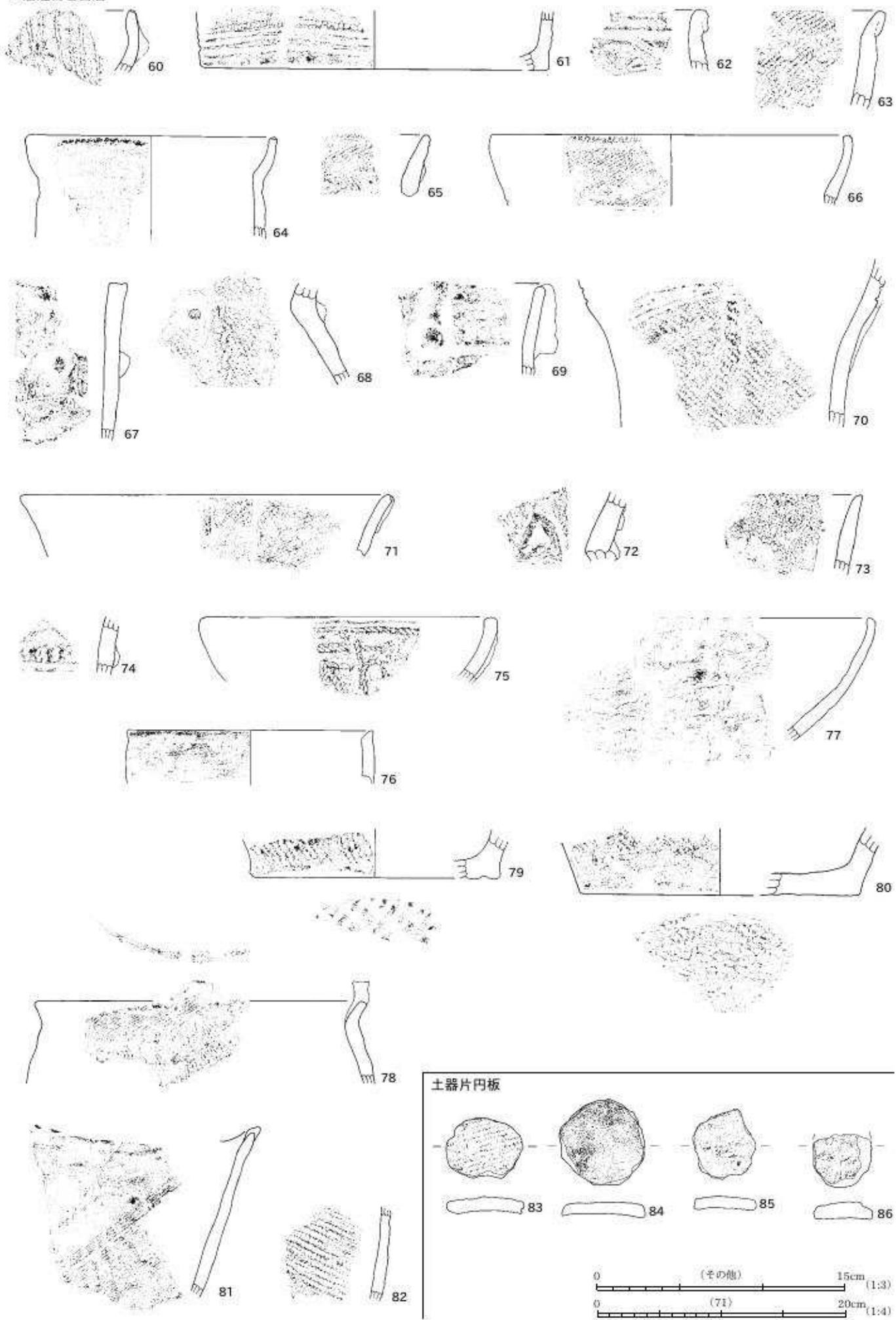
上層遺物包含層



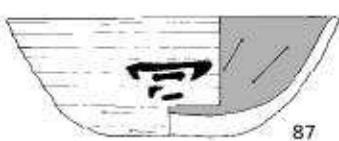
上層遺物包含層



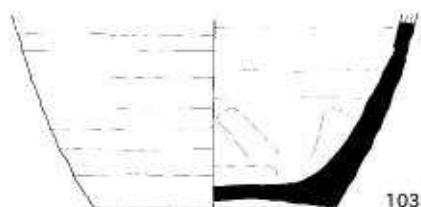
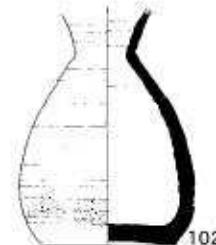
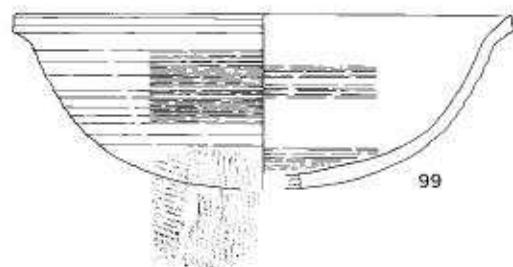
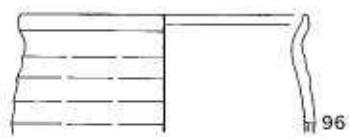
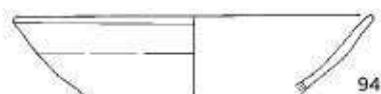
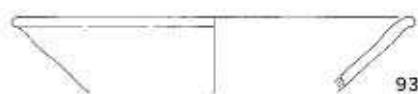
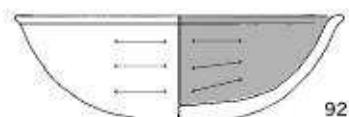
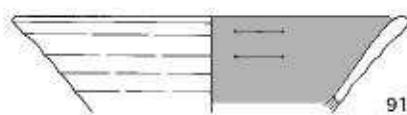
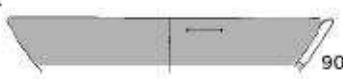
上層遺物包含層



SI11



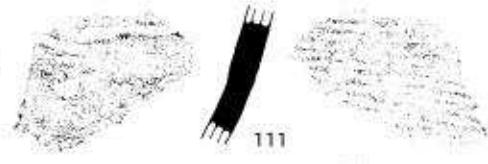
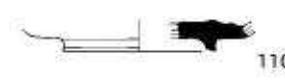
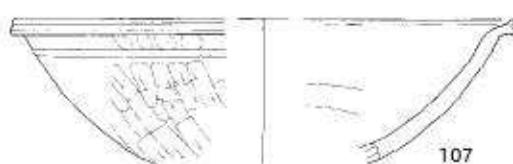
SI12



SK30

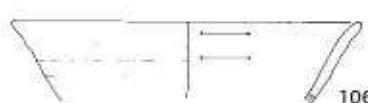


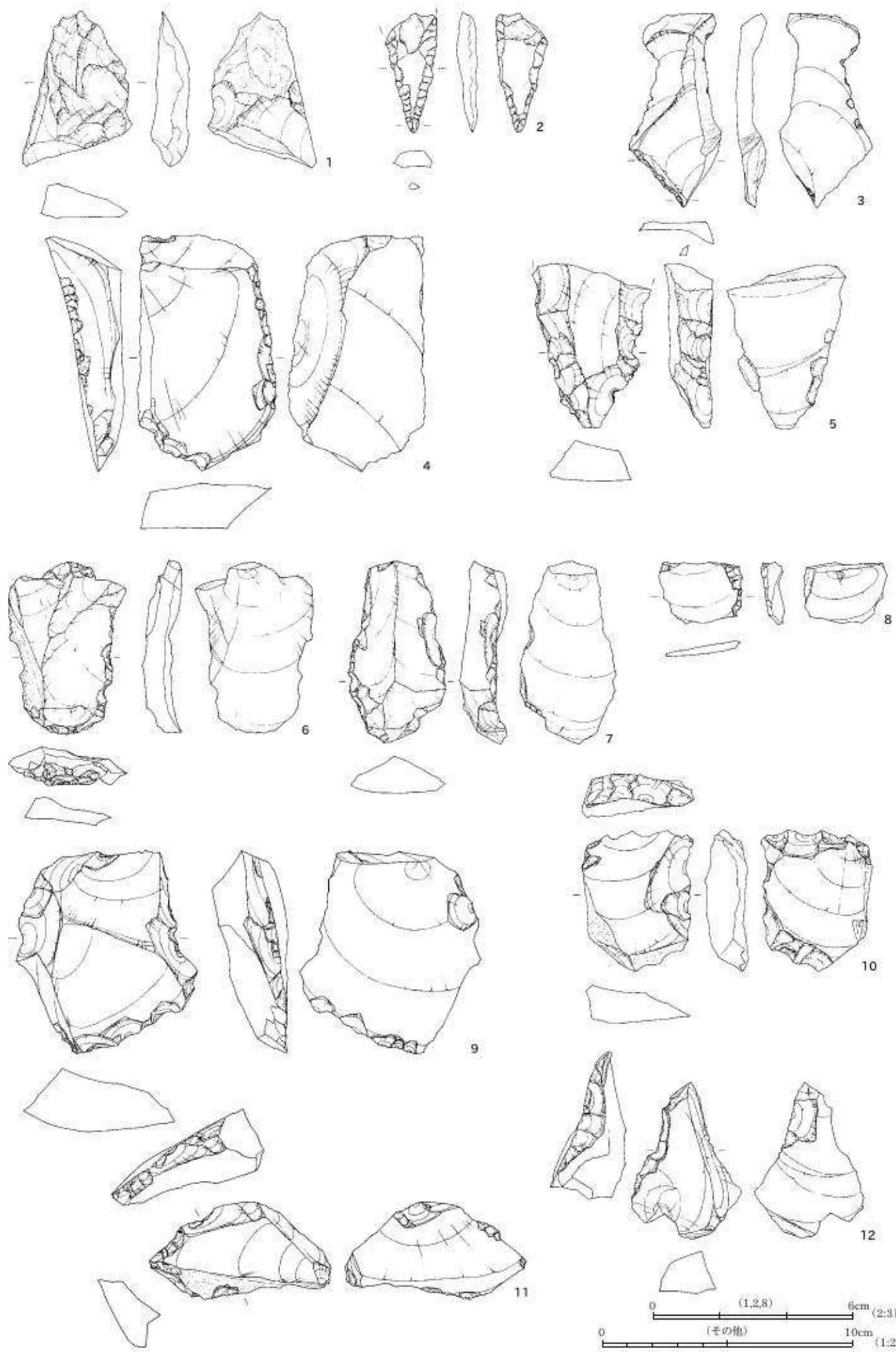
上層遺物包含層

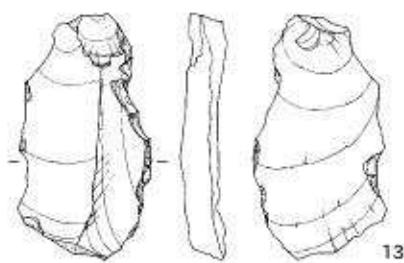


■ 黒色処理

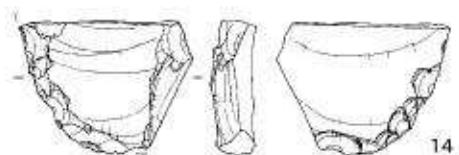
□ 付着物



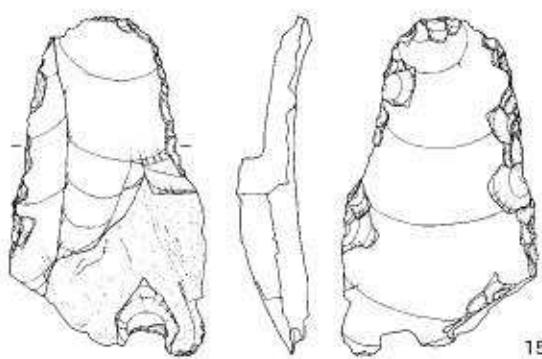




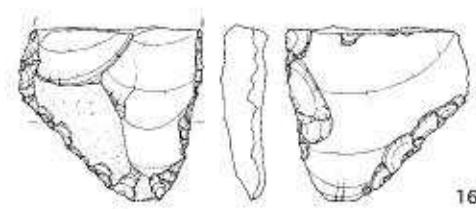
13



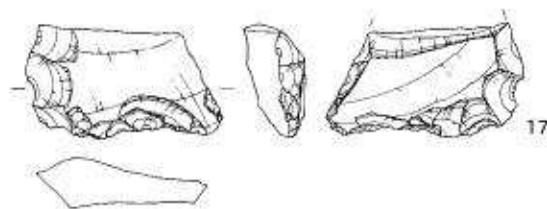
14



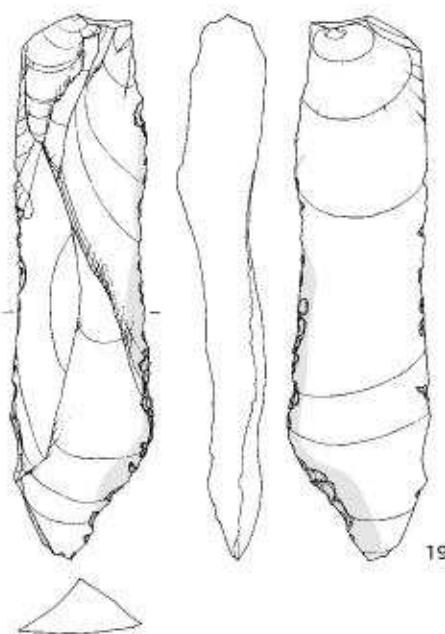
15



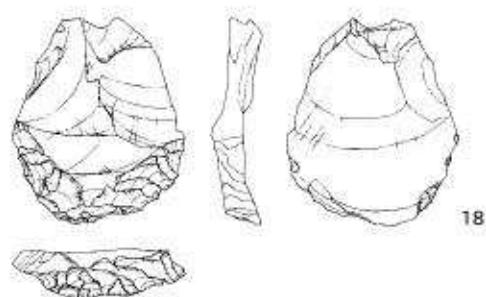
16



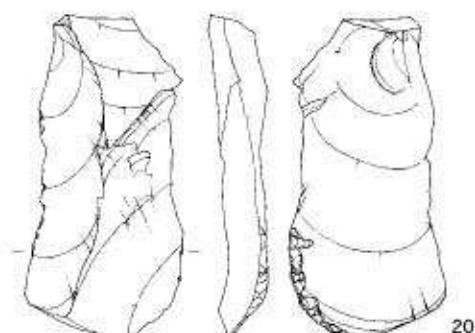
17



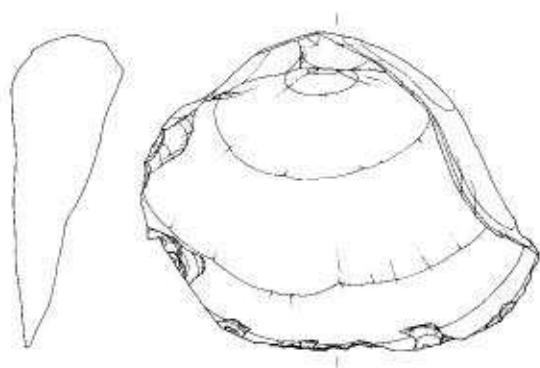
19



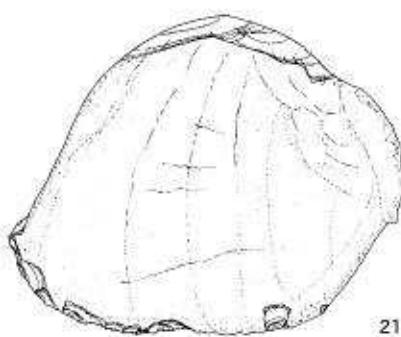
18



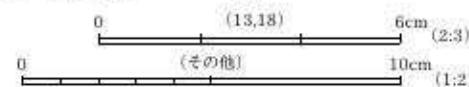
20

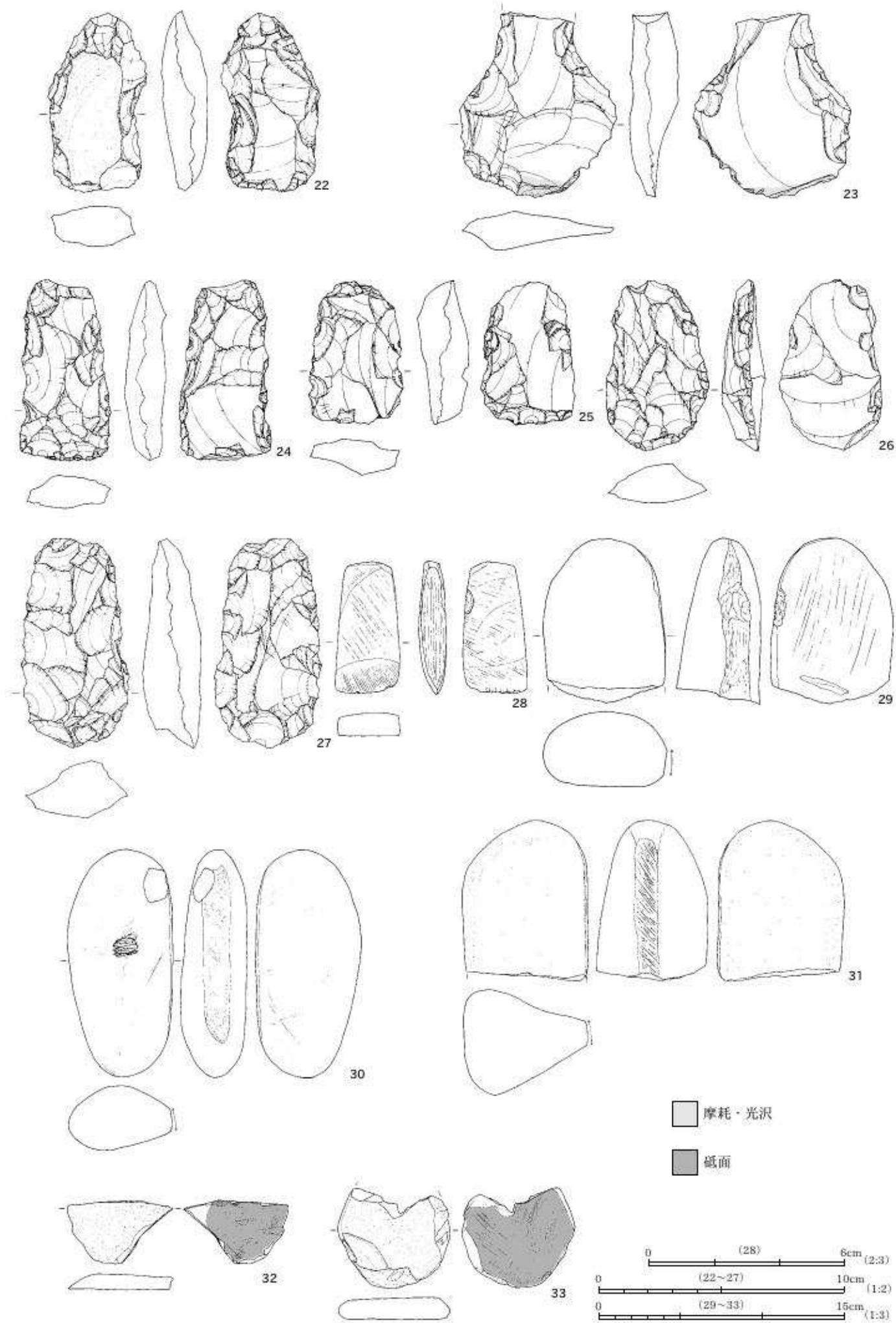


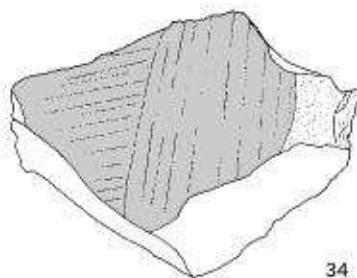
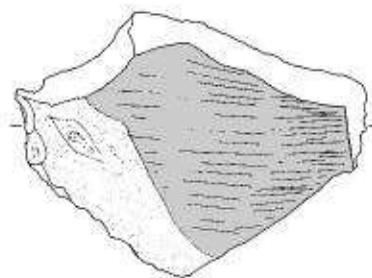
21



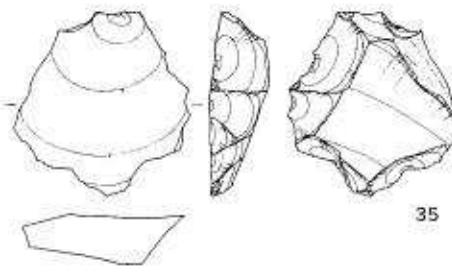
□ 光沢



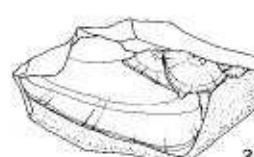
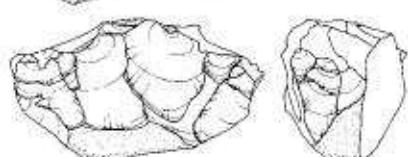




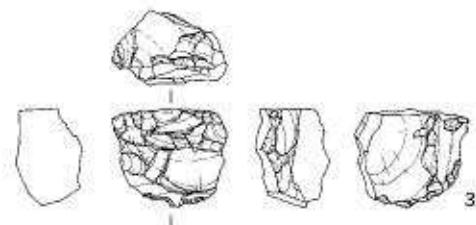
34



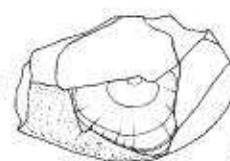
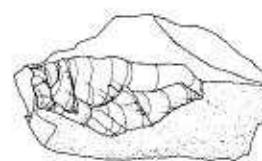
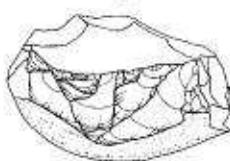
35



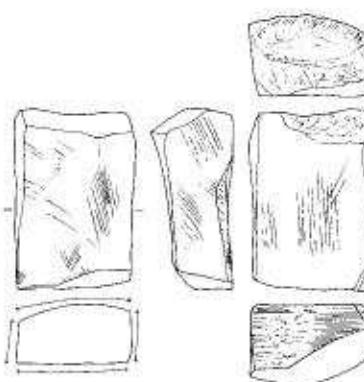
36



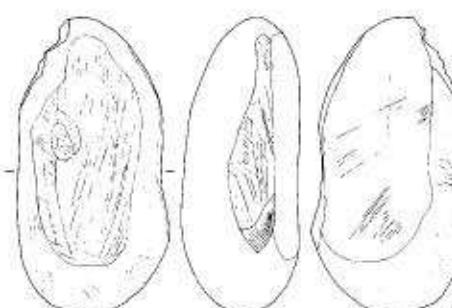
38



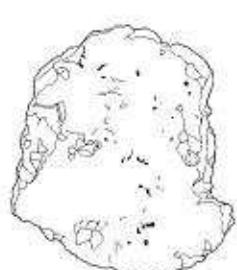
37



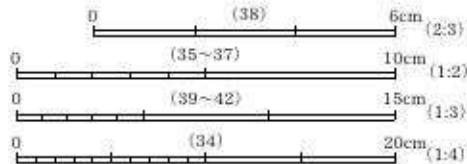
40



41

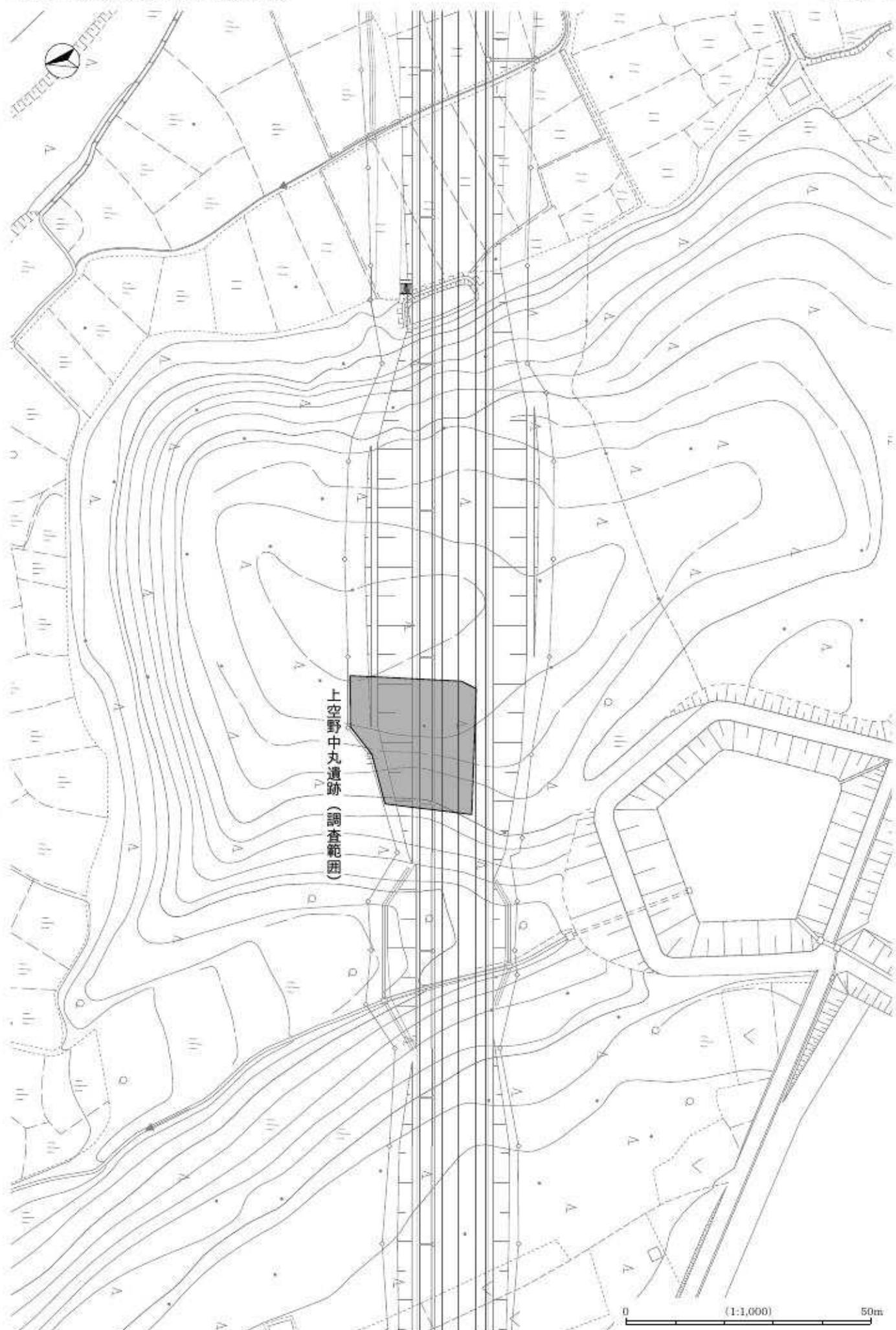


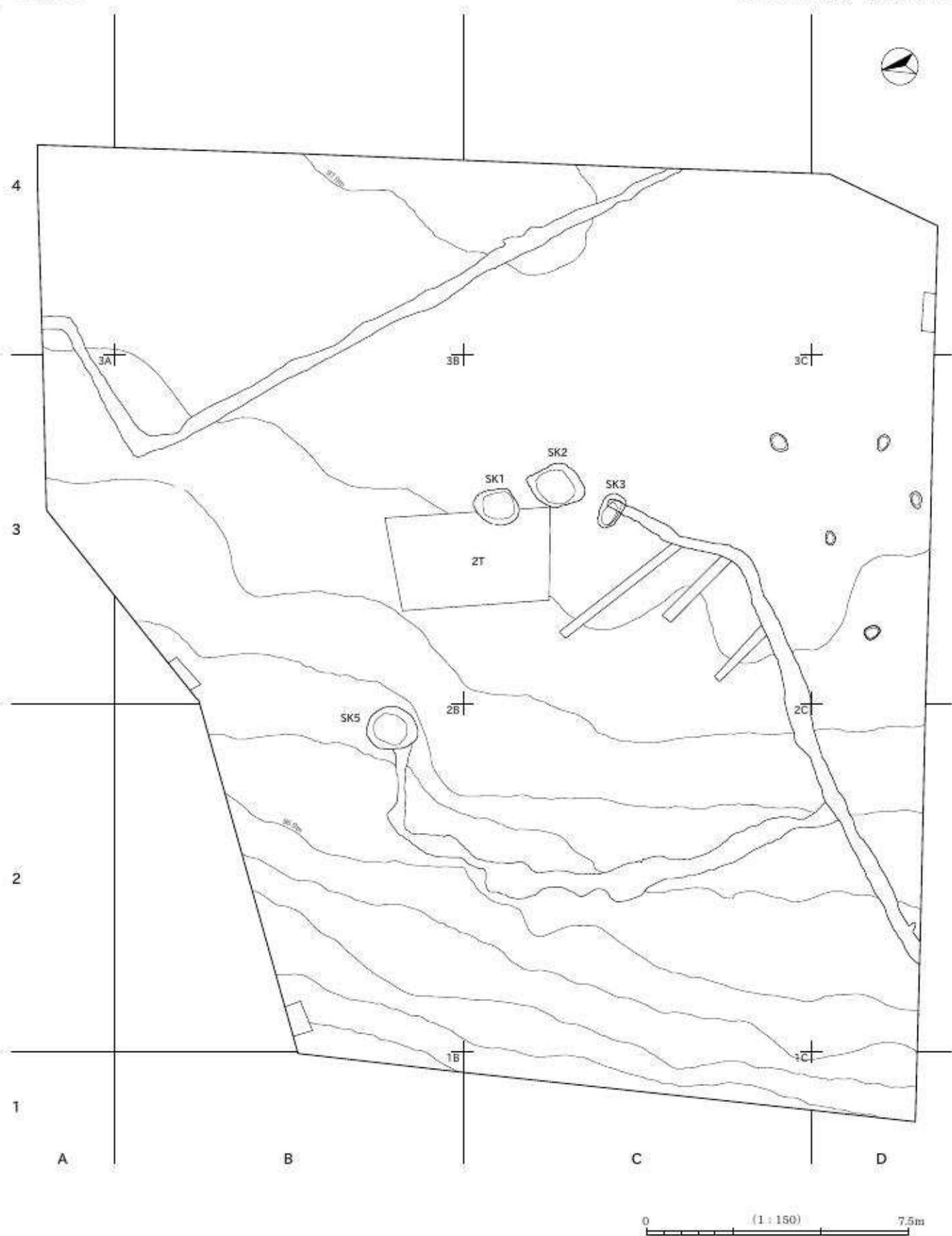
42

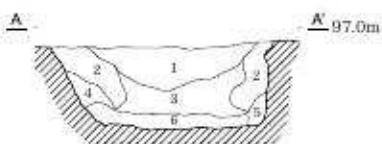
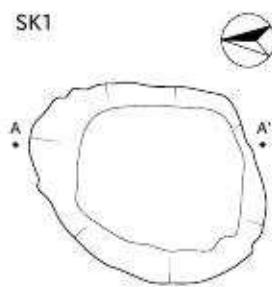


上空野中丸遺跡の調査範囲と周辺の地形

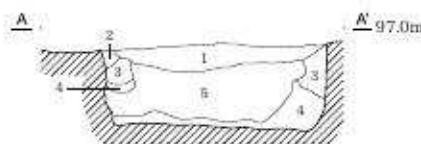
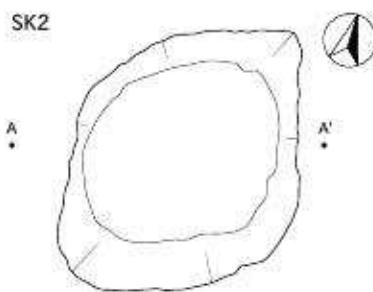
図版 24







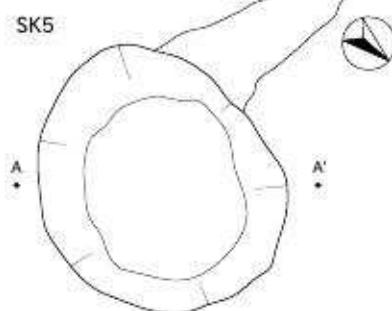
- SK1**
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中。粘性強。黄褐色粒中量。φ3mm以下炭化物少量。
 - 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり中。粘性強。黄褐色粒中量。1層より色調明るい。
 - 3 褐灰色土 (10YR4/1) しまり弱。粘性中。黄褐色土粒微量。
 - 4 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまり弱。粘性強。橙色粘土ブロック多量。
 - 5 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまり強。粘性強。橙色粘土ブロック多量。
 - 6 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) しまり強。粘性中。橙色粘土ブロック中量。



- SK2**
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中。粘性強。黄褐色粒中量。φ3mm以下炭化物少量。
 - 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) と灰褐色土 (10YR5/2) の混合土 しまり中。粘性強。
 - 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強。粘性強。黄褐色土粒中量。1層より色調が明るい。
 - 4 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまり弱。粘性強。橙色粘土ブロック多量。3層より灰色味が強い。
 - 5 灰灰色土 (10YR4/1) しまり弱。粘性中。黄褐色土粒微量。



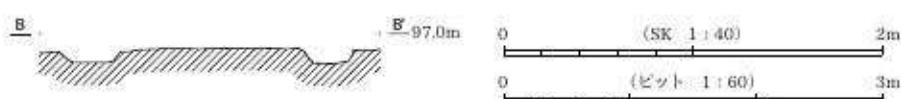
- SK3**
- 1 褐色土 (7.5YR4/3) しまり中。粘性中。
 - 2 褐色土 (10YR4/4) しまり弱。粘性中。1層より黄色味が強い。
 - 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強。粘性中。
- 溝**
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり中。粘性中。

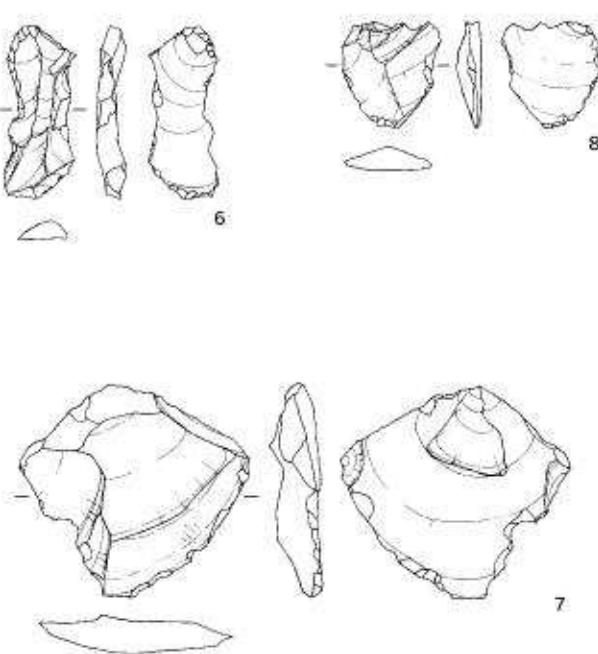
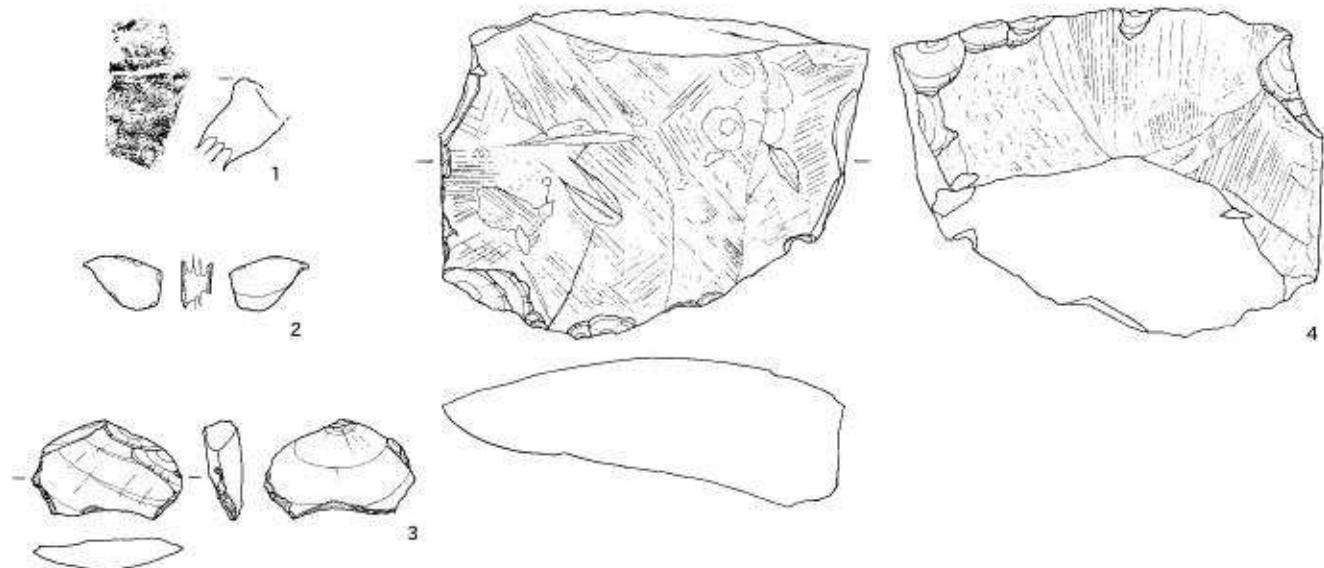


- SK5**
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり中。粘性中。橙色土ブロック少量。

ピット

B'

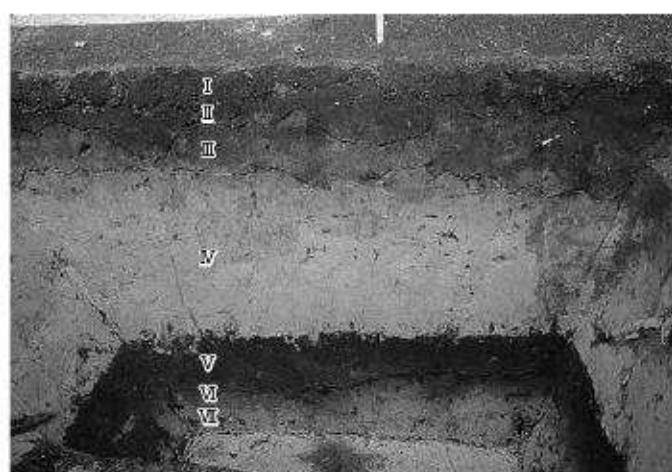




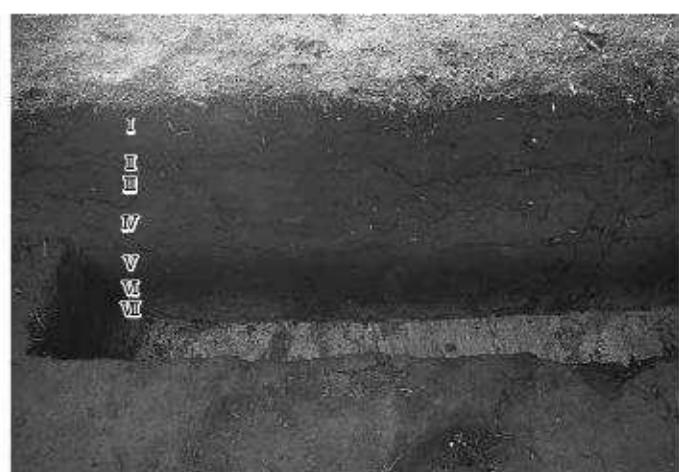
0 (1~8) 10cm (1:2)



調査区全景（空撮）



4C19 基本層序



7D16 基本層序



13E24 基本層序



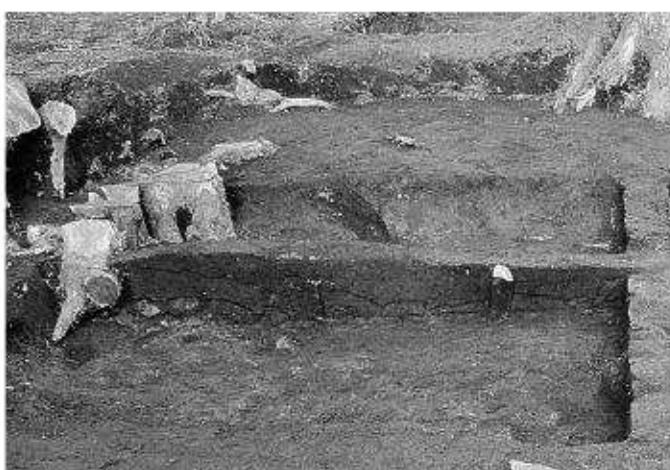
18E8 基本層序



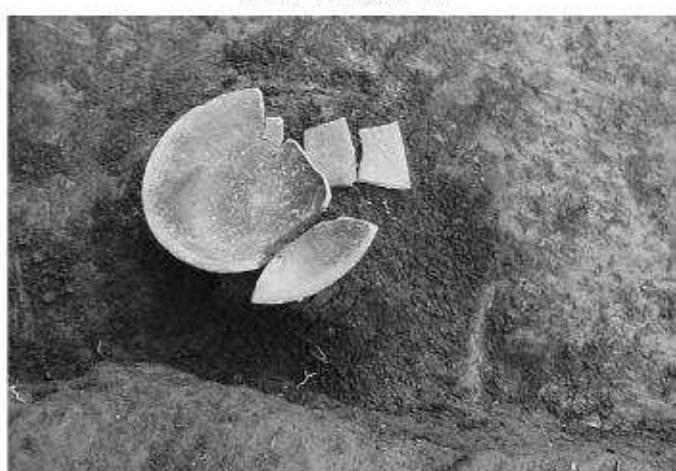
SI11 完掘（北から）



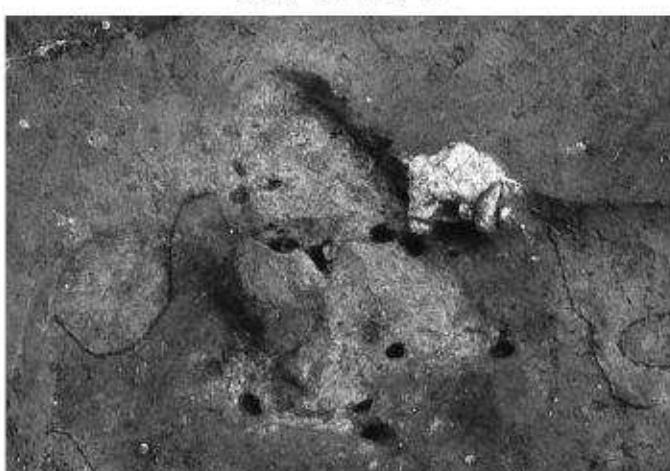
SI11 断面（南から）



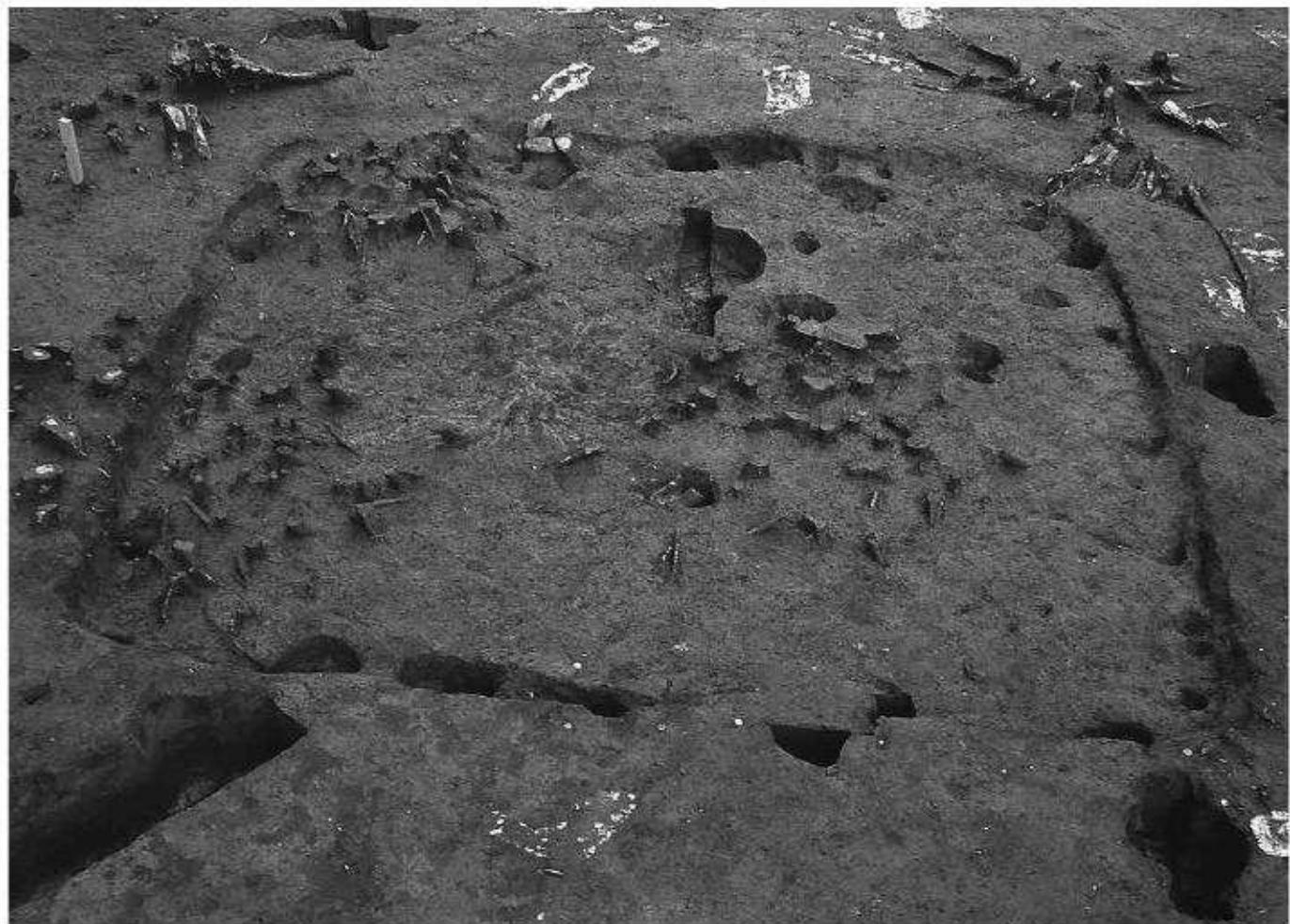
SI11 断面（西から）



SI11 遺物出土状況（西から）



SI11 カマド完掘（北から）



SI12 完掘（西から）



SI12 断面（南から）



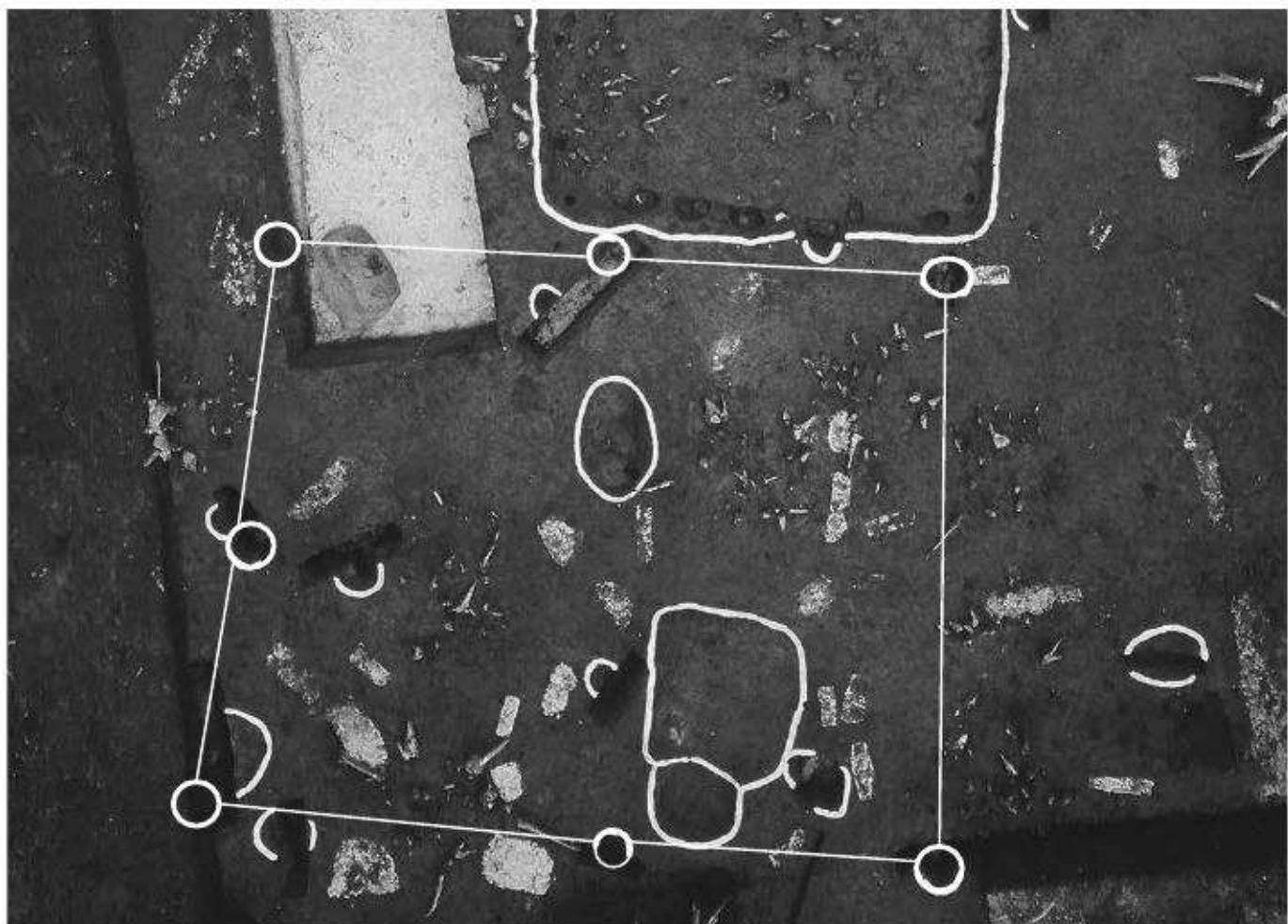
SI12 遺物出土状況（西から）



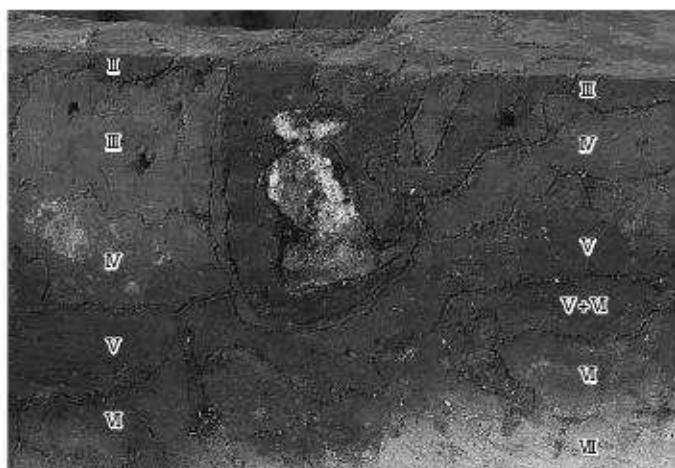
SI12 遺物出土状況（南から）



SI12 カマド完掘（西から）



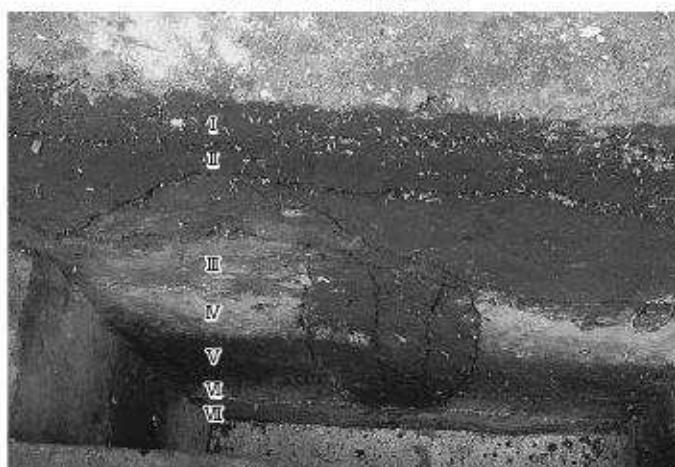
SB64 完掘（西から）



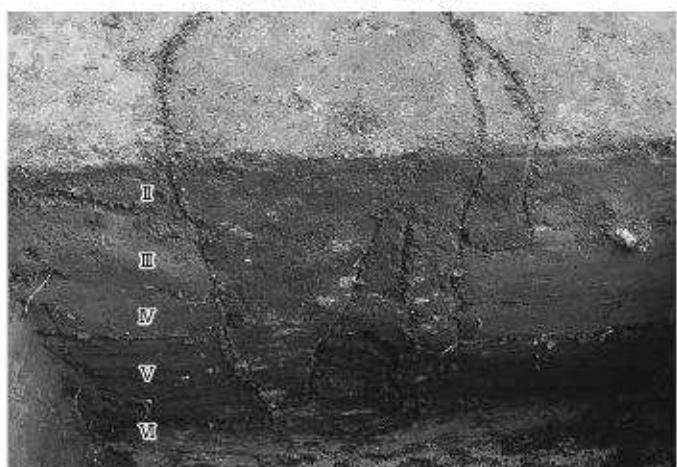
SB64-P27 断面（南から）



SB64-P31 断面（東から）



SB64-P37 断面（南から）



SB64-P42 断面（西から）



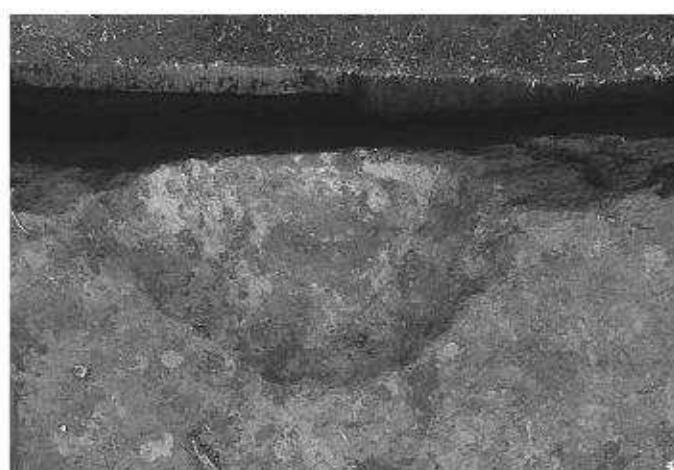
SK25 断面（南から）



SK25 完掘（南から）



SK36 断面（南から）



SK36 完掘（南から）



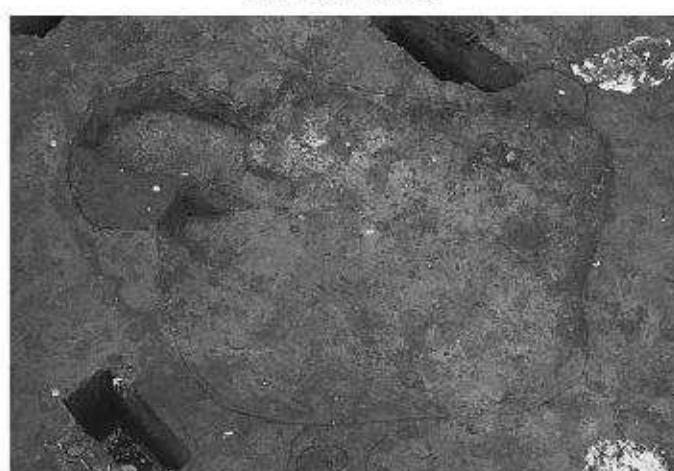
SK29 断面（北から）



SK29 完掘（北から）



SK30 断面（南から）



SK30 完掘（北から）



SK56 断面（西から）



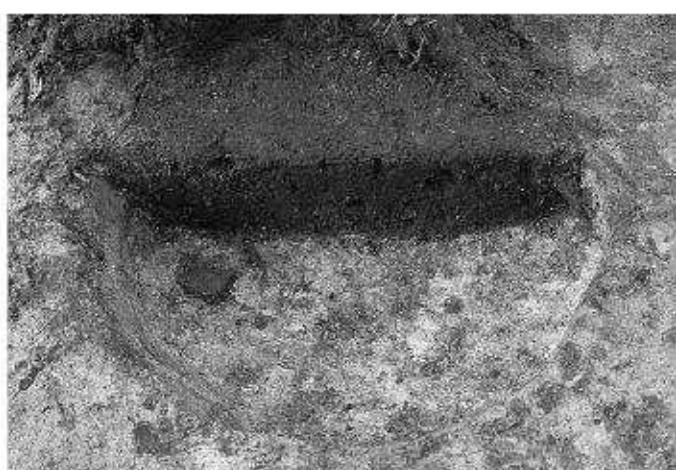
SK56 完掘（西から）



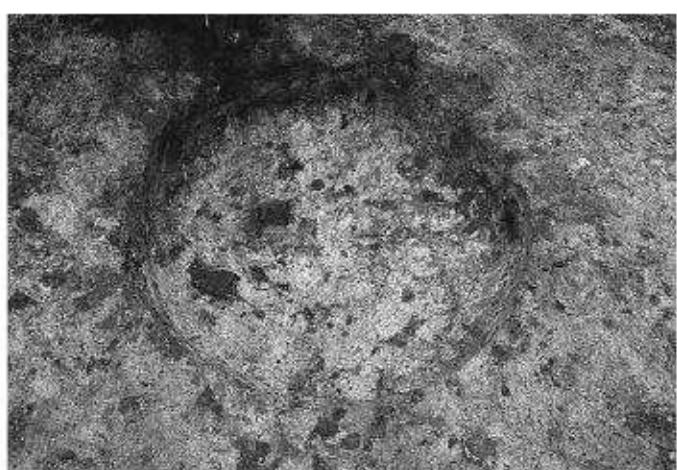
SK57 断面（北東から）



SK57 完掘（北東から）



SK73 断面（南から）



SK73 完掘（南から）



SX62 断面（東から）



SX62 焼土検出（東から）



P23 断面（南西から）



P26 断面（南から）



P43 断面（北東から）



P44 断面（西から）



P45 断面（南西から）



P49 断面（東から）



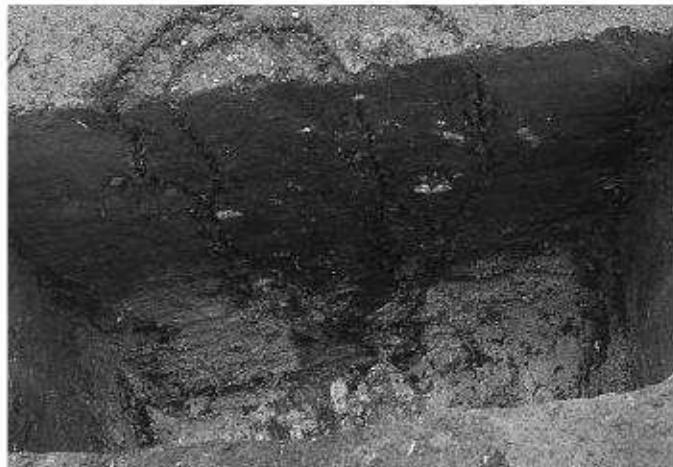
P52 断面（東から）



P54 断面（南から）



P59 断面（北西から）



P61 断面（北西から）



P3 遺物出土状況（西から）



P3 完掘（西から）



P50 遺物出土状況（南から）



P50 遺物出土状況（西から）



SR1 遺物出土状況（東から）



SR4 遺物出土状況（東から）



下層 陷阱群 全景（東から）



SK016～019 完掘（南から）



SK016 断面（東から）



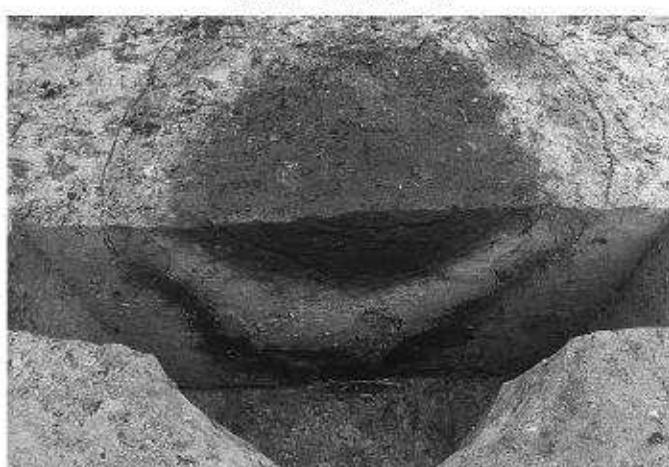
SK016 完掘（東から）



SK017 断面（東から）



SK017 完掘（東から）



SK018 断面（東から）



SK018 完掘（東から）



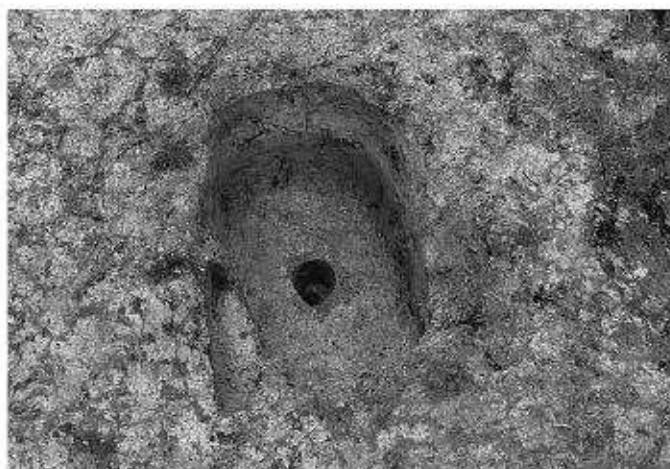
SK002 断面（南西から）



SK002 完掘（南西から）



SK012 断面（東から）



SK012 完掘（東から）



SK021 断面（東から）



SK021 完掘（東から）



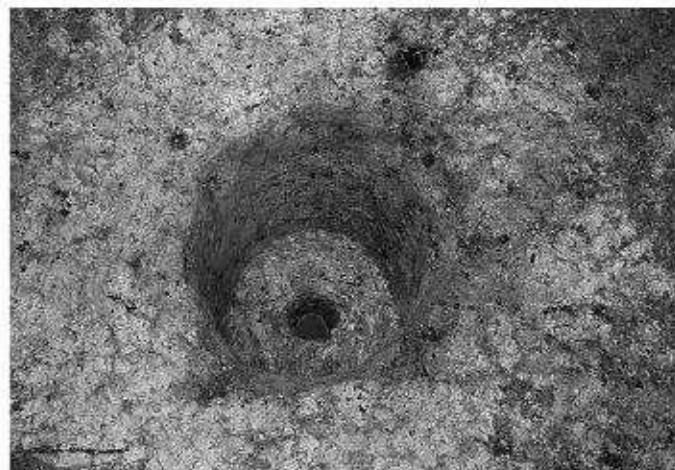
SK011 断面（南から）



SK011 完掘（東から）



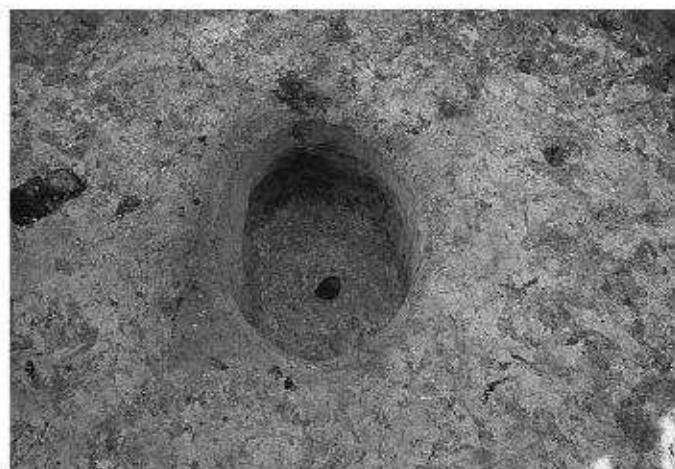
SK013 断面（東から）



SK013 完掘（東から）



SK014 断面（南から）



SK014 完掘（南から）



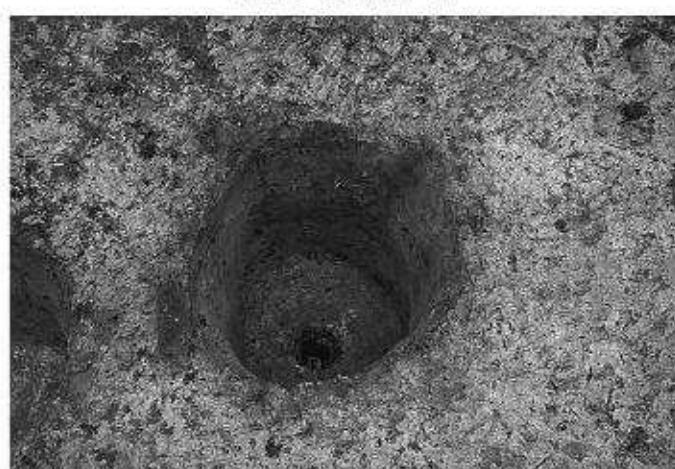
SK015 断面（南から）



SK015 完掘（南から）



SK019 断面（南から）



SK019 完掘（北から）



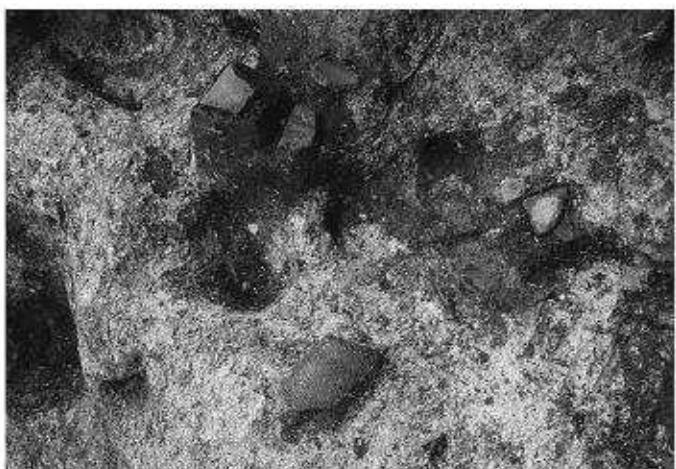
SK020 剖面（南から）



SK020 完掘（北から）



SK001 遺物出土状況（南から）



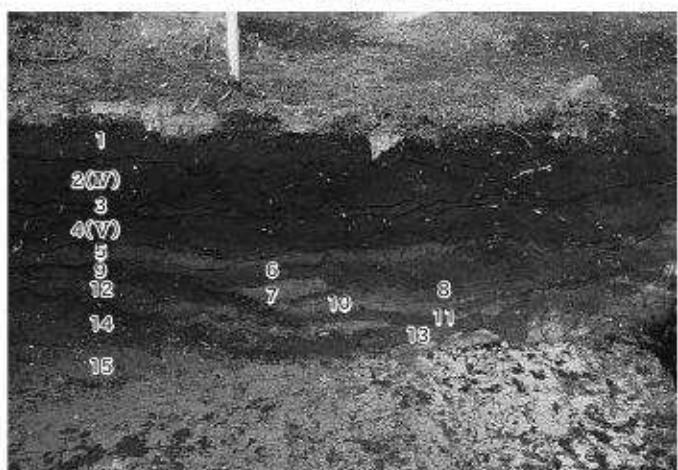
SK001 遺物出土状況（南東から）



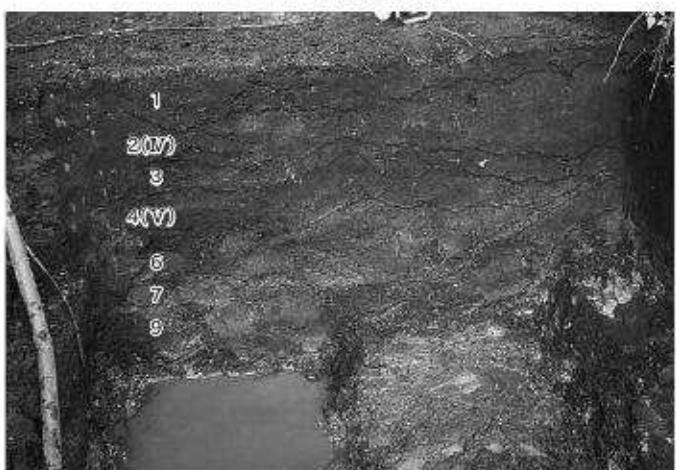
SK003 剖面（東から）



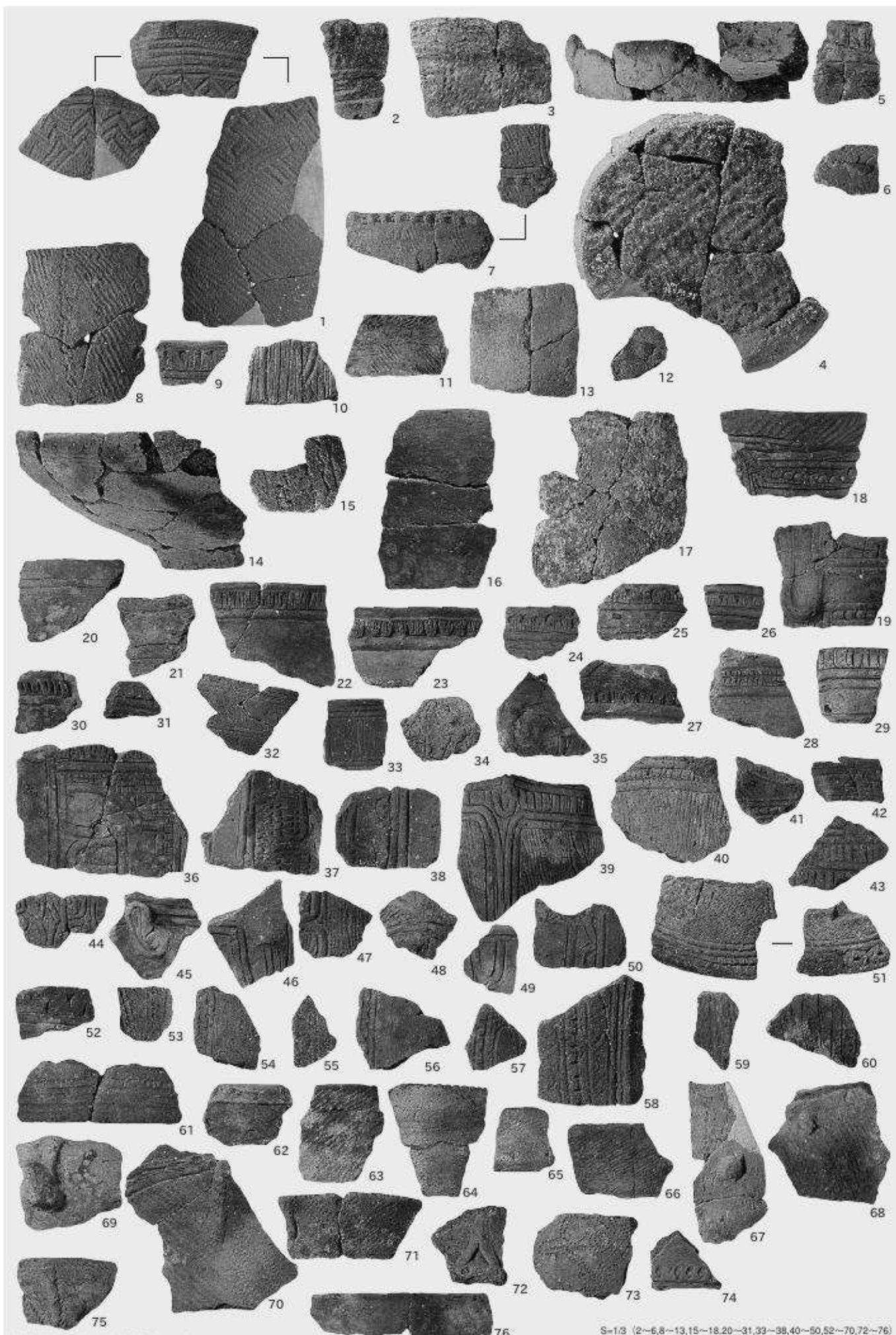
SK003 完掘（南から）



沢 剖面（南西から）

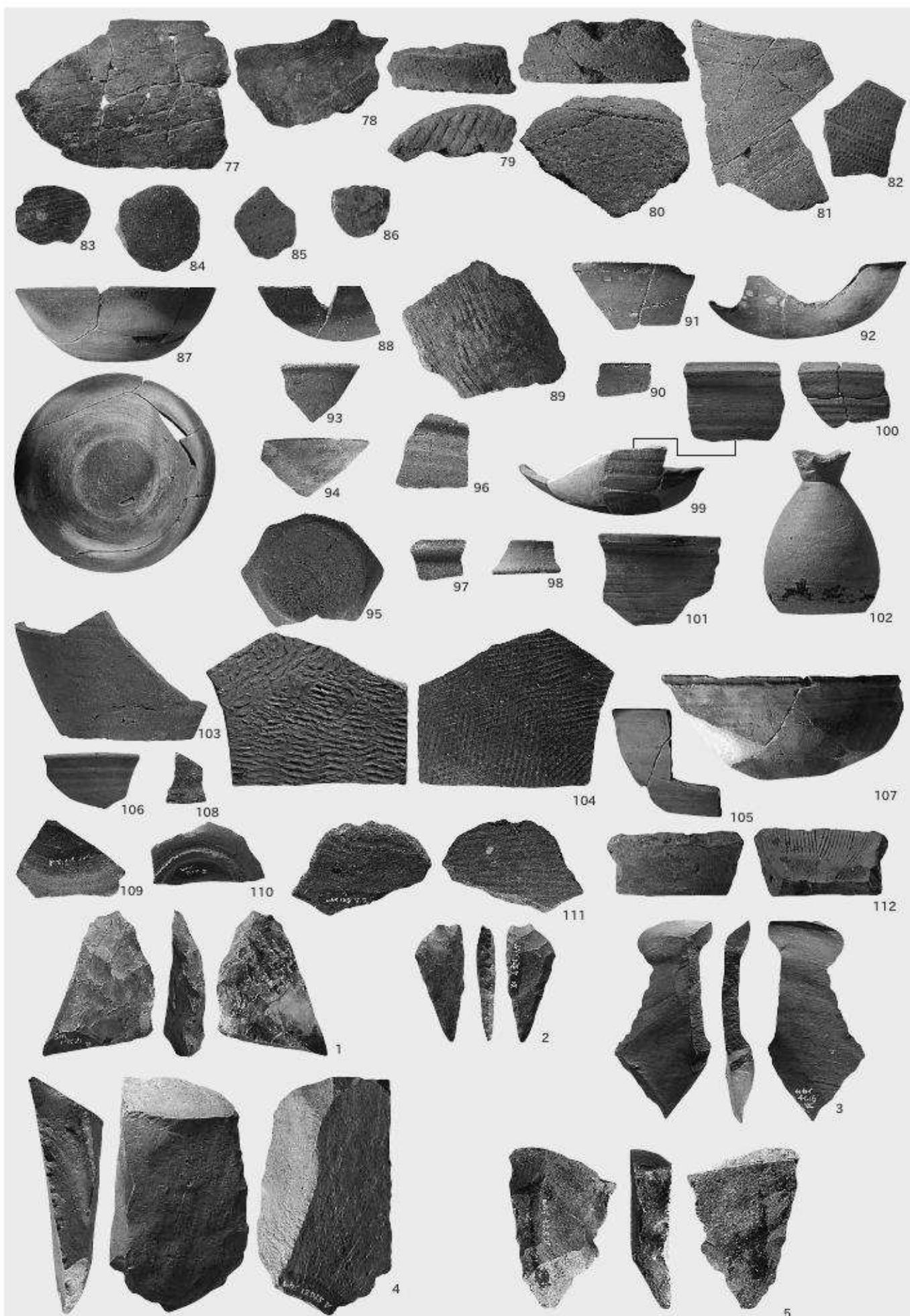


沢 剖面（南西から）



第I群土器 (1・2)・第II群土器 (3~76)

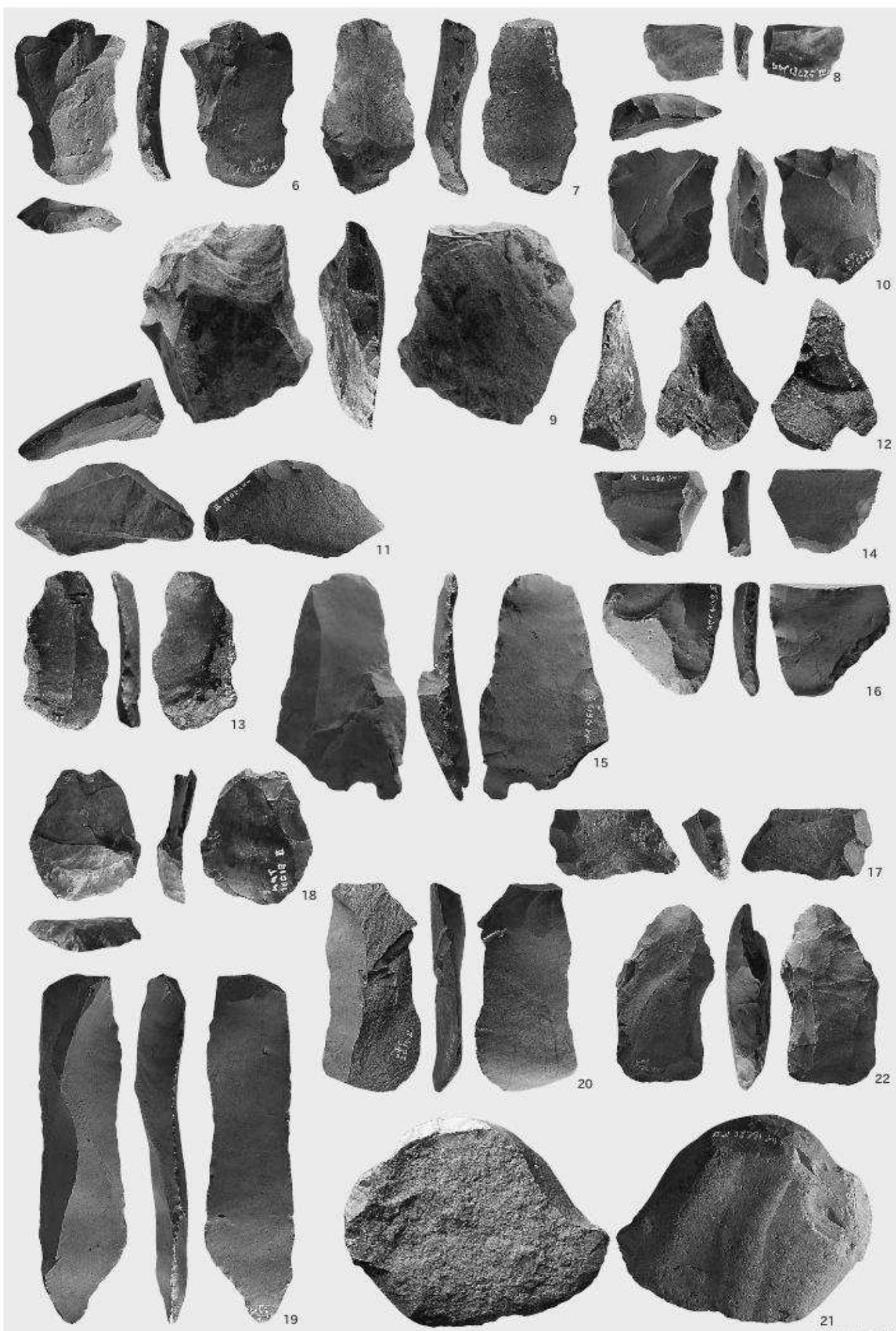
S=1/3 (2~6, 8~13, 15~18, 20~31, 33~38, 40~50, 52~70, 72~76)
S=1/4 (1, 7, 14, 19, 32, 39, 51, 71)



II群土器 (77~80)・III群土器 (81,82)・土器片円板 (83~86)・古代の土器: SI11 (87~89)・SI12 (90~104)
SK30 (105)・包含層出土 (108~111)・中世の土器: 包含層出土 (112)

石器未成品 (1)・石錐 (2,3)・不定形石器A類 (4,5)

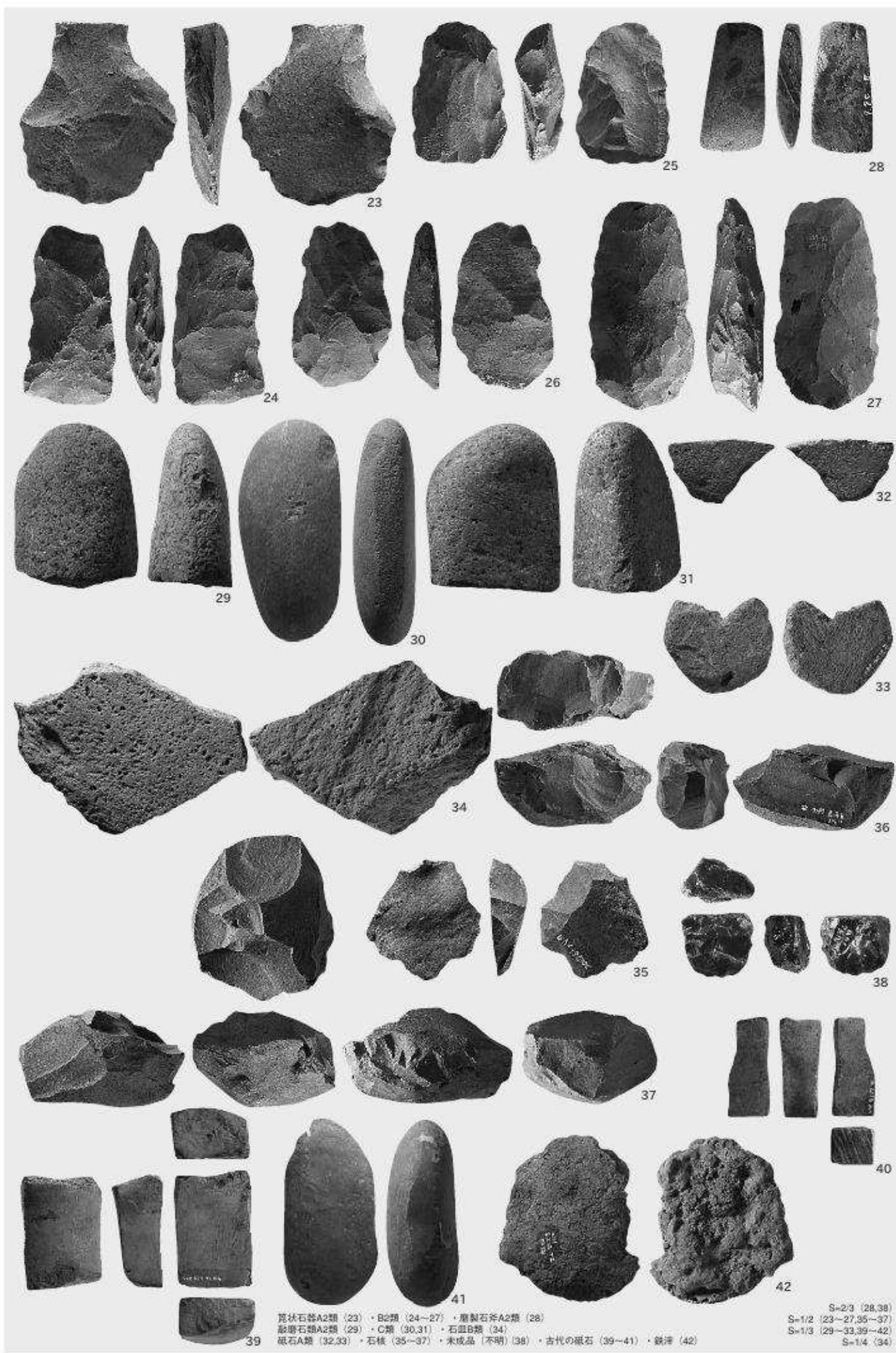
S-2/3 (1,2)・1/2 (3~5)
S-1/3 (77~98,105,106,108~111)
S-1/4 (102~104,112)・1/6 (99~101,107)

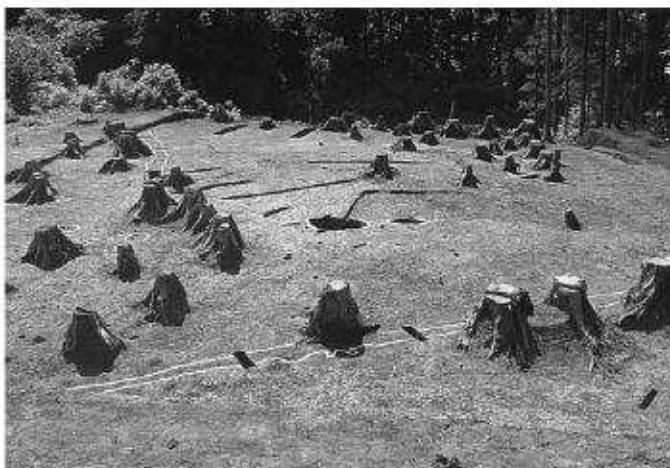


不定形石器 A類 (6~8) · B類 (9~13) · C類 (14~17) · E類 (18) · F類 (19) · G類 (20·21) · 莖状石器 A1類 (22)

S-2/3 (8,13,18)

S-1/2 (6~7,9~12,14~17,19~22)





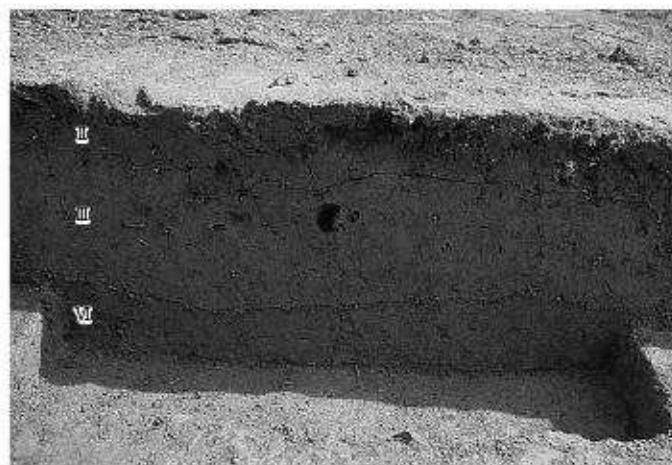
調査区近景（東から）



調査区近景（南から）



2B1・2A21 基本層序（南から）



4D6 基本層序（北から）



SK1 断面（西から）



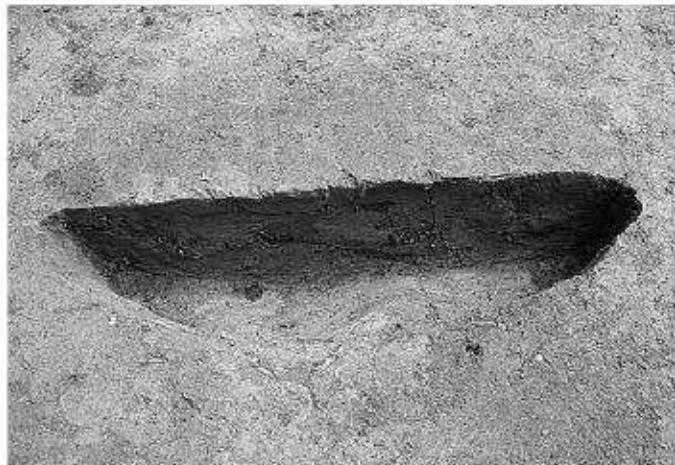
SK1 完掘（西から）



SK2 断面（南から）



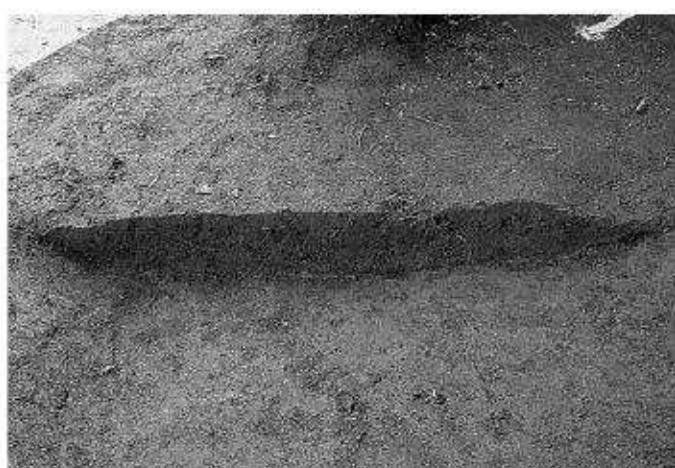
SK2 完掘（南から）



SK3 溝 断面 (南から)



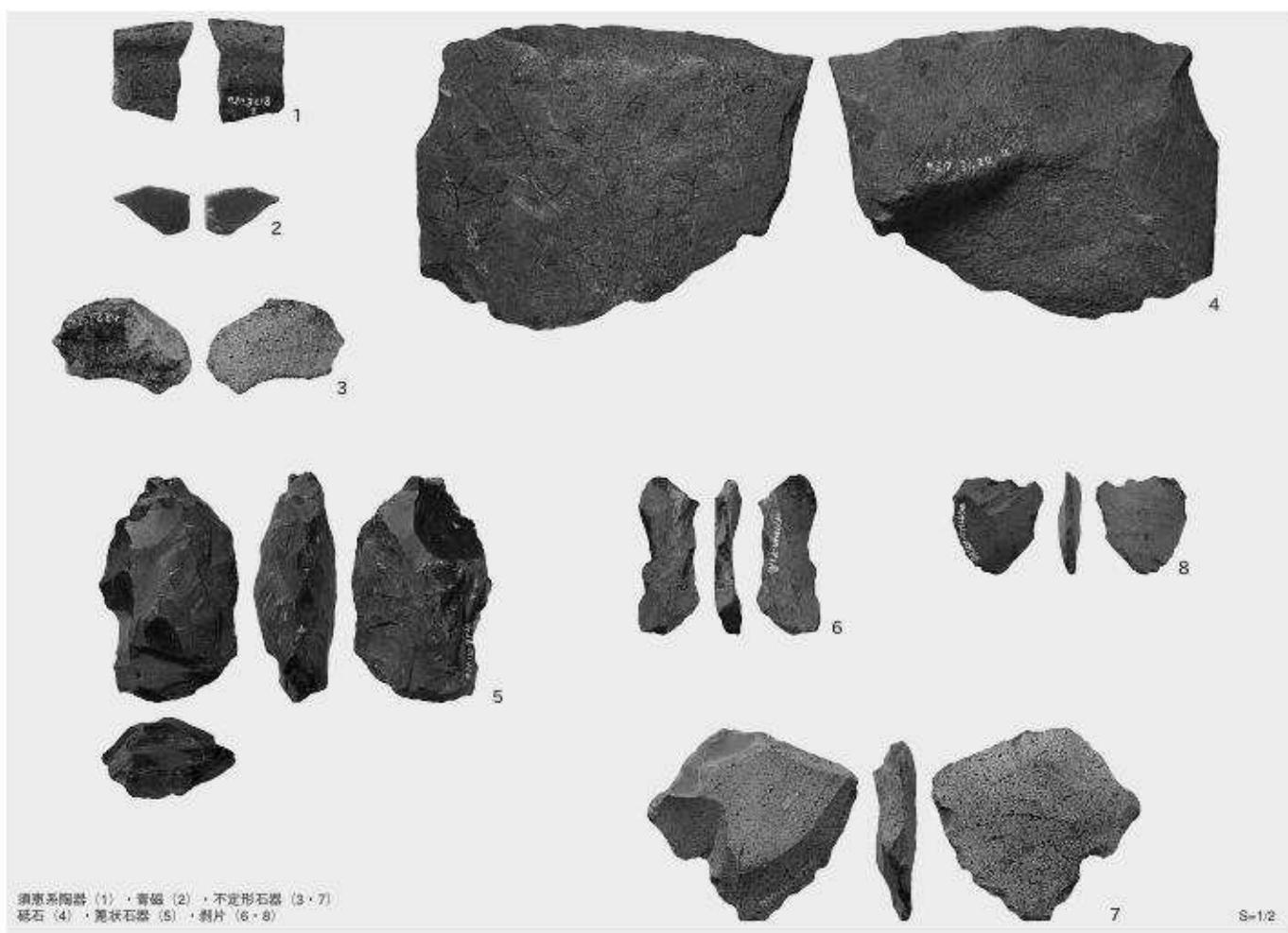
SK3 完掘 (南から)



SK5 断面 (北から)



SK5 完掘 (南から)



出土遺物

S=1/2

報告書抄録

ふりがな	むかいおおうらいせき・かみくうのなかまるいせき							
書名	向大浦遺跡・上空野中丸遺跡							
副書名	一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第222集							
編著者名	金内 元・小村正之・谷岡康孝・新井 潔・村端和樹（以上、株式会社ノガミ）、鈴木俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社ノガミ							
所在地	<p>〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93-1 TEL0250(25)3981 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>〒950-1136 新潟県新潟市江南区曾川甲527-3 TEL025(280)6620 (株)ノガミ</p>							
発行年月日	2011(平成23)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
むかいおおうらい 向大浦遺跡	新潟県東蒲原郡 大字津川字向大浦 2853 ほか	市町村 15385	遺跡番号 218	37度 40分 50秒	139度 26分 9秒	20090723～ 20091207	延べ 8,000 (上層4,000、 下層4,000)	道路（一般国道 49号揚川改良） 建設
むかいおのなかまる 上空野中丸 遺跡	新潟県東蒲原郡大 字津川字上空野中 丸4425 ほか	15385	219	37度 40分 38秒	139度 26分 55秒	20090709～ 20090805	500	道路（一般国道 49号揚川改良） 建設
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
向大浦遺跡	集落跡 (上層)	平安時代 (9世紀後半から10 世紀初頭)		竪穴住居2・掘立 柱建物1・土坑7・ 焼土遺構1		土師器(楕、鍋、甕)・須 恵器(瓶子、甕)・砥石・ 鉄滓		現在の東蒲原郡 内では初の墨書き 土器出土。
	遺物包含地 (上層)	縄文時代 (中期前葉・後期以降)		ピット2		縄文土器(深鉢、浅鉢、 台付土器)・土器片円板・ 石器(石錐、箇状石器、 磨製石斧)		
	狩猟場・遺 物包含地 (下層)	縄文時代 (前期以前)		竪穴12・土坑2		縄文土器(深鉢)・石器(石 錐、箇状石器、敲磨石類)		
上空野中丸 遺跡	遺物包含地	縄文時代・近世以降				土器・石器		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第222集

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書IV

向大浦遺跡・上空野中丸遺跡

平成23年3月30日印刷
平成23年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第222集『向大浦遺跡・上空野中丸遺跡』正誤表追加 2018年12月追加

頁	位置	誤	正
抄録	向大浦遺跡 所在地	東諸原郡大字一	東諸原郡阿賀町大字一
抄録	上空野中丸遺跡 所在地	東諸原郡阿賀町大字一	東諸原郡阿賀町大字一
抄録	上空野中丸遺跡 北緯	37度40分38秒	37度40分49秒
抄録	上空野中丸遺跡 東経	139度26分55秒	139度26分45秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第222集『向大浦遺跡・上空野中丸遺跡』正誤表

頁	行・遺物No	誤	正
19	6行目	(40)	(39)
	4行目	(100-101)	(101)
20	7行目	(99)	(99-100)
	29行目	(5~7C-Dグリッド)	(4~7C-Dグリッド)
21	17行目	(図版3-8-32)	(図版3-8-33)
	34行目	(図版3-4-7-8-33-34)	(図版3-4-7-8-34-35)
22	33~34行目	(3-5-7-9-10-13-20-33-35-39)	(3-5-7-9-10-13-20-33-24-37)
33	28行目	(図版20~22-23-35~38、 図版41~42)	(図版20~22-23-34~38、 図版41~43)
38	14行目	I類に相当する。	d I類に相当する。
48	28行目	楢原雅史(著) 2006	楢原雅史(著) 2008
図版41		包含層出土(108~111)	包含層出土(106~111)
		敲磨石類△2類(29)	敲磨石類△C類(29)
図版43		未成品(不明)(38)	五級(38)